

川柳塔

創刊大正十三年 通卷八三四号



日川協加盟

No. 834

十一月号

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私
の
一
句」

■今年中に発表された句に限り
ます。
■締切 11月25日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしく願います。

★個人 一口 二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③3/4頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月25日

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

第四十六回

富田林市民川柳大会

とき 11月2日（土）午前11時開場
ところ 富田林市中央公民館2F

（近鉄南大阪線富田林駅下車、右方向へ徒歩

3分）

兼題と選者

「苦手」

池 森 子 選

「予感」

奥 田 みつ子 選

「鳩尾」

久保田 元 紀 選

「友達」

川 島 颯云児 選

「味方」

田 中 新一 選

「眩暈」

住 田 英比古 選

「晩成」

橘 高 薫 風 選

★各題2句 午後零時半締切

会費 1000円

懇親宴 3000円

主催 富田林市教育委員会

後援 富柳会

川柳日記

橘高 薫風

九月二十七日 川柳塔發送の日、十時

過ぎ川柳塔社事務所へ。鍛原千里さんの中に笛生・美津留・金太・タン吉諸氏がフル回転の作業中、一冊を取り上げる。

編集を担当していた時は、この一瞬、今よりも心ときめいたものだ。表紙の色の上がり具合から大凡全体の出来までが分かった。次いで美研アートへ。榎谷寿馬句集『銀海』が出来上がっていた。感無量で四日間の旅に発つ。犬山泊り。

二十八日 明治・大正・昭和の川柳史を飾った人々「東西諸大家染筆川柳展」を見る。若松屋千一庵ギャラリーで主催は佐藤一粒氏の主宰する鶴かこ川柳社。終戦直後から山田祥園氏（すげ笠川柳社）の蒐集による揮毫作品や書籍、写真、胸像など百点を越す貴重な資料が揃い、富山入りの回り道をして立ち寄った甲斐があった。句と同じに書も又人間である。

魚河岸で見た東京の素晴らしき 久良岐

川柳と号す其他に伝は無し 剣花坊

思ひ出の夫婦茶碗に怪我もなし 周魚

身の底の底に灯がつく冬の酒 三太郎

お揃いを着せても家の子が目立ち

雀郎

秋さらり銀のふすまの物おもい 路郎

西陣の男の襷二十年 水府

女連れみんな座席があつてよし 紋太

二巨頭、六大家の遺品である。たのし

い川柳寄せ書の半截があつた。

人生に苦はなしおもふだけのこと 鞍馬

子沢山僕の枕は何処へいた 路郎

だろうと思つた 雲 がらく／＼ばかり

紋太

その中には周魚・○丸の句もある。

食満南北の絵入り染筆が数点、

くたびれた頃に丁度な富士の山 南北

の句に、絵は槍持ちの奴である。芭蕉の

くたびれて宿かる頃や藤の花

を意識して詠んだ氏一流の機知であらう。

久留美・角恋坊・五花村・珍竹林・孝

三郎・句弥弥・東洋鬼・一狂・素生・文

久その他豪華な短冊の揃い踏みである。

前日、一粒氏に

「采先生の無ければ持つて行きます」

と言つたけれど、あつたあつた

あの晩の風邪よと女嬉しそつ

が特製の額に入つて頬笑んでおられた。

二十九日 第11回国国民文化祭とやま96

文芸祭川柳大会は大沢野町文化会館で開

催された。四百人の参会者の前で開会式、

事前投句発表。昼食後にアトラクション

「金蔵獅子」の披露や当日句の披露あり、

選評、優秀句発表表から表彰式に移る。

本社関係では誌友の地元増田紗弓、新

改め鷺見正子のお二人が榮譽に輝いた。

文部大臣奨励賞

立ち直るチャンスを得た平手打ち

富山県 増田 紗弓

大沢野町実行委員会会長賞

一発の銃弾が消す蟹気楼

鳥取県 鷺見 正子

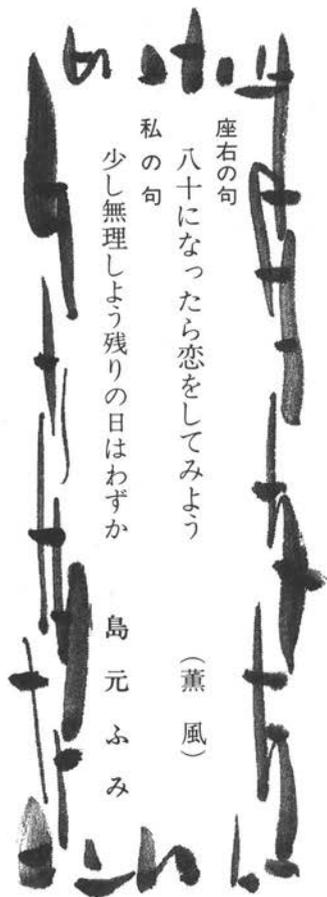
大会終了後、富山の鯛家で鷺見正子、

但見石花菜、小林由多香氏ら四人で受賞

の祝杯を挙げた

犬山の一粒さん、富山の杏花・ひかる

・紗弓の皆さん、お世話になりました。



座右の句

八十になつたら恋をしてみよう

私の句

少し無理しよう残りの日はわずか

島元 ふみ

(薰風)

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵 / 表紙・直原玉青

■巻頭言 川柳日記	橋高薰風	:(1)
私の短歌	仁部四郎	:(2)
川柳塔(同人吟)	橋高薰風選	:(4)
自選集	橋高薰風	:(44)
大空のころろ(70)	東野大八	:(48)
川柳の群像 金子呑風	高杉鬼遊選	:(52)
水煙抄	菱田満秋	:(50)
秀句鑑賞「同人吟」	肥後和香子	:(79)
水煙抄		

私の短歌

仁部四郎



「仁部さんは二足の草鞋」と知人が言う。

佐賀新聞、朝日新聞佐賀版に読者文芸欄があり、毎週のように、短歌、俳句、

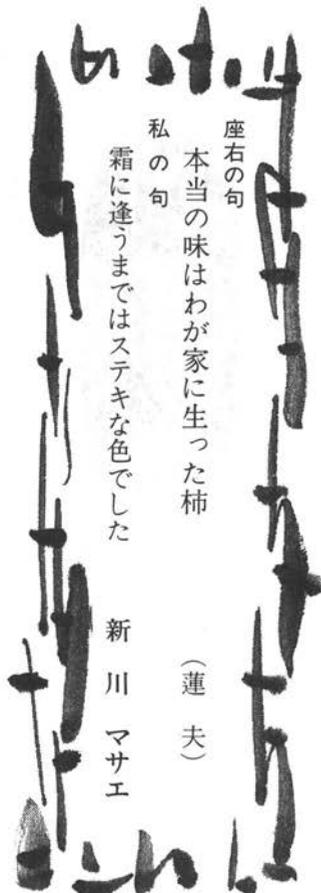
川柳へ投稿する。短歌やそれに俳句も時には活字になるものだから「二足」と言われる次第である。

昭和五十四年十二月に、「ブーツなりリーゼントなりヤングなり」が北島醇酔選で活字になってから佐賀新聞との縁が始まり、やがて唐津で新潟回天子がやって来た川柳会に入つてということだが、遅々として進まずで二十年近くも経過している。

短歌、俳句も同じ紙面に載せられているから、短歌も俳句も読むわけで、季語というものは、とてもたいへんだなと思いつつ歳時記を買つことになるし、短歌の本も買った。

読者文芸に、二股どころか三股もかけるとは浅ましい限りだと面詰されないのを、もつきの幸いとばかりにハガキを買い込むのだが、定年退職四年目の今年は、どうも病状がすすんでいるらしい。人口八十七万人の小さ

渺湖抄	小出智子選	(76)
茴香の花	西出楓榮選	(80)
「親	赤川菊野選	(82)
一路集「賢い」	田中透太選	(82)
「恐れる」	小砂白汀選	(83)
初歩教室「火」	吐田公一	(84)
各地柳壇(佳句地十選/山下美津留)		(86)
柳界展望		(97)
■句集紹介	都倉求芽	(98)
『正本水客とその仲間』	宮園射月芳	(99)
櫻谷寿馬句集『銀海』		(101)
十一月各地句会案内		(102)
■編集後記		



座右の句
私の句

本当の味はわが家に生った柿

霜に逢うまではステキな色でした

(蓮夫)

新川 マサエ

な県で、姓名も特徴的だから存外知られて
いるらしく、ああ、あの人ですかと言われる
こともある。こそばゆい感じは当然だが、現
役(高校教員)のころの生徒さんから「読み
ました。楽しみにしています」と言われると
頬がゆるむのは、どういう心理だろう。
川柳は、十七音字の枠がやはり厳しい時が
ある。短歌になればあと十四音字ある。
川柳は、「人事」が主だから、私の短歌も
やはり、「人事」が主で、「自然」を題材にし
たものは少ない。川柳の発想で、川柳の材料
で、私としては十七音字に納まらぬものが短
歌になる。せいぜい、一週間に三首か四首の
作歌で、そういう作歌態度に批判を短歌専念
の人からは受けそうだが、本人としては相当
に楽しんでいる。
ご笑覧くださいで歌を出します。
○卒業の兄に替わった僕ですと
新聞少年手をあげて去る
○あの頃と言えば全ては免罪符
同窓会に恩師と笑う
○こわごとと金利の話続けいる
趣味の講座の仲間残りて
次の二首は川柳を意識していないが:
○新造の連絡船は懐メロを
島の裏まで聞かせて休む
○陽炎を移動スパー截り来たり
公舎の主婦は魚購う



橘 高 薫 風 選

青森県 田 中 叶

逆立ちをして引力を思い知る
あなたとの間に越せぬ川がある

呉 市 横 田 英 詩

豆の木に登るリストラ対象者
リストラだ ネコふんじやった 死んじやった
使用済みカードの穴にどこか似る

小さな秋 拾った犬がいなくなる

ゴミの日のゴミ早朝のぬいぐるみ

傾いて時空の中にいるポスト

ネクタイに吹く秋風ちから少し湧く

逆らわず母といっぱん木を移す

海南省 三 宅 保 州

一日と二十四時間とは違う

天気予報も楽観論と悲観論

ゴキブリも精一杯に生きている

看護婦が走り回っている不安

落書よきつと成仏しろと消す

添うて幾とせとぼけ上手はお互いさま

先生も消しゴム持つていらつしやる

挨拶が済めば噂に取りかかる

米を研ぐ夫のためであるもんか

ポストまで遠くてご無沙汰しています

米子市 中 井 ゆ き

胸の内窺もだんだん年を取る

将来も漫画で決める漫画の子

一枚のハガキの芸にかなわない

秋風の中 友だちと待合せ

すすき野で足を止めたら化かされる
のらくろが上等兵で生きている

堺市 近藤 豊子

朝顔をかぞえ終わって眼がさめる

朝日みてあさがおをみて朝日みて

あさがおの蔓にんげんをうるさがり

朝顔のフレンチカンカンまぶしいね

あさがおへ挨拶おくる秋の風

咲き終えてあさがお睡る兎もねむる

賢治ケンジと讀えて居れば恙なし

台風参上 昔が戻る釘の音

Was I kid 夢ゆめ ユメのオルゴール

かくれんぼ南蛮ぎせる見つけたり

地獄また面白からんこの暑さ

田の蛙 衆生の声と覚えたり

歩くこと忘れたヒト科病んでいる

たっぷりの墨で私は生と書く

山が死ぬ次は人間かもしれぬ

落ち着きがおまへん僕のサングラス

減反地お陽さま笑顔忘れない

捨てられぬ夢ひとつだけ抱えている

岸和田市 岩佐 ダン吉

生駒市 麻生 アート

唐津市 田口 虹汀
缶ビール美味そうに飲む聲が来る
傘寿過ぎたら妻も夫も放し飼ひ

良い米に負けちゃ杜氏の名がすたる

ひと眠りすれば兎もしゃんとなる

霊長は焼死鼠は逃げていた

牛歩開けば寿馬先生の貌と声(櫻谷先生を偲び)

堺市 桑原 道夫

君の瞳の中の八百八橋かな

木琴をたたいていと腹が立ち

金網に近づいていくにやにやと

突っついてみようか君の酸っぱき顔

抽斗にひそと三日月しまいけり

波が打ちあげしもの皆ゆるさるる

和歌山市 川上 富湖

ムンクの叫びにいつでもなれる水鏡

榊風沐雨あれは昔のちちとはは

数えたら恐いチリメンジャコ的眼

鳳仙花弾ける油断させといて

女同士軽い約束受け流す

メロンぎつしりパンフレットの冷蔵庫

高槻市 川島 諷云児
脱皮するたびに尻尾が生え変わる

針ほどのミスを大きくする他人
名も実も捨てて火宅の人となる

退屈を肴にひとり爛ぜまし

血のにじむ苦勞も知らず結果論

老化ぼつぼつ置いた眼鏡がわからない

羽曳野市 榎本吐来

エキストラを楽しんでいる祭り笛

わが家にはまだ口論がある温味

瘦身の親爺の茶碗だけでかい

台所の音 確執はまだ続き

喫煙コーナー人の好い顔寄せ合って

孝行のしそびれ吾が子には告げず

寝屋川市 江口 度

野次馬のように集まる消防車

倦怠期 平行線がなお離れ

福耳の地藏 無尽のお手伝い

私にも出来ますエラーメッセージ

クローラーの役目は済んだチンチロリン

枯葉散る蟻にことわりなしに散る

伊丹市 山崎 君子

雨やどり茄子のむらさきポリバケツ

朝ドラは複雑すぎる愛ばかり

人恋し電話のベルに救われる

紅葉には早い湯豆腐南禅寺

連れもよし栗や茸に招かれて
ばら満開あしたの雨も欲しいけど

大阪市 坂東倫子

落葉掃くもう迷わないことにする

蟬も来ずちちろも鳴かぬ街に住む

躁の日の電話の声を賞められる

父は風 母は日だまり子等は猫

人生の余白を染める色探す

老いた母を騙しだまして別れた日

出雲市 伊藤寿美

愛読書今絶版の文庫本

睡蓮に見とれて今朝の鍋焦がす

才隣へ行ッテイマスと妻のメモ

夕陽浴びる野良着にいつも声を掛け

わたくしを忘れた老母の子守唄

消印は八月とある古手紙

和泉市 岡井 やすお

国連の出て来ぬうちと米走る

足もとに火で沖繩へ連帯す

政治家の157毒ご用心

託児所をお作りなされパチンコ屋

苦勞性子らに卒業すれば孫

爽秋は此処かしこにとJR

鳥取県 鈴木公弘
棺桶の釘ていねいに打ったかい

消した火の気になる風が吹いている
目は開けているのに何も見ていない
陽の当たる樹になるまでが難しい
五十歳まだ夏の絵を描いている

鳥取県 新家完司

秋の雨ふる降る哀しみは海鼠色
ひとり問いひとり頷く秋の酒

虫いっぴき死んで小さなほとけさま

百万巻の念仏よりも虫の声
日本という小さな壺に倦みて候

豊中市 滝北博史

町内でぼくが一番年長者

夫婦です梨もりんごも半分こ

弱い運タバコ吸うのをやめてから

秋彼岸 来世はメガネ要らぬよう

遺言は家計簿焼いてくださいネ

弘前市 斉藤 荔

熊も出て食べてるりんごなら旨い

賢治先輩 雨ニモマケズ有り難う

ピアノを閉じる鈴虫の刻となり

縄文の丘で石笛吹いており

紫陽花の藍にこだわり草木染め

松原市 玉置重人

辞めてから自分で決める時間割り

キタミナミどっち向いても食べもの屋

恬淡と生きるつもりでいるのだが

褒められた歌がボトルをキープする

鮮やかに潰かった茄子に如くはなし

西宮市 西口 いわゑ

かなかな蟬同じ哀しみもつ同士

ぽっかりと雲 天女の館かもしれぬ

健やかに育って親と遠く住む

過去たちはとても優しい顔をする

萩の花また会えました仮住い

和歌山市 西山 幸

恨みつらみを書いて宛名はまだ書かぬ

日記帳の余白の浅手深手かな

結末を夢の中でも考える

神様になぜなぜなせを繰り返す

問をして一日を閉じるなり

鳥取県 大角正道

自由があつて公園が好きになる

母の胸には私の好きな音がある

百パーセントの願いを込めている名前

おこった顔を自分では見られない

口笛を吹いたら翔んでしまいそう

今治市 野村京子

薬屋さんでついでにお米買ってくる

曼珠沙華逆縁の子の涙かな

二十一世紀へまず拝啓を書いておく

これからもよろしく湯呑みふたつ置く

生きるってたのしい今日も米を研ぐ

摂津市 井上源一

断酒して古希の砦に石を積む

迂回路を探す陣痛の嫁を乗せ

嫁姑いちごパフェに馬が合う

独り居の気ままな酒と詰将棋

夾竹桃の白さよ友の骨拾う

大和郡山市 坊農柳弘

邪気払いやつと百巻経を読む

人間一人生きてる証嘘を言う

孤独には慣れているはず手酌酒

帳尻は合っているのか赤い羽根

湯煙に妻恥じらいのフルムーン

唐津市 山門幸夫

味噌汁に慣れた古武士の朝支度

千切れ雲あれよあれよと消えて逝く

落葉掃く柾目にふつと亡父が居る

早咲きの菊一輪を供えけり

耐えました露を下さい草の虫

唐津市 山門タミ

賢くも偉くもないが我が子なり

双六の振り出しきかぬもう傘寿

完熟を待たず柿栗親ばなれ

満月や月の砂漠を歌い出し

三日月に冷氣しん身づくろい

和歌山市 山田高夫

蛇口からぼたりと漏れていた秘密

戦列を離れひもじい日がつづく

喪服着た女の裾が生臭い

ゆえあってガラスの靴を置き忘れ

代診でいつもどおりの処方箋

和歌山市 宮口克子

そうですわね男女のイロハ解けるまで

葛藤のわたしに友というお酒

錯覚で生きていることに気付かねば

踰いても宿命ずつとついてくる

骨のある男を乗せている小舟

寝屋川市 堀江光子

秋近い海と半日過して来

同窓会頭数だけ舌の数

自信家のトップが通う易断所

箸とればよいようにして帰り待つ

真実の舌はこれほど回るまい

出雲市 岸 桂子

羽曳野市 吉川 寿美

押しピンの責任感がにぶくなる
烈しさも曆に溶けてやがて秋

今日生きて赤い夕日をかみしめる

小さい権利一円玉もわたくしも

良心を捨てる吊り橋ゆれている

八尾市 高橋 夕花

ペランダにたった二人を干している

雑巾を四五枚縫って書にこもる

陶器市余生みつけた朱の茶わん

ふり向けば他人になった里の町

渡る橋わたれぬ橋もえにしなり

鳥取県 太田 幸枝

丸芯の亡夫の手紙抱いている

エネルギー絞り出したよ円い顔

旬の物のせるお皿は白にする

健やかで干す暇もない旅かばん

背をむける人は勝手に好きにせい

倉吉市 松本 よしえ

労りの酒がほどよく温かい

あすなろが来てどんぐりが揉めている

一本の葦で流れがままならぬ

のんびりと輪をかく鳶の鋭い目

病室で見ている青いアドバルーン

後編のテーマへ眼鏡かけ替える

昏れやすい坂で向い風に遇う

風呂敷に包めるほどの哀なのか

その角を回ると踏絵置いてある

凍土に父の深い轍の跡がある

竹原市 岩本 笑子

昔話の中にとつても強い父を置く

迷ったら来いと渚の松が言う

回転木馬よかつては少女だった妻

海までをさも楽しげに筏舟

悟り切った姿で花は散るのです

枚方市 前 たもつ

日の出前の山に向かって願いごと

乳母車押してコースに錦鯉

お花屋さんになりたい孫と手をつなぐ

貸農園へ軍手ダースで買ってくる

教え子の笑顔に会ってうまい酒

弘前市 高瀬 霜石

もの差しの尺度が違う許されよ

席譲る姿 高倉健に似て

ハードボイルド男は背なで勝負する

この人に看取って欲しいふたり旅

引越しをしても床屋は変らない

熊本市 永田俊子

なだれ落ちた歲月火口壁の傷

火口近く商う人のいくさ傷

風になびかぬ紫式部草の自負

命はじけて輪廻知つてる鳳仙花

霧が囲む分校世塵入れまじく

唐津市 久保正劍

謝罪より補償が欲しいカイワレ菜

ご期待に添うよな顔で迷わせる

パラダイス与作の斧に錆が浮く

援助交際野心が無くて誰がする

活性化顔も心も脳漿も

唐津市 仁部四郎

写真師を呼んで卒業五十年

酒煙草止めて日記が埋まらない

兵隊の数を揃えて罨に墜ち

頰杖に机そうかと言ってくれ

二人っ子統計上は国が死ぬ

唐津市 山口高明

豚足へかぶりつけない恋半ば

何処でどう生きてゆこうと零れ種

信楽の狸はさげたやつばかり

爪を噛む癖も直らぬまま別れ

少年が天馬と翔ける星の夜

唐津市 市丸晴翠

石と対話私の羅漢探して

紫陽花の心変わり許す雨

花は友 月があるじに酒を酌む

退院の度に視界が広くなる

ホームラン五万の瞳乗せて飛ぶ

高知県 小澤幸泉

終章の第一行がまだ書けず

終末を思い明日の米をとぐ

末娘少女マンガのように生き

逝く夏に何か忘れたかもしれぬ

ほろ苦い味も残して老いてゆく

今治市 越智一水

孫と言うクスリを飲んで永らえる

一隅を照らす光の中に座す

バラの垣嚙は軽く越えて来る

なまけてはだめだと草にしごかれる

愛に揺れ揺れてわたしがはじまりぬ

今治市 矢野佳雲

金箔の剥げた仏は話しよい

火遊びに懲りて戻った赤トンボ

ラッキョウの真ん中にある仏様

縄文の昔をパート掘り起し

散るちると大声あげて散る落ち葉

松山市 白石春嶺

人間の奢り怠けた足にする

米の値を知る路地裏の低い軒

小春日の檻百獣の目が柔和

いつ書くか地球を救う処方箋

度の強い地酒が売れる漁師町

香川県 工藤吟笑

夜の道心を読まれそうな月

兄弟はなくとも山と川がある

絶やさない笑顔の母にある苦労

押し掛けの妻は今でも気が強い

只会釈だけしていった老遍路

香川県 木村あきら

紺碧の海に浮いてる双子島(白鳥中央公園薫風碑前に佇ちて)

世界地図少し赤茶けたと思う(公書)

凶に乗るとヒヨツと泥舟かも知れぬ

懸命に生きたと自分史に書こう

八十年我が人生に悔いはなし

香川県 川崎ひかり

正直に言えば言ったで叱られる

明日へのメドがたったか高軒

保険屋が私の生命査定する

真実を知っているから落着かぬ

袖の下貰うと歯切れ悪くなる

島根県 松本文子

うしろの影 誰かが踏んでいるだろう

子守唄途切れてここが日本海

あなたからの手紙はいつも雪が降る

哀しみをごくと飲むに似てビール

私も入る仏壇掃除する

島根県 小砂白汀

黄昏の鴉泣き泣き秋をよぶ

唄が好きスポーツが好き女はもつと好き

この坂をのらりくらりと九合目

けんめいに耐えております橋の桁

老妻は菩薩かそれとも空蟬か

島根県 堀江芳子

児の如く追う戦盲をほつとけぬ

金婚の朝さわやかなお茶の味

くるくると夫磨く湯のありがたさ

相合傘の夫と濡れつつ医院まで

折れぬよう支えながらに夫婦箸

島根県 堀江正朗

誕生日忘れぬ息子と乾杯だ(満八十四歳)

人は人 戦盲らしく生きていく

ここからは今の見えない僕の負け

今いまを模索 戦盲日が暮れた

風冷えて秋は険に点滅す

蛇踏んだ女きらめく文学賞

出雲市 園山 多賀子

A型が二の足ばかり踏んでいる

紙の餌にかかる魚がたむろする
梨一つ齧る何も考えぬ

出雲市 尼れいじ

清濁の水分離器にかけて飲む

間引かれる菜っ葉明日の私かも

慇懃にかしこで結ぶ娘の手紙

誘いだらう貴女の素っ気ない態度
人間の恨みを舞っている神楽

一蓮托生誓って既に六十年

出雲市 板垣 夢醉

心より顔のきれいを選る若氣

棺にはやさしい顔で納まった

鳥取県 谷口 次男

竹光と知って抜かねばならぬ意地

毎日が大根役者のような日々

皿叩く芸も飲まねば出来ぬわざ

巻き舌が変に上手な九官鳥

下駄箱の軍靴は失せて白い靴

変わり身の早い上司に舌を巻く
慢性の上司恐怖症である

引き金の指がためらうのも夫婦

出雲市 久谷 まこと

自己主張過ぎると酒も無駄になる

花に水 愛はやり過ぎないように

鳥取県 土橋 螢

我慢してつくる笑顔のうら表

戦争に負けた記念の傘踊り

良し悪しをつけると萎む紙風船

昨日までは忘れてしまふ歯を磨く

ふたをした耳で聞いている妻の愚痴

太陽も妻も午後から雲隠れ

衣替え試練の嵐抜けて来た

この郷の狸爺と言われても

出雲市 吉岡 きみえ

鳥取県 土橋 はるお

秋茄子を嫁も姑も笑って食う

懸命に生きよう虫も私も

談笑もときぎて虫の声をきく

頭かくして尻もかくして寝袋に

秋風がしきりに誘う旅ごころ

酒におぼれて男盛りを棒に振る

手紙おとすぽとり秋の音

土蔵の鍵を愛し続けた父である

肉ジャガがほんわかスूपさめぬ距離

夢のある人間になる木を植える

鳥取県 西原艶子

ふるさとへ誘う夏の風匂う
風船のように満月浮かぶ秋

潮騒が響く真夜中の机

響き合う胸を探していた昔

残高が危険ラインを越えている

鳥取県 乾隆風

杖ついて提げる荷物が二つある

雑兵に首の心配など要らず

手鏡に消す術もない小皺なり

清貧な暮らし伝える粉ひき白

愚痴こぼすうしろに回る仏の手

鳥取県 西川和子

あの人を指してときめく秋の風

陰ひなた少しいびつな年輪だ

寄り添って歩く晴れの日曇りの日

その土に帰る時まで耕そう

お菓子屋の前で血糖値が上がる

鳥取県 幸家單車

蝶ネクタイつけて飛入り司会する

マスコミと総会屋には油断せぬ

天国に行ける呪文を読みつづけ

マスコミが動くとき震度三になる

蝶々に化けて貴男の側に寄る

鳥取県 上田俊路

父の背で男の汗が乾かない
無農薬トマトに自慢話きく

風紋の砂丘に神の私語がある

野良犬になってめつきり尾を振らぬ

語り継ぐ原爆の日の暑い空

米子市 林荒介

吾亦紅もっこり秋の風になる

台風の岬の松はまだ元氣

やわらかな笑顔に棘は見えなんだ

まだ灰皿があった公園のベンチ

明るい街だ星空の無い街だ

米子市 林瑞枝

まぼろしの花と語った谷の底

空っぽのポケットにも降る俄雨

白い波乾いた胸に打ち寄せる

恥ずかしやまだ捨て切れぬ背の葛籠

食べて吐くポストに休む暇がない

米子市 木村春枝

托鉢僧の背中に秋が語り出す

不遜にもはがき運まできめてくれ

キープした洋酒の壺が気取っている

いやな噂 梢の先の水溜に

一コマの漫画演じて今日眠る

米子市 野坂 なみ

そして今つむじ風とも手をつなぐ

お二人の暮らしと自分比べるな

ありがとうから始まる再生のドラマ

火消し壺の蓋が少うしずれていた

余命いくばく生きざまはもう変えている

米子市 茂理 高代

菊の香り亡母がわたしを抱くようだ

捨て切れぬ未練刻んで焼いてみる

秋海棠咲いていますか逢いたいね

秋匂うあの日の出逢い恋しがる

石臼ですったもんだは粉にする

米子市 光井 玲子

二人住みパントマイムで暮れる日も

父の海 繰り言なんかよせつけぬ

さりげなく傘さしかけるそれも愛

毒虫になっても守る城がある

あと少し針よ急ごう夜が明ける

米子市 青戸 田鶴

見栄などはかなぐりすてて坂下る

限界が見えているのに空威張り

息づかいうかがいながら共に住む

諸行無常昨日話した人が逝く

海鳴りが遠い昔にひき戻す

米子市 木村 富美子

ご先祖のお顔もこんな顔だろう

我慢する地球に胸が痛くなる

過去の罪日本海の波高し

健やかないびきが夫の十八番

待ち切れぬそんな手紙が来なくなる

米子市 川上 より子

スランプにすんと入る称赞の椅子

オギヤアオギヤアと轟く空気浄化音

鈴を振る梢に届く根の想い

六十路後の焰を今は考えぬ

桃太郎のような子ですと盃踊る

米子市 寺沢 みどり

太陽を産んで海鳴りおさまった

晩学の頭を霧が追ってくる

頭から叱る若さは過去のもの

海はいつも河のいたみを受け止める

中秋へ酒はほどよく冷えている

鳥取市 杉本 孝男

委せると言うてお金は出し渋る

わたしでもポーズをとれば様になる

福招く笑顔絶やさぬ母がいる

名調子居眠る隙を与えない

そっぽ向き鼻の高さを見せたがる

鳥取市 両川 洋々

性転換神よお許しなされるか
切り札を眠らす胸だ見せまいぞ
永田町一度ガス抜きするがよい
男盛り生け捕る罟の匂いだな
フロンガス地球を脳死さす気かい

鳥取市 坂田 和歌子

ひまわりも泣く時だつてあるんです
また妻が高い洋服買う予感
半日も待たせた人が高笑い
流されて子猫三匹だれの罪
不揃いの月見団子に苦笑する

鳥取市 美田 旋風

悪役が揃いドラマが見えてくる
シャボン玉はじけるたびに大人になる
終章の権威狂わす欲の虫
肩書きがとれると声をかけてくる
距離おけばときどき燃える愛の詩

鳥取市 植田 一京

見るだけでグイヤは買ったことがない
致死量にならぬ毒気を撒いておく
きつとまた逢えるつもりの手を振った
妻だけが何故かいきいき歳をとる
仲直り洗濯機までよく回り

下関市 石川 侃流洞

無医村の不安十葉摘みながら
年金へ働き足らぬ愚痴がある
したいこといっぱい老いに余白はない暮らし
子育てへ母が持ち出す鯨尺
クレヨンで孫と遊んだ小半日

柳井市 弘津 柳慶

網戸越しに自己主張する虫の声
盆休み故郷無視して海外へ
故郷の森の古木がなつかしい
引揚げの海は涙でかすんでる
母の愛心にじんとしみています

宇部市 平田 実男

外濠と内濠世間を狭くする
秋深し抜け毛一本いとおしむ
上げ底が人の心にある怖さ
子や孫の杖になりたい老いの汗
妻に舵取らせて恙ない我が家

広島県 藤解 静風

珈琲でいいねと海の見える窓
再び湾岸 海鳥の瞳が赤くなる
チチロ鳴く亡母との縁うすかりき
宮沢賢治の世界に浸る秋夜長
善いこととしてみたくなる天高し

廿日市市 林野甦光

曖昧な返事に心探られる

朝露の草踏む足の勇気づく

叢で出番待つてる秋の歌手

平等の土地から決まるお米の値

警棒を十手にすると勇ましかろ

竹原市 小島蘭幸

真夜中におむすび食べている鬼だ

守衛さんの笑顔 川柳聞いている

お祭りの後にぎやかに飲んでいる

コスモス街道秋がかけっこしているよ

笑顔美し少し赤字になったけど

竹原市 古谷節夫

ふるさとの銘酒が僕を呼びに来る

還暦をチャン付けで呼び友と飲む

止まり木で寛ぐ今宵金曜日

名月の任地の宿で酌む地酒

コップ酒おでんグツグツ煮えて秋

竹原市 時広一路

余生いま小さな積木積んでいる

一合の効能嬉し古稀の艶

眼を入れた達磨もいつか見捨られ

まだ全部私の歯だよ六十九

完成をすれば終りだから未完

竹原市 森井菁居

たまさかに逆らう僕の影法師

自己陶冶出来ないままに五十路ゆく

妻のため子のため迷うてはならぬ

助手席の指示命令は聞き流す

日々大安我が家の海はいつも風ぐ

岡山市 福原辰江

譲ったら私の彩が消えそうで

酷使した歎です休耕腑におちず

ばれそうでも一度嘘を言うてみる

八十円で盛り沢山にくる小言

傷口へ母なる日本海がある

岡山市 岩道博友

忠告がマイナス効果孫ともめ

辞任劇現場に誰も来てくれず

縁切寺遠い昔の人となる

空港で老眼鏡が引っかかり

鈍痛に耐える湿布が要る旅路

岡山市 二宗吟平

投句する事がせわしい日々作句

テレビさんすまぬ結果をみず眠り

盆踊り音頭に昔蘇り

自転車の小型びたりの足となる

流れゆく灯籠の列盆の客

岡山県 矢内 寿恵子
義兄逝くまだ哭きやまぬ蟬しぐれ
むらさきに染める女の終の章

古備前の壺に驕りの赤いバラ
昭和史の美学貧しいことばかり
現実に戻るひとりのめし茶碗

倉敷市 田辺 灸 六

老残の愛に日暮れが押し迫る
海幾つ越えて未完の人生譜
六頭身気にせず日本金を持ち
父さんの子だよ頭がみな悪い
酒飲まぬ客でおもろい訳がない

倉敷市 小野 克 枝

五十年尻尾を出さぬ白き愛
今までも坂これからも坂愛連れて
うなずいて只うなずいて父の愛
守れない約束をする花時計
車間距離とればきれいな虹が見え

岡山市 花 田 たけ志

かいわれが無実の罪に泣かされる
ひまわりの巨木へ足が皆止まり
新学期余生の趣味に鞭を当て
汗流す風呂も天日で出来たお湯
大勢で里のお盆を慌てさせ

岡山県 時末 一 灯
形骸化したポリシーに縋る老い
大好きが嫌いになって冬に入る
座りたい跛行喫茶はまた二階

影法師つかず離れず責めてくる
正論へ背けた顔の私語しきり

和歌山市 福本 英子

酸欠になるまで歩く御堂筋
淋しくて夜爪ゆっくり剪っている
友だちが来ると喋ってよく笑う
カタカナ辞典二年前のが役立たず
ゆくゆくは五パーセントで済まぬ税

和歌山市 牛尾 緑 良

善人を演じる影がやせている
とりあえず同意をうながせる腫
健康な腹のあたりがもの哀し
夫婦離に今日も見られている二人
ひまわりの種 夏の日を閉じ込める

和歌山市 木本 朱 夏

弓なりに背を泣かせて風の盆
ゆらゆらと影がのけぞる風の盆
風は雨に胸の燠火の消えやすし
愛された記憶をたたむ秋日傘
ひまわりののうしろ姿は隙だらけ

和歌山市 堀端三男

飼い主のトーンで喋る九官鳥

吉と出たみくじを抱いて逢いにゆく

こだわりをあつさり捨てるのも勇氣

無頓着を装い陰で画策する

生々流転 最期は壺の世話になる

和歌山市 桜井千秀

律義にも時を合わせる彼岸花

そのうちにと別れたままでそれつきり

宿命と片付け自我は捨ててない

居なければ気になり居ると邪魔な父

健脚に頼る泥濘続くとも

和歌山市 川上大輪

スリッパの左右を決める評論家

捨てられた処で薔薇は紅くなる

地動説は信じていないピラミッド

退屈な男も居りて街動く

生か死かカマキリ鎌を上げたまま

和歌山市 玉置当代

還暦からスタート切った二度の職

毎度おおきに口癖になる日商い

どうせなら生きる証の米を研ぐ

友からの電話活力剤になり

浄玻璃の鏡に嘘は通じない

和歌山市 玉井豊太

切りつめる魔法の力母にあり

根が深い話ゆっくり聞かされる

のんびりと秋の夕焼け浜にいる

ピンボケのネガと人生仲が良い

行く末へ卵の殻を割る力

和歌山市 池永正雄

裏ばかり見ては眼鏡に嫌われる

神様は横にもなれぬ村祭り

金色に桃色みんな目には毒

真に受けてのこのこと来た俺の馬鹿

振り返りや一本道に見えるだけ

和歌山市 福井桂香

秋風や一円玉の軽さかな

星と話そう三日月に腰かけて

好きになる罪のにおいを醸す花

善人悪人まじる風呂屋の下足箱

カラオケボックスで泳ぐ人魚の尾

和歌山市 堀畑靖子

しんみりと心も秋のいろになる

合いの手のうまさに怒り消えました

わたくしの何を残そう世紀末

無気力な午後ひぐらしが急ぎ立てる

この人とこうなる予感風は秋

和歌山市 垂井 千寿子

救急病棟 肩身の狭い病名で（入院 三句）

ベッドの上で生の法話を聞いている

売店で唆かされる不養生

一生の荷物になった嘘一つ

長寿の日 周囲を褒めてやるべきか

和歌山市 細川 稚代

蛸が啼いて新米届けられ

椅子蹴った男の背なにある美学

いっちょらの夢は誰にも話せない

美しく老いたし うれしい贈物

戦火果てチヨゴリの裾が濡れていた

和歌山市 山口 三千子

三泊四日留守の間の箇条書き（娘と東北への旅）

十和田湖をめぐる伝説聞きながら

遙々と会いに来ました恐山

みちのくの浄土金色堂は映え

瑞巖寺宝物館もありがたし

大和高田市 岸本 豊平次

八方を稲妻が裂く曾爾高原

山育ち海に憧れ山を恋い

朝顔の花の数減り虫すだく

聞き違い敵と味方が入れ変り

ありがとうを沢山言った日の温さ

生駒市 北山 悟郎

うつぶんを抑え鼻血が止らない

一步一步自分磨きに血みどろに

此の世に生き喜び今を満喫し

危険を渡る男の眼がまぶし

新聞に野球賑わすああ平和

奈良市 宮口 笛生

朝顔を大きく咲かす夏咲かす

直会なげひに坊さんみんな酒豪なり

美人でもない妹が早く逝き（三回忌）

野仏もあたりも佗し秋の風

激辛のカレーが夏を刺激する

相生市 中塚 礎石

一生を波また波の母の舟

屋上から見れば空気は少し青

病名を仮名でうやうやくもらう

隣からお皿を割った音がする

不揃いの茶碗が並ぶ沢山

姫路市 古川 奮水

マッターホルン横目でモンテローザ観る

山下りてからモンブランよく見える

舌先の軽さが人事狂わせる

もう一步進めば世間狭くなる

決断は欠伸の底に固めとく

流行が掴めぬ老いた井の蛙

豊かさが蝗やみみず追ひ払い

まほろばの里で神代に出会いけり

ひたむきに秋しています芒原

蛍光灯はつきりけじめつけたがる

川西市 松本 ただし

川西市 氏林 洋敏

来賓の大きなバラがしたり顔

世にすねていても愛しき命なり

太つてる夫婦仲良く見られてる

さえずりのように聞いているお念仏

おつうじがついて楽しい旅になる

宝塚市 中田 純次

夢でよし亡き父母に会う願い

お願いは外に祈りは内に向け

相槌は聞耳立ててほどほどに

負けながら勝ちを覚えた年の功

ランブータン髭づらながら淡い味

宝塚市 上田 佳秋

何時の日か消えるひとりの戸籍簿よ

寝返りの数だけ愛と憎がある

目刺しから意見をされる秋夜長

修羅いくど男おとこである限り

終電の居眠りだけが逃げ場です

政治家がスマートになり頼りない

戦災も天災にも逢い生きている

姑看取る妻は還暦過ぎている

自由奔放つけは必ずやってくる

休止符が名曲の味深くする

宝塚市 丸山 よし津

西宮市 門谷 たず子

萩の寺水子地藏に露こぼる

価値観の違いは言わずまらく住む

大正昭和いちずに駆けたおんな下駄

視力減退ころの奥を覗く癖

余命表プランばかりが先走る

西宮市 奥田 みつ子

本棚に明日に続く刻がある

四面楚歌 尺取虫を見て飽かず

吾亦紅 死ぬまで謎を秘めている

山の夕陽 地球減びるはずはない

遠く住む孫の代りに隣の子

尼崎市 田中 薫

暮れきって海辺をしあわせな電車

晩年や森のなかにはのぞきからくり

鮎の腹この世に残すものありや

食細き二度寝の朝の眼にバセリ

秋の灯にガラス無数の影を生む

尼崎市 春城 武庫坊

恙無く秋には秋の風が吹く
赤蜻蛉男の誓い多過ぎる

萩開くあの日が今日を生きている
クンパルシータ歳を忘れる刻作る

曾爺さんになると電話で声高に

神戸市 山口 美穂

少しだけ支えてほしい萩の揺れ
ほんとうのわたし鏡に教えられ

孝行の演技息切れ六十路

震災の地獄 眼が忘れない

灯火親しむわたしはすぐに眠うなる

大阪府 八十田 洞庵

狙われているのか僕の背が寒い
蟬ほどに鳴いて見せたい時もある

誕生日自我一つずつ減らして

みがかれた芸にはつらい過去がある

賛成をしないとえらいことになる

大阪府 榎山 隆盛
(隆改め)

霜月や喪中はがきを急がね
みどり育む土に還ってゆく枯れ葉

ごめんなさいついで母の忌忘れてた

大声で電話が歩く堺筋

真夜中の間違い電話ほっとする

河内長野市 植村 喜代

春夏秋まだ病室に通ってる
病院で命の音を聞いている

おじいさん部屋のアイドル退院し
ひと回り痩せて夫の介護する

太つても痩せてもいいね若いから

富田林市 池 森子

秘策を走らせる一秒のために
終日を遊ぶ枯葉になる前に

一匹の鬼を生涯吐きつづけ

力走をつづけて向日葵になった

一匹の蟻が格闘技を覚え

富田林市 片岡 智恵子

決めかねた事あり水の一気のみ
神様をあてにしない日ジャムを煮る

栄養価より好きなもの並ぶ膳

彼岸から父の想いが流れる

老いて今手抜き料理の味に慣れ

富田林市 松本 今日子

演奏会誘った方が眠りこけ
秋風に欲がむくむく顔を出す

いつ来ても雑草一本墓で伸び

吸殻を積み上げて聞き上手

ほほえんだ友の遺影は悲しすぎ

岸和田市 高須賀 金 太

菊の紋ぼくにはアレルギーがあり

七色の夢はとくに捨てました

爺さんと呼ぶな俺には孫はない

突っ込みとボケで回っている我が家

長いこと人間やっているのだが

岸和田市 古野 ひ で

老いひとりわだかまり持ち意地も持ち

虫歯から解放された総入歯

一日がだんだん重くなる余生

人が人裁く掟にある情け

秋の夜に聞く小夜曲にある憶い

岸和田市 原 さよ子

終戦の日に黙禱を孫とする

七十の手習い嬉し丸の数

無駄口も交せてセールス巧みです

落した切符拾ってもらう今日の運

コーヒーがお茶に変わった老夫婦

岸和田市 島 崎 富志子

そよ風が萩をこぼして訪ねくる

孫と風呂に入って裸のお付合い

鍵穴から部屋の笑いがこぼれ出る

十代に心をもどすアルバムの人

ひとり言 分別顔で犬が聞く

岸和田市 寺 田 甚 一

閑話休題まだ本論が出てこない

つまらない夏休みだよ孫輩

腹の虫抑え手ばかり洗わされ

昔なら畑でトマト丸かじり

冷蔵庫昔は庭の井戸使い

岸和田市 藪 野 けい子

お見事な達筆に頼む表札

見事なわざ相手をのせる年の功

無駄金を使ったあとに知恵がつく

老眼鏡使いはじめて四つ持ち

平成八年八月八日夢切符

八尾市 宮 崎 シマ子

しあわせな色で漬かった秋茄子

目のうろこ落さな友がみな逃げる

だしじゃことすだちが届き秋本番

虫の声が母さんの声誘い出す

意地悪へ愛で答えて勝負なし

八尾市 大 内 朝 子

日本の秋を彩る神おわす

大器晩成信じて母の席で待つ

多忙ですカブセルホテルになるわが家

よそゆきの顔を作っているのです

春の夢もう見えています花の種

八尾市 生 嶋 ますみ

とびのつた電車わたしの駅がない
ニンニク匂う夫の料理落ちつかぬ
点滴がとれて嬉しい紅をひく
泣き面も笑顔も歪む金魚鉢
甘酒をすすると胸に亡母が来る

八尾市 宮 西 弥 生

生き残るルールの中で昼寝する
水平線 地球の汚れなど知らぬ
写楽展 秋の空気にふれました
鬼千匹みな笑つてる乱気流
暗闇にもどるところの中見える

八尾市 山 下 美津留

丹頂にひとさし舞うて迎えられ(道東にて)
湿原を二百二段の上で観る
病菌は無視道東の蟹を食う
旅行者のエゴでコアラが起される(オーストラリア)
ハイウエー無料ですよとカンガル―

八尾市 高 杉 千 歩

加熱処理おふくろの味生かされる
スーパ―の手打ちうどんで昼がすみ
いちにちがやつとこさです後生楽
往く先を案じる刻の早さかな
いい顔の写真をさり気なく飾り

藤井寺市 吉 岡 美 房

年寄りに元気元氣と言いすぎる
心配をかけて長生きしてもらう
虫の声 恋の賛歌がなぜ哀し
輝いているから秋が耐えられる
国民の声を聞いている暇がない

藤井寺市 福 元 みのる

易の灯へ運のない人ばかり寄り
愚痴こぼす人には運もそっぽ向く
吉運は努力家につくとも言えず
そろそろとつきが回って来る気配
待つてみるものだな残りくじ当たる

藤井寺市 田 中 透 太

男ひとり秋刀魚さんまで飽きてくる
花ざくろ何を聞いても知らん顔
ゆっくりと時の流れを見ておれず
どこまでが本当少し喋り過ぎ
原点に父と歩いた道がある

藤井寺市 高 田 美代子

雑草の中でコオロギ鳴いている
さもしさも少し覗かせ人臭し
人形の髪黒々と秋の風
滑走路がこんなに長い負の予感
晩秋や瘡蓋いちまはずつ剝がす

東大阪市 安永 暁子
お願いします追われた鳩が寄ってくる

マイクの彼は解説付きの支那の夜
物干しに女ひとりの昼の月
政治家に賢治の映画見てほしい
呑んでのんで人間の儂さに泣く

東大阪市 森下 愛論

遠雷を仰いで夏も終わりだな

地ビールもよし入道雲と太陽と

盃もジョッキもいのちふくらまず

黙らせておいて黙れば落ち着かず

香焚いて香を焚かれる友悲し

交野市 福崎 しげお

白黒もなつかし青春アルバム帳

生け造り目玉動いて気を殺がれ

防災へ0157も加えたい

老化です医者をはつきり物を言う

切札は妻の手の内日々平和

枚方市 海老池 洋

昭和史がここにもあったバナナの値

虹はもう消えて足下の水たまり

台風のニュースで直ぐに切れた品

おいでやすと並んだ菊の五六鉢

故郷の方へ向いてる赤とんぼ

枚方市 八田 敏
満七十迎えた今日の缶ビール
妻介護して何故か太り出す

木犀を刈込み秋の匂い待つ

松茸のかけらをやっとな瓶蒸し

着る見込みない背広だがまた仕舞い

寝屋川市 富山 ルイ子

時間と空間わがものにして歩く

発想の転換死をも受容する

自由を追いかけている紙ヒコキ

常識を偏見と笑う若者よ

自分の世界を失ってしまう同居

寝屋川市 岸野 あやめ

てのひらにたて蹴ふえて老いてゆく

女対女 議論が宙に浮き

夢を売る仕事はいつも気が重い

お互いに親の手本に程遠い

終極は墓に夫が待っている

守口市 結城 君子

お世辞を溶かすと真っ白になった

残る暑さをコールドスूपに逃がっている

明日の誘いどちらを断ろう

稲田の中ハンサムボーイのさらし首

疑いも持たず列なす赤とんぼ

高槻市 芦田 静江

増長天に許し給へと鬼庇う
遊学の孫に賢治の詩を送る
力作に糧をもらった文化展
太閤も菊の衣裳に面食らう
佗助が呼んだ茶室の膝小僧

茨木市 堀 良江

無器用な舌で一生押し通す
夢判断しては心配してる母
図書館で市民権持つマンガ本
テーブルの灰皿隅へ寄せられる
かたくなに母直伝の月まつり

茨木市 井上 森生

木も風もやんわり肌に露天風呂
子育ても終えキャンパスに向かう妻
秋思とて十年日記のネタがない
げそ天の居酒屋納得のいく話
また一つ健康法が目にとまる

茨木市 島 元ふみ

開き直ってまだまだ捨てたもんじゃない
思いこみ消して着る色変えてみる
チャンネルの好み似て来る老夫婦
朝ドラの夢物語大家族
自慢話が出たら適量越している

吹田市 瀬戸 まさよ

自国だけ残れるつもり核保有
失望をさせた政治にまだ未練
稚魚もまた大魚となれば自負と悔い
敬老のテレビを見ない自己嫌悪
情念の雲大空に吸い込まれ

吹田市 山本 希久子

転ってしまえば坂もこわくない
薄き情けと生きる橋の長さよ
明日は翔ぶ力を溜めて鍋磨く
日本語を解する日本海のかもめ
もの知りの尻尾を踏んだことがある

吹田市 古川 喜美子

同行二人素直に信じ歩いている
この紐を切ればどんなに楽だろう
ドラマなら男の道理わかる妻
仏前で何とすら言えぬ嘘
宝くじ当らぬように願ってる

箕面市 岩津 ようじ

終戦忌 変わらぬものは酷暑のみ
飲み屋の蚊はばかりながら町育ち
その嘘に傍点打った手紙くる
しみじみとおしっこをする病み上がり
匿すもの匿し土下座のしたたかさ

鶴彬にかわり一筆もの申す

豊中市 田中正坊

離陸より軟着陸がむずかしい

竹人形みのらなかつた恋ひとつ

真っ直ぐのはずがじぐざぐ道だった

夢は翔ぶロンドンバリミュンヘン

豊中市 稲葉真郎

新学期始まり我が家夏休み

飼い主を間違わぬ犬我が子並み

同窓会自分の座る席探す

遠流の島 蟬の声聞き京思う

粗品とはあるが油断の出来ぬ品

豊中市 安藤寿美子

敬老日今年の粗品何ですか

性分でいつも急くこと後にする

秋風に愛読してます時刻表

みなあんじよう生きやと遺言しておこう

年金のお礼でっせと般若経

高石市 浅野房子

〇一五七世情は知らずコスモスは咲く

マンネリの食事ひとりて食べている

壊される住居と知らず芙蓉咲く

胃袋に相談なしで飲むお酒

愛情を二つに分かつ白い道

煩惱や鬼も仏も絵の中に

堺市 板尾岳人

母想う鶴もわたしも秋の中

恋人の視線を追って鱈雲

秋深し好きなたひといひ五六人

百歳になつても母が居る浄土

堺市 黒田真砂

昼夜違えて眠る夫に秋微風

秋風に娘の黒髪の彩かける

一日がこんなに長い店仕舞

四十年夢幻か閉店す

お得意様の顔が臉に浮かぶ日々

堺市 山本半銭

送り火よ元のひとりの膳となり

宝石箱結婚指輪見当らぬ

妻と言う重き位牌に並んでる

もう少し厳しくしよう体重計

蟋蟀よテレビを消して聴いてやろ

堺市 柿花紀美女

定年へ妻だけ無言の喝采を

喧嘩には負けるなと祖父無責任

旅終り我が家の温い灯が見える

遠い日の夢を追つてる遠火花

天折の妹思う地蔵盆

大阪市 西出楓楽

齒に着せる衣はピンクにしておこう

とりあえず賽投げ自分試さんか

困ります太れふとれと言われても

「海燕」が消える貧しい絵の中へ

身のうちの変換キーが故障する

大阪市 渡部さと美

暑さから秋雨老いも急カーブ

老夫婦だけの家なり軽そうな

苦しみを他人は十把ひとからげ

いつからか妻やんわりと命令し

気むずかしいふりをしている照れかくし

大阪市 大塚節子

日の丸はなく祭提灯海の日に

猫の齒軋り逃げたねずみは役者です

印伝の手提げふりふり橋渡る

汗のつめたさ駆け込んだ新幹線

残り一枚猫のあくびを撮ってやり

大阪市 清水利武

空青しだんじり走る泉州路

平和ぼけ油断めさるな秋の味

沖繩に立場の違う丸とばつ

政党の改革 選挙に裁かれる

いい仕事してますなあと値踏みする

大阪市 川端一步

秋空に口笛吹いて二度の職

鐘聞いてまたふり返る五重の塔

笑う友泣く友も来る狭い家

アイヌ語を三つ覚えて北の旅

おみやげは江差追分しみじみと

大阪市 松尾柳右子

気持よく何でも食べる好青年

好き嫌い無く食べる娘の脚線美

飽食にこんなにやく飯を炊いている

携帯電 便利と不便連れ歩く

コオロギも一緒にジョギング月あかり

大阪市 清水絹子

ラジオ体操あの子この子に風みどり

往復切符買って予定くずされず

上手じょうず孫のりんごの皮まだら

齒科終りるんるん宵に眼が痛む

角とれた豆腐は要らぬ老いた寡婦

大阪市 小糸昭子

齒医者から出て来し人は只無口

争うて石を心に持ったまま

十八歳未成年だと処理される

もう一度山が動くと言つて欲し

殻つけて美学だと言ふ愚か

大阪市 梶本 落児

秘仏には時間止まったままである

朝顔も僕も納得してる色

成程という顔並べ陶芸家

マネキンの着替えみとれておりました

通天閣浪速の匂いしてますね

大阪市 津守 柳伸

ダイエット願うプールの夜行性

桐一葉 鈴虫寺のお説教

風鈴のためらいがちに虫の声

宿浴衣 柴山潟の大花火

萩桔梗 金魚に罪はない不況

大阪市 神夏磯 典子

優勝のその後札束追いかける

説教と悪口これも日課だな

三次会先輩よりももてきた

毒ぐももオウムも時は過ぎてゆく

順送り孫が見ている子が見てる

大阪市 上田 柳影

宝くじ売場しばらく考える

心では何時も感謝の昼のシャワー

六十路すぎ今更なんの花言葉

女房のへそくりさがす雨しとど

テレビ見ると呑みたくなるビール

大阪市 玉置 英子

ソムリエの気分ホルドワインから

瓜茄子の合間のメニユー紅ずいき

刈込んでバスを待つ間の陰がない

台風は海上うち涼しい風

直線の距離同じでも跨道橋

京都府 稲葉 冬葉

鈴虫の籠を洗って始業式

来年の計画にしてグラビアの海

花便箋ことさらに書くこともなし

究極の選択ガムを噛んでいる

ホトケサマコワイユメ見ませんように

京都市 都倉 求芽

大空いっぱい流水にも似て雲がゆく

若者の特権 陽の匂い火の匂い

夢はみな燃やしつくした曼珠沙華

背の丸さみんなをまとめてきた丸さ

少しずつ荷を軽くする夫婦舟

富山市 酒井 輝

四季のある国だ憎めぬ鬼も棲む

名僧が使うと活きる同じ墨

芥子の花のぞけば魔女の瞳と出会う

好きで飲み続けて逝くも弥陀の慈悲

美しい貌で専業主婦を褒め

富山市 舟渡杏花

懶巧にはなれずじまいの長い糸

ピエロだってきれいな芸がしたい日も

おしまいはどんな言葉で締めくくる

筋書に無理に合わせているわたし

いつ仏になれる石屋の隅にいる

富山市 島 ひかる

八月も終り青田の黄金色

風の盆 何もなかったように過ぎ

完熟の味は米寿の知恵と汗

山に来て私の邪気を抜いてゆく

ロスタイム許してくれぬ山の雨

静岡県 蘭田 猿 杳

アトランタの暑さつないで甲子園

八月の蟬は平和に高く鳴く

夏休み少し野性を取り戻す

確かめることにも使っ広辞苑

晴れた日は家で思案のかたつむり

富士宮市 渥美 弧 秀

この句集 私の愛の使者となる

風の中 子等は塾からわらべ歌

秋晴れにショパンが響く満ちた朝

楢山の前売券を打診され

味噌汁に仕合せを知る老夫婦

横浜市 菱田 満秋

誰も来ぬ一人住居を掃除する

処暑という暦あなどり風邪葉

花終る鉢へは水をもうやらす

ゴキブリが我が家へ卵産みに来た

温かい掌と握手して出る元氣

町田市 竹内 紫 靖

体験コースどこにつかまる震度7(防災センターで)

プラスチックの加勢華やか姉妹校

電柱にコピートを貼って犬さがし

ワープロに慣れたか返事寄越し出し

改札機 二人一体通りぬけ

仙台市 川村 映 輝

事故死でも安らかに眠れと祈られる

朝食のパンを雀と分けて食べ

女とは老いても食うことしやべること

勲章はあるが佩用の機会なし

百歳の祝い金百万過疎の村

青森県 諏訪 柳 々

ネブタ絵の影に女の秋がくる

祝賀会机の下で手をたたく

恩師から亡母の温もりいただきぬ

ひばの木で桜の夢を捨てきれず

秋の雨無いはずの脚痛み出し

何故妻は駆け抜けるよに急ぎ逝き
八戸市 島田昭治

想い出を消すまい心によく刻め

何故かしら写真の妻が少し笑み

想い出も愛着も子等に捨てられる

忘れないと泣いた女あり来なくなり

黒石市 相馬一花

お色気をよその夫に振りかける

行年に極秘の歳が暴露され

相打ちになるやも知れぬ君と僕

一升ビン立てて夫を待つ港

夜遊びは止めて今日から朝帰り

弘前市 佐治千加子

くり返すひとりの秋よ萩の庭

緑蔭にきてなおやさし盲導犬

さしかける傘の雫を分けあつて

思い出し笑いの父が振りむいた

エスプレッソひとつの意志を見せる眉

弘前市 小寺花峯

街で会う妻は他人になりたがり

縄文の土偶が語る右左

自画像が歪んで見える舞台裏

酒ガメの大きき知つてみる宴会
持ち歩く正義も少し風邪を引き

台風を知らない林檎美しい
早魃も水害もなく稲と僕
弘前市 相馬銀波

食欲の秋は野原のにぎりめし

飲む食べるテンポで農夫鎌を磨ぐ

農閑期読む書く孤独なら我慢

八起き目でプラス志向という悟り

結局は自分を磨くことを決め
弘前市 今生恵子

プラス指向後には引かぬ蝸牛

しつとりと驕りを見せぬ秋のバラ

おしろい花咲かせて女独り住み

弘前市 肥後和香子

この腕がやはりぴったりの現実

魔女入門 先ずは人參ジュースです

虫の音が欲求不満を太らせる

悪い子といい子と母が飲む薔薇酒

かまきりのメスに挨拶朝帰り

砂川市 大橋政良

疵一つ時効になってから痛む

恐い目が隠されている但し書き

別姓という逃げ場所が出来ました

仏法僧はじめて聞いた旅の宿

始末書の裏 馴れ合いが少しある

熊本県 高野宵草

友情といえばしらける親友が居る

お尻まで洗う便座で王となる

どうせならでっかい悪で楽しもか

靴下が面倒だから下駄を履く

熊本県 岩切康子

姦しい輪に入ってから謎解ける

旅靴バスに乗ったら眠くなる

座敷より居間が好みの客嬉し

定刻に散歩催促して吠える

唐津市 浜本ちよ

老いの身に七月長袖離されず

ひっそりと己一人の水墨画

柏餅 看板の草書に魅せられて

今生は知らず考古学に没頭し

北九州市 梅田宣司

愚痴るまい俺を選んだ道だから

夫婦別姓 他人の知ったことでない

条件が良すぎる辞退しておこう

尊厳死の形で松が立ち枯れる

高知市 北川竹萌

秋場所の相撲テレビに早仕舞い

八十の杖 除ける石ころのない舗装

敬老会したりされたり八十半ば

蒔き季に蒔いて楽しく秋菜園

高知県 赤川菊野

逝く時は亡夫が迎えるのパスポート

寝て起きて何も変らぬ昨日今日

おしゃべりの同じ話を聞くつらさ

独り居に余生などない走らねば

香川県 山地マツエ

正直に物言う父に椅子がない

友逝きて記念樹だけが芽吹いてる

孫の事さておき恋の話など

独り住む狭庭に秋が実り出す

香川県 成重放任

開拓が世界の地図を塗り変える

日本列島祭まつりの秋迎え

雑談がはずみ正論打ち消され

実物がきれいとか心くすぐられ

島根県 西村早苗

秋の雲ふんわり思い断ち切れず

また朝がまこと律義なパン牛乳

旅に来てまで目薬をさしている

かっこうの庭に石置く話する

島根県 佐々木鳳笙

損得も心得出した孫の知恵(内孫三歳となる)

おくれ毛の先も逢う日と知っている

まだひとを恋う気も失せず古稀の坂

倒伏の稲見上げれば空は澄み

出雲市 石倉 芙佐子

さらさらと筆が走って雪月花

風には風の精がゆらいで書道展

山並のそのまた奥に老いし人

山鳩も小げらも番で来る椿

出雲市 小白金 房子

髪染めて女袖の秋を着る

子牛の目 明日は他人の手に渡る

梅毘布茶する女の袋おび

老母の髪すいて窓辺の陽に和む

出雲市 竹治 ちかし

亡父を知る人と身近な会話する

告白も互いに出来る齢で会い

町起し故郷捨てた人が述べ

人間に慣れたヒグマの間抜け顔

出雲市 小玉 満江

満月の明かりなめに能楽堂

双肌を脱いだ太鼓に惚れ直し

口惜しくて自転車押して帰る道

八月の寒さ子ごろし妻ごろし

出雲市 富田 蘭水

アミ戸あけまだまだ足らぬ新風を

みにくい世さざえしつかと蓋とじる

ネクタイを変えて男の意地をみせ

親の背を見過ぎて育ち農つがず

松江市 舟木 与根一

保菌者のように八百屋吟味され

宿題をためて母子の夏が逝く

大根蒔けとつくつくぼうし喧しい

どこかまた地震ありそう鱗雲

松江市 柳楽 鶴丸

世界に一枚しかない私の絵

妻のこだわりは梅干一つにも

味覚の秋 芸術の秋忙しい

第二の青春ですよ六十路坂

鳥取県 羽津川 公乃

太陽に手抜きなかつた稲の出来

子の長所短所はさすが母の目だ

年輪が語るわたしの浮き沈み

人を指す爪はきれいに短目に

鳥取県 林 露杖

露草の藍の雫に星宿る

情念が弾けし熟女曼珠沙華

大根を蒔いたしつとり降った雨

饒舌に打つ相槌が草臥れる

鳥取県 石尾 かつ乃

一杯の水を貰ってからのこと

寝ころんで見る青空が大好きだ

あの山のしぐれこつちへ向きを変え

忘れたい事は吐き出すことにする

鳥取県 石谷 美恵子
健やかに生かされ母はよく祈る

手紙読むひと刻何も聞えない
満中陰まださよならの言えぬ墓
先祖から日本海でめしを食い

鳥取県 黒田 くに子
夫婦げんか元を絞ればあほらし
頑固とははかない老いの抵抗よ
向かいの家へ行くのに遠い歩道橋

鳥取県 田村 きみ子
虫の声秋をたっぷり鳴いてくれ
褒めことは少し冷凍しています
誓いのことば少し破ったのは女

鳥取県 岩崎 みさ江
息子にはへいへいへいと言っておく
ブランドの傘です雨よ降らないで

鳥取県 土橋 睦子
陽の目みた土がまぶしい貌をする
お花鳥でぼろりと落ちた鬼のツノ
恋文は赤いポストに頼みたし
破れ傘ようやく抜けた長い雨期

鳥取県 石垣 花子
秋という匂を見つげに山に行く
ドライフラワー季節の彩を抱いている

北と南 雪の便りと夏の名残り
毎日が戦争だよと母の愚痴

鳥取県 津村 八重子
太い根を育ててくれたいい仲間
台所かざる真紅のバラ一輪

よちよち歩く曾孫に白い歯も二本
嬉々として曾孫とマンガ読む幸よ

鳥取県 さえき やえ
理知的に片付けられた台所
不必要なことは言わない娘の美学
親のいいところみんなもらって孫たちよ

鳥取県 乾 喜与志
散りぎわをすでに心得酔芙蓉(母百歳)
愛してるなんて言葉が使えない
太陽と今朝も笑顔になっている

米子市 政岡 日枝子
言葉から綻び見せたお爺さん
記念樹の年輪衰えを見せず

虹だった昔もあつた粗大ゴミ
歩き出す一步に今日が係ってる
自転車で行ける程度の虹を追う
行くなら花野フランスパンと子を抱いて

米子市 石垣 花子
間違っても妻に本音は聞かすまい
此の道で父も苦勞をしたはずだ

辛い事ばかり約束させる医者
はじめての最後端唄を出した父

米子市 澤田千春
真実がふらふら揺れるので困る

しみじみと影が私に酒をつく
身の内の虫をおさえて来た峠
愛に飢えた鬼も時には輪の中に

米子市 永井三津子

芋殻焚き今年も見えぬ夫を呼ぶ
我が儘を忘れた義母の身体拭く

仏壇を閉じて私の夜となり
格式の重い扉を開け嫁ぐ

米子市 白根ふみ

もらったままで返せぬ遠いちちと亡母

あの頃は一人がこわくないベンチ

亡母が残した眼ざしで地球がまるい

夏惜しむ雲の行方が定まらぬ

倉吉市 野口節子

こまつしやくれたカメラポーズが堂に入る

石橋を叩くと少年には言えず

見つめられ何も言えなくなりました

大口マンあったと見えぬ水の面

倉吉市 最上和枝

土用干し亡母の匂いをただよわす

一夜明け逆転してた裏話

のんびりとせかせか夫婦馬が合い

平静を粧い毒をひとつまみ

倉吉市 米田幸子
慢性にならないほどに酒は呑む

一豊の妻も普通の母だった

任専もオウムもやがて蜃気楼

紫の法衣の下に夜叉が住む

倉吉市 淡路ゆり子

この元氣毎日食べる梅一つ

補聴器で優しい言葉だけを聴く

嫁取りに七重の膝を八重に折り

置き去りの母が気になるちぎれ雲

鳥取市 小谷美ツ千

青麦の匂う岬から手紙

淋しくてまた来てしまふ遊園地

合掌のかたちに薔薇の棘がある

炎を抱いて少女は父の木を離れ

鳥取市 倉益一瑤

クラシックは隣 演歌はうちで鳴り

青い目のゆかた短い傘踊り

真剣勝負 歩だつて芯を持っている

我慢袋はじけた音か皿が割れ

鳥取市 西村黙光

吟行会 酒造会社か梨畑

桃源郷妻のお酌へ導かれ

二枚目の舌がめつきり痩せてきた

断り状毛筆よりもワープロだ

鳥取市 岩原喬水

念入れた診察不安増すばかり
握り飯敗戦の飢え忘れない
住みついた貧乏神が汗かかす
終戦の汗拭くタオルなかつたな

鳥取市 武田帆雀

飯などは次元が低い碁の虜
助走路はいらぬいつでも跳び立てる
伝手も無い学もない椅子空いている
ふるさとの五郎八茶碗見棄てない

鳥取市 春木圭一郎

火のような女がひとり友にいる
ありのまま火宅に生きて悔いはない
生きるため火中の栗もよく拾う
にくい人恋の残り火まぜに来る

鳥取市 前田一枝

腹の虫 薬きらいが居て困る
厚くぬり素顔隠して会いに行く
石頭戴せる帽子が見つからぬ
樹の根っ子ひっそりと咲く蔭の花

美祢市 安平次弘道

白血病神を信じていいですか
変り身の速さうしろは隙だらけ
秋はもうそこに画廊が込みはじめ
ねぎ坊主悲しい話なら止そう

広島市 森田文

あさがおの咲き乱れて秋ふわり
暑かった夏を語りて茄子を漬け
よどみなく語りつづける快方期
お隣の苦情は猫が戻らない

岡山県 江口有一朗

命より大事なものを見た瞳(星野富弘さん 2句)
庭のばらにじつと見られていた私
人生の哀歎蒔いた種を刈る
高齢と一病五人の兄妹

岡山県 荻野鮫虎狼

灯をともし仏間ぼつりと独り言
朗々の軒安心してる妻
息子には負けまい勝負の賽を振り
捨て石に温い言葉がふと返り

岡山県 小林妻子

一部始終書いて少うし楽になる
責任回避少し男が分が悪い
年金と入れ歯は夫婦別べつに
やっぱりと言われたくないのし袋

岡山県 福原悦子

破れ傘さして内助のつもりです
凡夫凡婦 我が太陽として生きる
海鳴りや遠く近くに亡母の声
余生なお土を愛して種を蒔く

一枚の葉と眠る古手紙

岡山県 大石 あすなろ

言いたいこと溜めてただ今充電中

用意した言葉ひとつも出ぬ見舞

裸にはなれぬちいさな見栄がある

岡山市 井上 柳五郎

ど忘れは夫婦で競うように増え

いつからか妻のリモコン操作され

出席にニトロ持参も戦友会

採血の針刺す下手な婦長殿

和歌山市 青枝 鉄治

不正衝く日のえんぴつを尖らせる

金の要る話へ空気重くなる

バーゲンのネクタイでよし二度の職

前列に座り参加の義理果たす

和歌山市 田中 輝子

自分史の中へなかへとこぼれ萩

遠景の峠はいまも聳えてる

向き合うにとっても淋しすぎる人

華やかに階段おりて去った人

和歌山市 榎原 公子

同居して高温多湿ダイニング

これからを真顔で想うのはやめる

地下足袋をはいているのはどれも亡父

夕映えの明日は老いてゆくあした

いちじくの甘さと拳父のもの

控え目に生きる背筋をぴんと張り

美辞麗句だんだん舌が重くなり

こんなとき息子の声が聞きたくて

和歌山市 岩本 美智子

かなかなも聴きとりにくき耳となり

蛸にせかれて余生過ぎ行くか

曲げ曲げてまだ出るチューブしほる朝

秋天の碧の何処かにある空虚

奈良市 天正 千梢

日々好日今日も如来に甘えてる

枯葉舞う散華とも見る落ち葉

あやしい人ばかり巧みに生きている

神戸港昔の活気とりもどし

奈良市 米田 恭昌

塩辛い味も夫の炊いた粥

どっこいしよは老母の元気でいる証

一触即発ストレスためた妻という

陰陽石眺める老夫婦無表情

兵庫県 西山 八重子

虫の音に傷口癒す秋夜なが

どんぐりの中の一人で憎めない

逢いに行く胸の鼓動に月さえる

積み上げた苦勞に演技なぞいらぬ

加古川市 吐田公一

罪いくつ犯すか今日も蟻を踏む

急流もやがて素直になる大河

子の愚問母は真面目に聞いてやる

羨望の的で迂闊なことできず

芦屋市 黒田能子

この人と願ひ通りに添いとげる

丸と点打ってけじめのある暮し

思ひ出もや々と笑顔で三回忌

娘は三人 孫は三人男の子

宝塚市 吉田笑女

老いてなお歩きつづける好きな道

遠花火独り住いの部屋で聞く

ボケ進む姉を思えば寝つかれぬ

ボケ進む姉がつぶやく子守唄

宝塚市 嵯峨根保子

子の熱が下がって風が動き出す

ビー玉が切符がわりの縄電車

ひと波瀾あってもいいと思う風

相槌を打って味方に数えられ

伊丹市 小熊江美

もうお年他人に言われて奮起する

断ち切れぬ想いカラスに笑われる

戸籍課へ二人で行った日を懐う

釣り上げたつもりが別姓主張され

西宮市 秋元てる

情けなや電話一本で消える愚痴

許されぬことを夢見て来た若さ

許されて蓮の台に座る日を

乗り継いで見舞えば老母は烟に居る

西宮市 山本義子

香水をつかい残して秋深む

凡に過ぐ目の醒めることさがしてる

あの人の意外な面を見てしまひ

秋の章 素直に鳴ける虫といふ

西宮市 亀岡哲子

罹災地の楠倒されて楠薫る

夏は夏 秋には秋の雲流れ

浴衣着て足の薄さが亡母に似る

寄り添うて一塔となる無縁墓

西宮市 林はつ絵

人格は声なく人を引きつける

毒づいて胸の傷口ひた隠す

夢駆ける銀河を知らぬゲームっ子

まだ他人ごとと聞いている紙おむつ

西宮市 牧淵富喜子

待望の秋の入り口花の数

今日歩く昨日気付かなかった花

お隣と久々話す赤とんぼ

ガラス拭くツルンツルンの秋がある

西宮市 菊池 トミエ

夏負けを治してくれる赤とんぼ

許しても心に波紋まだ残り

消費税値上げ許すか町静か

キッチンは一坪で良い丸い椅子

西宮市 久保 まさお

母の忌を律義に詣る曼珠沙華

曼珠沙華今宵も照らす亡母の闇

夕顔がそっと囁き闇揺れる

闇の奥に亡母が居そうと呼んでみる

西宮市 池田 善守

同じこと他人が言えれば聞く女房

菊花展皆金賞の顔してる

菊人形今にも声が聞こえそう

お役所はきついお達しあとで出し

西宮市 刈田 泰司

夕立は大坂城を丸洗い

毒舌は老いの寂しい玩具かも

壁掛けに明日のノルマを抱く帽子

一枚の舌が己を傷つける

尼崎市 春城 年代

秋雨に囲まれていてひとりの部屋

忘れない名だが尋ねてゆく気なし

鶴首の花瓶に吾亦紅洗い

秋の夜の人声ふたりみたりゆく

和泉市 西岡 洛醉

盆過ぎて母檀山へ逝ったきり

腹の底人を食ってる鬼が棲む

風向きの少し変った妻の弁

酒一合歩幅が少し軽くなる

河内長野市 井上 喜醉

老いて追う夢の大地へパスポート

あきるまで人生妻を信じよう

片えくぼ初孫抱いてみませんか

虫の声バックに夕顔美しく

貝塚市 池田 寿美子

藍を着て藍のところに浸り切る

キャンベーンガール夢たずさえてはるばると

夕映えをひとり占めしていわし雲

五十回忌 若い背のまま夢のうち

岸和田市 芳地 狸村

はなやかな身なりでかわるお人柄

おまつりがめしより好きなお膝元

悪役が虫も殺さぬいいお顔

思い出が残るはだしの少年期

岸和田市 田中文 時

古希迎え平均寿命まで少し

鍬捨てて都会の隅で墓穴掘る

先ず否定してから逃げる道探る

末世で十大ニュース事欠かぬ

岸和田市 長谷川 呂 万

赤道祭楽しむ暇のない空路
古里の座敷一杯蚊帳に寝る

人生に果たせぬロマン追う映画

対話してみたい秘境の大自然

岸和田市 井 齋 一 齋

单身赴任 土日に妻の偵察機

現代っ子遊び疲れて嫁に行く

お金持ち本当のケチを見せつける

芦屋生れ女房敬語で口答え

八尾市 吉 村 一 風

気にしない積りの序列気にかかり

愚痴聞くとこちらの愚痴もぼろり出る

名水を飲むと体が軽うなり

気配りのついおろそかになるお酒

藤井寺市 中 島 志 洋

言い過ぎた後で付けたす誉め言葉

つまらない嘘を聞いている娘の笑顔

美しい言葉に詰まる国訛り

裏方にやっと花咲く文化の日

羽曳野市 酒 井 一 壺

片道の切符を持って出ていった

改札機ご苦労さんと通りすぎ

会いたくて手紙の中に風の詩

波風を立てた息子と同居する

松原市 小 池 しげお

親戚に大久保彦左衛門が居る
食欲の溜った固い爪を切る

はな擽んでみたら何でもない話

ティーカップ分かりきつてる嘘をつく

枚方市 二 宮 山 久

嫁がせた娘が背負う妻の味

今日生きたためによんでる新聞紙

定年へ十年切った夫婦趣味

おはよりの声がかわいい今朝の妻

寝屋川市 後 藤 黎之助

盆踊り炭坑節は遠くなり

後輩にパソコン習う熱い部屋

口喧嘩ビールの泡に溶けてゆく

道路舗装 故郷遠くなつてゆき

寝屋川市 柴 田 英壬子

山査子のスナック秋の味覚展

堺筋神農さんの笹日和

三越のライオンに会う珈琲館

雨上がりのみじの雫まで炎える

寝屋川市 平 松 かすみ

九十四歳 今日アイロン掛けてはる(妹の姑 四句)

コルセット代りペタペタ ハリ菜

お土産はいつも一口お饅頭

妹よ大事になさい家宝です

寝屋川市 北岡 波留吉

食器棚に妻のつぶやき詰めてある

思いやりに甘えず気張る母子家庭

鳴き砂の音色が癒やす淡い恋

亡妻に似たこけしが並ぶ違い棚

寝屋川市 太田 藍子

優しさを秋の七草に貰う

突然の虹を二人で確かめる

オーサンキュー甘え上手になった妻

お土産を決めて気楽になった旅

寝屋川市 籠島 恵子

白線内でおちてしまったプーメラン

立居ふるまい言葉に語尾があるように

お掃除はとりやめ部屋で虫がなく

内部告発さむい自分史書いている

守口市 森川 まさお

三瓶山 祖父から孫までみな丸い

石見銀山 家の奥から人が見る

銀山町の旅籠の部屋は開けひろげ

下駄の歯と呼びし坑夫の固い菓子

高槻市 井上 照子

月見れば芒と団子母の笑み

支えない蔓は選ばずさがりつく

敬老は優しい心信じよう

もう泣かぬ天国でゴルフする

茨木市 藤井 正雄

転居一年付箋だらけの年賀状

灯火親しむ漢字変換ワープロ機

二度の職過去塗り替える作業服

初恋の街に旅してひとり酒

吹田市 栗谷 春子

庭のせみいつの頃から声やみし

軽い爆弾ひとつ抱えてつまずかず

夏ながし凌霄花(のうぜんかずら)の名も忘れ

わたしにも茶髪にピアスの孫がいる

吹田市 茂見 よ志子

胸の奥ひとつの思い吐き出せぬ

疑心抱くと実在しない鬼が見え

枯れた気へまだ煩惱が見えかくれ

愚もつかぬ話夫を困らせる

箕面市 椎江 清芳

突然に税務署が来て寒くなる

お一人に一箇財布の紐を解く

友情に時たま怖い嘘がある

情け深い女と雨の石畳

池田市 岡本 吉太郎

あの鬼が老いてぼけ見るかげもなし

老犬と目を合わせてぞ老いたなあ

ライバルの心の中は計りかね

地獄耳持ったばかりにうつとなる

池田市 金崎峰子
待っていた雨潤いと秋つれて

魚屋がうなぎやになる土用丑

くじ運のなさにまわりが気をつかい

長寿国シルバースhirtに座れない

豊中市 井上直次

おしほりのあとは正座をくずされる

ライバルの笑顔を甘く見すぎてた

ラストまで誓った愛もくたびれる

ごつい手でやんわり握る嫁く娘の掌

豊中市 江口明光

頼もしい力で戻る盆休み

紫蘇の葉を敷いてもてなす冷ヤッコ

骨粗鬆症もう骨が無い骨がない

逝くまでは何時も主役の亡母眠る

豊中市 湯浅馬洗

じいちゃんが負けたら帰る碁のお客

肩書きが消えて相槌数を減し

O157ここにもいじめ顔を出す

ワンマンの亭主変身妻の客

豊中市 三宅つえ子

車椅子の重さ軽さよ秋の風

車椅子に賭けて守ってきたいのち

車椅子さあ乗り替えてまた五年
向日葵の海が揺れる原爆忌

豊中市 吉田あずき
行きずりの人のいとしさこれも秋

関ヶ原史話のテープに和する蟬

読みかえす度に修司の影変る

女ひとり手作り梅酒に炊きこみ御飯

堺市 吉本菁風

看板が派手で下品な街に見え

聞き分けが良くてよけいに辛くなり

好きだった人の名前を一字付け

幸せか不幸か花を買っている

大阪市 本間満津子

参ったな敵は老化と名乗り上げ

様子見たと無罪放免にはならず

こんなもんで済ませばそれはそれで済み

日々のち確かめ日めくり薄くなり

大阪市 河井庸佑

分限を弁え今日は退くとする

ユーモアの分からぬ人で気が疲れ

行き詰り初心に返り道探す

丹精にきっちり答くれた菊

大阪市 井上白峰

過去の夢まだ胸に抱く影法師

熟年の河童が陸で水を恋う

振り過ぎた尻尾今更悔んでも
決着をつけるコインの裏おもて

大阪府 稲本 凡子

何もかも未完今年は暑すぎた
意地悪されたように咲く庭の隅
旅はみちづれひとときの歩が温かい
灰色の半生語る笑い皺

大阪府 奥田 良子

旅便り砂漠の夕日見せたいと
風の駅たった二人の客がのる
偽ダイヤいで湯の宿もはめたまま
湯の里のおけさ聞える十三夜

大阪府 藤田 頂留子

都合よい解釈するのも歳かいな
伸び上がるほどに冷たい風あたり
開いたらエロテロワイロの社会面
最終バス遅れてくれて乗れました

大阪府 町田 達子

雲までが今日は私によく喋る
北南友と出かける久し振り
古都の月ひととき過去へ呼び戻す
予定くむ賢治の映画わすれずに

大阪府 川原 章久

かみさんが言えば何んでもごもつとも
鈴なりに小鰯があがる浜の秋
年巡る塗る色変る被災の児
水揺れて金魚餌かと浮いてくる

大阪府 辻川 慶子

丸印師走まであるカレンダ―
柿の種何か悪さを考える
無口でもこけし素朴な北の顔
不器用に生きて転んでばかりいる

京都市 山海 友熙

古都の道 玉砂利踏んでいる思案
人生の手引きマンガ読みふける
窮すれば雑草に問う古都の道
負けまいと亡母の形見を取り出して

羽咋市 三宅 ろ亭

孫はよく走るとどうも嫁血筋
イベントの夏は終つて秋寡黙
身に余る光栄 偉くなつて吐く
沖繩の意地が吐かせる知事と言

静岡市 安本 晃授

少年の秋空焦がすコンサート
安楽死ときどき夢の中に浮く
笑いあう話題で回る夫婦独楽
朝霧の深さに薫る菊の駅

東京都 山口 新子

包丁音のたりのつたり次女の夕
夢に出る父は笑つてばかりいる
紙オムツの多くを残し逝つた父
請求書無断無許可で上がり込む

青森県

西谷大吾

自分史のどこにも降りる駅がない

風鈴の音色が過去を呼び覚ます

天気晴朗なれど先立つ銭がない

秋茄子をだれより先に嫁が食う

弘前市

一戸ツネ

秋の溜息詩にしているインク壺

寝転べば夏の雲から羅漢さま

自叙伝にポツリポツリと染みの跡

帰路急ぐ鴉を呼んでる地蔵さま

弘前市

中山雅城

豊作を喜んでいるとろろ飯

量よりも旬にこだわる夫婦箸

額縁の中で生きている親父

平成は昭和の付けを引き摺りぬ

弘前市

岡本花匠

晴天の法話に有漏の目が覚めて

有漏心の夜明け励ます微笑仏

哀愁を疎むひとあり紅葉山

掘りあげた芋の笑顔に弾む子ら

弘前市

須郷井蛙

二日酔い僕を朝顔嘲笑い

これほど通院医師から歳暮なし

村おこし観光目当ての水車小屋

切り過ぎた爪にはかどらぬ台所

和歌山市

田中みね

闘病に耐えた証の注射痕

頭数揃えて義理を果たす会

一日一善業な死に方したいから

豊中市

松岡久留美

様々に巡る人生の面白さ

誤りを正して胸のすく思い

神仏に今日の平穩祈る朝

堺市

一瀬福一

どんな夢かけてよいやら子の世代

使わぬが殺し文句は知っている

流行の先端走る妻の見栄

大阪市

北勝美

県と国争う裁きの不仕合せ

病妻へ老いに鞭打ちする介護

病妻の無理聞く余命いくばくぞ

十和田市

阿部進

対策の遅れが被害大にする

欲しいけど我慢ができる子を育て

食い気だけまだ衰えぬボケおやじ

弘前市

高橋岳水

目論見がある日の腰を深く折る

失ったものの多さよアスファルト

一病に飼い馴らされてゆく余生

白選集

笑い皺ゆたかに今日がある余生
ころよよい眠りを誘う虫の声
何不足 男がひとり箱に住む
政界は動く国民不在にす
離婚したそうな女性歓迎嫁不足

藤井明朗

灯籠の死角でひそと夏水仙
明日は我が身と思ひ老母の紙オムツ
爽涼の秋というのに胃が痛む
残暑見舞兼ねて大会案内書
布袋さんの腹に何もかも任す

松川杜的

散歩にも片手に本の哲学者
長崎の坂でいつでも雨に逢う
起承転結 九十年は早かった
筋通す方が口髭していいない
宅急便隣に止まり秋深む

黒川紫香

青柿のころから天を意識する
屑籠に溜まる未熟の柿の数
冬を書くまい柿がたくさん熟れている
一つ残した柿は寂しい空のため
柿の木を眠らせ銀いろの芒

八木千代

健やかな寝息うつつに老夫婦
年金を上手に使う旅靴
損という短気悟った総入れ歯
売り言葉買ってあれから仲違い
二重底のような男に騙される

恒松叮紅

法要に座具は要らない座り胼胝
ケロイドを背中に生きている句友
長電話肝心なこと言い忘れ
自惚れちゃ駄目よと妻にいびられる
流転した我が半生は万華鏡

久家代仕男

藤村 女

小林由多香

赤蜻蛉小さな秋を持って来る
出稼ぎが祭りばやしを恋う月夜
豊作に案山子も踊る秋祭
誇るものないが健康ありがたい
何もせず何事もなく今日終る

辻 白溪子

正本水客

ひまはあるけれど雑用しながらず
救急車 事故を起したことはない
週刊誌と酒が車内を倦きさせず
十和田湖の紅葉を船が見倦きない
しぐさまで巧みに真似ている演歌

小西雄々

野田素身郎

木陰から敬老の日は出て迎え
ふくらます毬へ情けも嘘も入れ
哀愁を月に覚えた定年後
一生に神秘は一度だけの葬
知名度が出てきたコンビ殻閉じる

野村太茂津

金井文秋

星が降る街角わが家音も無し
憐れだナ自己顕示欲強過ぎる
思い遣り本音ずばずば言えた日も
反抗期の孫へ屁理屈ぶつつける
そこはかと秋冷頑固にも染みる

なま物は危険陰気な夏終る
エネルギー小出し息切れせぬように
野菜にも相性があり土選ぶ
万札を崩すと流れ早くなる
母さんが気をもむだけの電気代
水打って昔の友を待つ日なり
したたかに昔の自分思い出す
旅慣れた昔の事を話しあう
ぬけぬけと昔の借金のことにふれ
捨て石になった昔を悔いてない
後遺症とうとう杖をつくはめに
妻はまだやる気満々髪を染め
屈強な男照れくさそうに花を買い
僕もいづれこうなる養母の介護する
ペン持った途端脳裏の句が消える
高齢者の楽譜 休止符多過ぎる
うまくいくと錯覚させる詐欺の口
今日は勝てそうとギャンブルが誘う
手枕でテレビ見せ場を寝てしま
予約してないが朝顔今日も咲く

遠山可住

お偉いですネーとは老いと見てのこと
花散つて来年までを忘れられ
野仏に遠い昔が夕焼ける
七十のくらし引き算だけになる
効きすぎる薬だ油断するでない

波多野五楽庵

雪の塔融けては消えてゆく輪廻
内幕を支えて風邪がひどくなり
駆込寺の前で足踏みしてしまふ
ヒロインの鼓動が見える紙吹雪
津軽弁だんだん土器の顔になり

月原宵明

戯れに撞いても鐘の有難さ
水戸泉 塩を一升撒いて負け
サラ金の看板並び駅に入る
賃上げに現場いつでもストに入る
百薬の長が過ぎると目が凄む

奥谷弘朗

輝いた陰に苦勞の妻がいる
陰口の好きな奥さんにも困り
天皇と植えた松の木よく育ち
せっかくの本気に油切れかかり
どう見ても本気に取れぬところがある

小出智子

たたんであつたとおり畳んでおく形見
南向きに寝てもよいこと何もなし
鶏に起こされるのも久し振り
たましいはぎつちら舟を漕いでいる
うっかりと秋が来ているちりれんげ

高杉鬼遊

日が昏れてまた日が昇る難儀やな
石ふたつおとことおんなもたれあう
仏飯の一つへあの世ゆれている
愚直とも言われ流れに横を向く
風のなか貧しい草も生きのびる

西田柳宏子

電車来るまでは並んでいるマナー
どっちともとれる合図であとで揉め
木に竹を継ぐよな話飽きもせず
お留守番ポリウムあげて夜になる
見込まれてなつたと養子自惚れる

橘高薰風

匠とみのり
食べ初めのピリケンさんの足の裏
まあおもしろししてと三歳姉の顔
熱帯魚三原色をほしいまま(葛西臨海水族館)
不退転スーチーさんの髪の花
レモン有情むげにしぼると苦くなる

大空のいゝころ

(70)

橘高薫風

川柳は不易流行、世の移りや人情の変わりよ
うにつれて変化して行くもの、変らねばなら
ないものと思う。しかし、識者の見るところ
最近の作品より戦前戦後にかけて時代の句柄
の方が、川柳としての味、感銘度が深いと言
われると考えてしまう。

これは心ある川柳人ならいつの時代にも抱
いている想いで、過去を懐かしみながら現状
には満足出来ずに、齷齪考え迷うのである。

次は昭和九年五月五日と日付けまで記され
ている手軽なエッセイだが、あの洒脱無礙な
食満南北が「面白かった其頃」と題して書い
たものである。

☆物を食べてもウイタミンAのBのと言わな
ければならない今日では、うっかりカラスマ
で一パイものめない。

☆無論私等には解らないむつかしい議論をな
さる今日の柳界には、とてもうつつかり川柳な
んか作れない。

☆そう言うときは面白かった。もつとのびの
びしていた。ソリヤ私も若かった。路郎君と

五条へ行つて講演をした時なんど、

「オッサンはよやめて活動写真うつしてや」

なんて言われて手をうって喜んだ時代。芝

居道で流行るいろはたとえのような道齋とい

うのを一晚ブツ通して半文銭君が見物してい

た頃。ワツシヨイワツシヨイと私のうちへお

医者、芸者、新聞記者、長唄の師匠、そうし

て川柳家を押寄せて来た頃。

☆川柳十夜だと言つては水府君の家へ寄り。

京都の会だと言つては祇園で居つづけをした

り。田植の会だと言つては新町の楠瀬君の楼

上から植女に声をかけたり、扇雀君までが川

柳の会に来たものだ。

☆若久という芸者の屋形で会があつたり、す

まんだという阿弥陀池の名物麦やゆばじきな

どでのみながら作つたり。

☆私はそれでいいと思つていたのだが世の中

はもつとむつかしくなつて来たのだ。イヤむ

つかしがると言つて方が当つているかもしれな

い。何にしても古いとか、新しいとか、まわ

りの肴屋の鯛をつかまえて叱言を言うような

事を言わなければならなくなつて来たのだ。

☆歎し付焼刃でそんな事も言うて見ようと思

えて、現代常識辞典や、川柳作句辞典なども

取寄せてポツポツ読んで見たが駄目だ。私に

は解らない。言えない。論じられない。

☆やっぱ柳柳の北斎ばりの絵の描いた、娘

を口説いてはねられてあたまを掻いている方

がピンと来る。つまり古いのだ。

☆そうした柳柳は自然に亡びて行くのであろ

う。しかし、それは淋しい。和布の神事とい

う芝居や、グンタラとか柿木金助のようなク

ラシクな芝居がもう一度道頓堀で見られな

いだらうか。

☆五十年追善になつた初代延若のような奥行

のある役者はもう出ないだらうか。

☆しかし若しも内容ある新らしさに出つくわ

したら、どんな古い男でも無条件で受入れら

れるのではなからうか。

☆あむないあむない、議論なんかするのは

なかつた。

☆面白かった其頃を思い起こして何だかハカ

ないような気になつてとうとうこんなものを

描いてしまった。

「面白かった其頃」の川柳界の様子も面白

いが、最後に「内容ある新しさに出くわした

ら」とあるのに、深く心をそえられる。

川柳太平記 (222)

川柳の群像

金子呑風

東野大八

「金子呑風を知る人は、その当りの柔らかさ、礼儀の正しさを挙げる人が多い。また、この人ほど伝統川柳を標榜し、実行した人も

珍しい。かたくなに新しがりやを排し、川柳の本筋は伝統以外にないと決めつけて、この道ひとすじに生きつけ、84歳の天寿を全うするまで難解句を嫌い、母ものを好んで作句した川柳の虫ともいべき作家である」(六文銭上田吟社中村英福)

金子呑風は、別号籠妻居・有魚亭、本名喜一郎、明治28年9月6日長野県上田市生れ。家業はすし屋「武蔵野」で、上田中学校在学中に、川柳好きの教師から古川柳を習い、五七五をノートにずらりと書いたりした。

大正4年、近所の同好の士を集めて「瓢(ひさこ)会」を名乗ったのは20歳であった。同

志の塩入不及、桜井由紀夫、林章一らと大正7年には川柳六文銭上田吟社を興し、柳誌『六文銭』を創刊する。

この川柳熱は、古川柳研究で著名な飯島花月(上田町収入役、十九銀行頭取)から江戸川柳を親しく学び、この人物の死後は、地元出身で養種問屋を営んでいた伝統川柳の権威花岡百樹の指導をうけた。

この百樹は、明治42年に西田当百・今井卯木らの同志と関西川柳社を興した人物で、若き岸本水府がこの創立の案内書を書いており、この結社を母体に、やがて天下の『番傘』が誕生するのである。時に百樹は、日本売業(株)大阪支店長であった。この百樹がやがて大阪から郷里の上田に戻り、呑風らを晩年まで一意指導した。いわば川柳人呑風は、この師匠

の百樹ゆずりとも言える。

この間、名古屋の『鯨鏝』や『きやり』に盛んに投句、交流したが、特に中京地区の各柳社へはしきりに足を運び、その交遊は中部地方の各都市柳人に呑風の名で知られた。

この壮年期の呑風の活躍ぶりは、長野県下でも遺憾なく発揮され、県下大会は実に前後三十五回を数えている。その間、放送川柳や新聞柳壇でも選者として鳴らし、その余勢を駆って、長野県下の川柳不毛の町村へ足を運び、柳郷長野県の今日の素地を作った。

戦後の昭和21年、恩師百樹翁の句碑

つがもねえこの鉢巻は江戸の色 百樹

を上田市星蓮寺山門わきに建立、長野県第一号のこの句碑建立まつりを盛大に催している。昭和39年3月、長野県川柳団の名で、彼もまた呑風句碑を上田公園内の城を望む位置に建立されている。その句碑の表の句は

城一つ伸びゆく街の灯をみつめ 呑風

家業のすし屋を継いだ呑風は、町内では区長や民生委員をつとめ、昭和44年に病に倒れるまで、市内の金婚式を迎える夫婦へ、お祝いの色紙をもれなく揮毫しつづけた。

昭和46年、東京柳人以外でただ一人、地方からただ一人、川柳人協会会員に推されているが、この辺の事情について藤島茶六川柳人

協会長が、呑風句集『籠妻居』の序文の中で次のように記している。

「川柳人協会は、現在選者級と目される人達ばかり百二十名程の会員を擁しているが、協会と改組した以前の川柳クラブから数える」と三十五年の歳月を積み重ねてきた。

その長い歴史の中で、関東在住以外の柳人が特例で入会したのは、後にも先にも呑風さんだけだった。それだけに呑風さんは東京柳人に親しまれ、慕われていたからこその特例がみとめられてのことだった」

昭和54年12月1日、老衰のため死去。享年84歳。金徳院喜庵宝蔵呑風居士。

「川柳にこだわっているという点では、どうしても柳（りゅう）という名の女性を女房にと探し続け、大正7年にその念願を果し祝言をあげた。夫婦の居室をそのため籠妻居と名付け、庵号として使用している。

武蔵野すし店のそばを流れるヒル沢川に架かる橋を大黒橋という。この名は、橋のそばに大黒天が祀ってあったことによる。近所の旦那衆を集めて、『大黒会』と称し、一人一升ずつ痛飲したというから、若い時から相当の飲み手であった。

大正二年には武蔵野の三代目を継ぎ、家業のすし屋に精を出し、蚤糸盛んな上田に蚤糸

専門学校があったことから、学生の集まるの目をつけ、すし屋ながら『名代関東だきおでん』をメニユーに加えるなど、いたく商売熱心なところもみせていた。

戦火の渦が寄せるころ、この下道界限も往時のおもかげもなく、すっかりその灯を消していったが、川柳だけはどうしても捨てて行く気にはなれず、近所の人たちがこの非常時に、と眉をひそめても暗い戦時中のウサ晴しを同志数人とつづけ通していた。

この当時の呑風の随想「終戦の頃」を次に紹介しておこう。

昭和十九年から二十年にかけての私の句帳は第十九冊を数えている。時の信毎柳壇は、百樹師の選で、時節柄ほとんどが軍国川柳の決戦譜であった。無論、私の句帳も同様で、わずか残った各柳誌のいずれも「撃ちてしまえん」以外は受けつけなかった。

二十年六月二十一日きやり誌へ警報下四句を投じたあと、しばし打ち止めにし、同年七月上旬、重要な書類や家財とともに、大事な句帳全部を遠く菅平口の某民家の蚤室へ疎開した。おかげで終戦後、その句帳ははじめ大事なものはやつと陽の目をみた。

さて終戦となったものの、虚脱昏迷の底に突き落とされ、暫くは何も手がつかない日を

送った。

降参をすると一度にひだるがりという古句を地でいったわけである。

やがて次第に落ち着きをと戻し、十月八日、終戦後の第一句を句帳に書いた。

盗られないうちに南瓜をますく食い
とあられもないものであったが、セチ辛い敗戦後の生活だけに言いようもない。

このころ、戦時中の苦勞がたり、私の両足の神経痛再発のため、別所温泉へ約十日ほど、知り合いの宿の湯へ通った。

疎開児童の帰った直後で、部屋は荒れていたが、携えた弁当と句帳を開いて、やつと安堵した気持でくつろいだ。月一回欠かしたことのない自分には、しばらくぶりの温泉の湯であった。

傷ついた心へ湯の香待っていた 呑風

以上は「川柳」誌掲載の「大正・昭和の川柳人(11)金子呑風―中村英福(六文銭上田吟社同人)」の資料から頂戴した。

お袋は孫を背負って掃き出され 呑風
母どこに居ても返事をしてくれる
爪染めて裏に住む娘のいい様
楽しみは茶をのむことに夫婦老い

▼次号は「広瀬 反省」

秀句鑑賞

同人吟 菱田満秋

—10月号から

人間を揶揄しながらカラス生き

川村映輝

最近牛乳屋よりも新聞配達よりもカラスに朝を起される。蠅はいなくなつたしゴキブリも見かけなくなつたが、カラスはどんどん増えているようだ。何故かは考えまいたと思つても、彼等は人間に密着して生活している。

だからカラスの一举一動は他人事ではなくなる。人間以外の動物で今一番関心があるのは犬でも猫でもなくカラスなのです。それにカラスには可愛げが全くない。いつも高い場所でカアカアと人間を馬鹿にした声で鳴いている。カラスに対し危機感を抱いているのは私一人でない事がこの句で解つた。

ポケットをさぐつて捜す幼い日

牛尾 緑良

少年の頃、中国人の店で南京豆を買う時、一銭なら一つのポケット一杯、五銭出したら全部のポケットを満杯にしてやると言われてポケットが沢山ついた服を着て行つたら、苦笑しながらも内ポケットにまで南京豆を入れてもらった。私は手に物を持つたり提げたりするのが嫌いで少々物はポケットに入れて持ち歩く。ポケットの底から思いがけない物が出てくることがある。爪の先にひっかかつて出てきた物を懐かしむのも良いことだ。

自己陶醉の幸せにちびりちびり

土橋 螢

満足を感じながら酒を飲むとき、一気に飲む人は居るまい。満足の度合いを味わうためには、酒もちびりちびりと味わいながら飲むことになる。思い出し笑いをしながら飲んでこの人を横から眺めていると、陽気に狂つたのではないかと思ひそつた。

震災をくぐつた物で捨てられぬ

山口 美穂

そうでなくても簡単には捨てられないのに、震災にも残つた物は多少傷ついていても捨てられるものではない。その事実を知らない人にとつてはただのガラクタなのに。

幕間のロビーで「御無沙汰しています」

桑原 道夫

芝居見物に行く暇がありながら「御無沙汰して」いるのはけしからん事だと思ふ。しかしお互いさまで恨みっこなしかも知れぬ。こんな時に得られる情報は貴重なものが多く、期待してそんな場所へ出掛ける人も居る。

横浜のある句会へ初出席した時、自己紹介で川柳塔社の同人ですと言つたら、「塔」つて何処にあるのときかれた。思いもかけない質問だったので一瞬言葉が出なかつた。関東から川柳塔の同人欄へ句を出しているのは、私を含めて三人しか居ない。それからは近隣の名のある句会へ出掛けたり、自分の住む青葉区で初心者教室を開いたりして、川柳塔誌の購読を勧めてきたが、その結果水煙抄に十余名が横浜市在住で句を出すようになった。

最近の関東の句会では三才に賞品が出て、合点制で月毎にまた累計した年間にも賞品が出て、その是非はさておき出席者を確保する様な努力がなされている。にも拘らず若年層やご婦人の出席は少なく、出席しても老翁なベテランに賞を攫われてなかなか芽が出ない。そのような中で最近やつと青葉区に川柳塔系の句会があることも知られるようになった。私も目黒区文化祭で選をすることになった。川柳塔社がどこにあるかと訊ねられる事はもうないであらう。

息子より嫁が頼りという余生

川島 颯児

昨春秋に息子もやっと結婚した。それ迄は浦和と横浜という距離で殆ど電話も来なかったのに、誕生日にカードが来たり、父の日にシャツが送られてきたりするようになった。

息子の名前にはなっているが、宛名の字は嫁が書いている。よい嫁を貰ってくれた息子に感謝しながら独り暮しを続けているが、そつと幸せを感じている。

惚れたのはどちらが先か揉めている

三宅 保州

こんな他愛のない話ではいくら揉めても血腥い事件に発展する事はあるまい。また平和が戻って来るはずだ。そしてその結論はどちらかが逝ってから出ることになるだろう。

白味噌を吸って落着く旅帰

吉本 青風

帰国したら真つ先にそば屋へ飛込んでもり食へるつもりでいたら、中華航空機の昼食にそばが出てきた。楽しみを取られた気がして面白くなかった。それではと考へついたのがやはり味噌汁だった。たまに飲むには白味噌の少し甘味のあるのが嬉しい。熱い湯気の中から葱の香りがぶんと鼻をくすぐると日本に帰ってきた実感が湧く。

アトラクタ終つてもとの茶の間の灯

石川 侃流洞

金メダルは何個などと騒いでいたのも、さんざんの結果に終つたアトラクタの五輪徹夜までしたのが嘘のような近頃の茶の間。熱し易く冷め易いのは日本人の特性か。

身を粉に登る坂道喜寿傘寿

小林 妻子

川柳研究社の渡邊運夫代表の喜寿、坂本一胡顧問の傘寿の祝いがあつて上野精養軒に出かけた。次々述べられる祝辞はもつと長生きしろと言ふことばかり、中には広辞苑に傘寿という項目は載つてないから次の米寿まで頑張れと言ふ人も居た。しかし本人とその周辺の人の努力は大変なものがあるはずだ。私はあと十年そんな苦労はしたくない。

どうしても許されぬが盆がくる

小池 しげお

勝手なことをして親より先に逝つた子供、どうしても許すことは出来なくても、あの世で成仏出来ぬでは可哀そう、お盆も近づいてやはり供養はしてやらねばならぬ。

ミスしても気付かない振りされる年齢

秋元 てる

今更咎めても惚けられるのがおちだから、触らぬ神に祟りはしないのだ。

国債をもらい余命を考える

田中正坊

七十に近くなつて十年償還の国債をいただいたら一刻ばかんとさせられるのは当然だ。

換金すれば良いではないかとは少し無責任な言い方だろう。支給を決定した方々に八十まで生きる自信を問いたい。

ひと夏を蛸と蟬よ有難う

池永 正雄

厳しかった夏の暑さを一刻でも忘れさせてくれた蛸や蟬も秋風が吹くといなくなる。素直な気持ちで礼を述べ、また来年も楽しませておくれと願う優雅な気を持ちたい。

淋しさがすとんと秋の胸の底

奥田 みつ子

夏の暑さから解放された虚脱感から、秋は淋しく感じるのではないだろうか。すとんが効いている。

秋が来てまた人間が好きになる

中井 ゆき

人恋しくなる秋、淋しさを励ます人、励まされる人。秋は人を意識する季節だ。

変換キーあつというまに消えちゃつた

安平次 弘道

うっかり余分なキーに触れると折角のものが消えることがある。生命だつて判らない。



高杉鬼遊選

富田林市 中井アキ

想夫恋少しお酒を飲んでます
割り勘に女の匂い消しておく
自尊心少し曲って揺れてます
香焚いて女ひとりの自由席
ありふれた男と女のエピローグ

鳥取県 原みさを

原発の声がきこえる炊飯器
逢うて来た罪の匂いが消しきれぬ
一つ消えひとつ生まれて生命の火
台風が目がわが家にも一つある
左遷地の匂の魚がなま臭い

大阪市 尾崎黄紅

傘を忘れてきたことも忘れてる古い
救急車 月も星らも知らん顔
年金は四十年の利息です
両となり改築中を耐えている
おまえ食べあんだ食べてと譲らない

大阪市 亀井円女

ハードルは高い程よい孫のため
振り向けば私が居ると決めてはる
親子でつかとたまに言われる嫁姑
茶髪より毀す日本語許せない
年は聞くまい好まぬ方も居られます

大阪市 和田和風

治るはずないがせつせとリハビリへ
年金と相談またも義理を欠き
唯耐えて潔白を待つ貝割菜
露天風呂苦勞の日々が丸く溶け
死亡率一〇〇%どう生きる

綾部市 藤田芳郎

讃められて花は散華を予感する
議事堂の廊下に骨が落ちている
蜘蛛の巣の顔の高さが許せない
幸せを買おうと少し貯めている
糟糠の妻と勝負がまだつかぬ

岡山市 藤原一平

丸い絵が描けぬはずだよ頑固者
剣も折れ矢も尽き酒を飲むばかり
海鳴りがこわくて人が騙せない
全身のキーを外して独り酒
叱る子も継ぐ子もない老い二人

徳島県 安宅美代子

四面楚歌今日は七人ではすまぬ
正確な時計門限やかましい
損得を言えばひび割れる夫婦
年金に軽い命を握られる
辛抱のしびれも知らぬ石の上

泉佐野市 稲葉洋

赤いタイ小道具変える敬老日
ご婦人は花をバックに撮りたがる
俄雨 次に持越す立話
半々が四分六となる夫婦の座
お招きに同伴とある寡婦の鬱

横浜市 近藤道子

夕焼けの街に約束忘れてる
いつか来た道とは言えずついていく
おだてられ座った椅子に棘があり
ロボットと恋をしようか来世紀
宿題をいつも心に持たされる

八尾市 村上ミツ子

盆休み蟻の会社にありますが
弁解をしない男を好きになる
廊下拭くおながが邪魔になってくる
ライバルの首には鈴がついてない
いじわるもひと味プラスして夫婦

八尾市 神原まさと

褒められて喜ぶ年に戻りたい
パットでは無いとしっかり開けた胸
遊園地 親の恐がるものせがむ
子を持つて娘が母を頼り出し
映画館シニアの顔を覗かれる

寝屋川市 森茜

野良犬の確かなものを持つ瞳
標高千米 本音で向かってくる風だ
鬼やんま無限ただよつかのよう
留守の間に朝顔どつと咲いたらし
母さんがつまんで高くなった鼻

今治市 野村清美

頭から水を浴びせる墓まいり
波頭テトラポットへ訴える
うれしくて金魚ゆらゆらフラダンス
傘立てで形見になった父の杖
養虫のスリル寝袋ぶらさげる

沖繩県 杉谷一栄

人形の靴を脱がせて寝せてある
わが家よりミニチュア家具を調える
母の留守 仲睦まじくなる姉妹
姉ちゃんの浴衣借るねん火花見に
一枚の紙にもどして捨てる箱

熊本県 大川幸子

生きのびるコツを覚えただけのこと
わかっている返事を無理に聞きたがる
週休二日 妻の仕事が僕の手
用件を思い出させる元の場合
出世したとたん枝葉に取り巻かれ

大阪府 杉澤汀

鎧ぬぐも着ることもあるまいと
飛び越えた先にも深い水溜り
改札機わけも聴かずに咎めはる
嫌なものだけ外へ出す蟹の穴
携帯電話こんなとこまで追ってくる

札幌市 三浦強一

酒少しならとやっぱり名医です
忍耐を赤信号に試される
オロオロと賢治が歩く冷夏です
八・一五 正午うな井食っている
原爆も揃ったという玩具箱

横浜市 川島良子

子育てを終えて夫と恋をする
気のおけぬ手紙 切手も笑ってる
ダンベルで引き締めてます妻の椅子
恵まれた頭脳をうまく料理され
車間距離守る確かなお付き合い

八尾市 篠原いつふみ

客の酒飲んで女がよく笑う
よく笑う男で通夜は隅にいる
豪邸のチラシに家具を置いてみる
悪友と言うが女に解らない
飲み過ぎの訳は政治のせいにする

尼崎市 長浜澄子

心から許していないドアの音
切り売りはしない私の胸の内
焼きリンゴもうこの辺が潮時か
シャルウイダンス洒落た女を生きてやる
白旗は妻から出せとメロンパン

尼崎市 田辺鹿太

揉み手することも覚えたおじぎ草
借金は君に任すと父の遺書
配球は妻のサインに任せ切り
焼き芋を値切る夫が頼もしい
鍵束のひとつが今夜キナ臭い

鳥取県 石上悦子

アルバムに句の私をバックする
半分に物を減らして満ち足りる

留守番の金魚夜更かししています

こだわっていますホクロほどのこと

私には私の良さと青紅葉

和歌山市 木村親路

胃カメラの結果待つてるコップ酒

極楽を予約して来た寺の寄付

おふくろにちよいと甘えてよろこばず

負けん気で美人でいるがまだ一人

勲章の次に貰うは戒名か

和歌山市 吉村さち子

身辺整理生身のいざを考える

頂点のない生活に慣らされる

どんぐりの仲間で競うこともない

原石のままの温さが性に合う

喜怒哀楽のんだポストの温い音

寝屋川市 井上すみれ

テレてはる眼鏡はずして拭いてはる

他人様の分まで生きてどないしよ

アイラブユー言わない主義が好きでした

腰のばしじさまばさまの孫と盆

秋深しぼっくり寺の誘い来る

尼崎市 岩倉キク子

始めての終り胸吹きぬけた風
比べものにならぬ高さと比べたい

○×を付けて人生上や下

おーい おーい 呼んでも雲は振り向かず

嫁妻母 おんなに戻れないわたし
羽曳野市 西村りつえ

時々は無言の叫び聞こえます

毒舌がとても上手で好かれてる

隙間風しっかりしろと背を叩く

初対面爪の先まで気を配り
島根県 武島ちよえ

艶っぽい話になると盛りあがり

あの時の痛み忘れたふりをする

満天の星のひとつに語りかけ

人の出来 血液型で片付ける
横浜市 後藤早智

目の中に入れて育てて嫁き遅れ

虫取りが終わり夏休みも終わる

乾杯をいつもジュースでしています

一つだけ残した仮面ひび割れる
大阪市 一本勇太

天の声地の声秋のピアス穴

反論の一行はある欠け茶碗

苦しませのジョークで変る風の向き

和歌山市 古久保 和子

紙ねんど丸めた顔が似すぎてる

食ベきってやつと落ち着く袋菓子

カロリー計算丁度財布にいいメニュー

置き傘を借りたまんまで風邪の床

豊中市 みき わきみ

這ってでも二〇〇一年まで生きる

大正の生れ万年筆が好き

カラ出張 天知る地知る汝知る

官官へ酒は自前で飲むものよ

今治市 中村 好恵

頼りない記憶で辞書が忙しい

蛇口からポトリと悔いが漏れてくる

コスモスについて誘われて下りた駅

結局は足ふみ出せぬ苦勞性

吹田市 西岡 豊

拔擢の出向フアイト満ちあふれ

申請に過去の善行並べたて

老春の恋とスリルは高くつく

融けそうな甘い言葉を吹きこまれ

米子市 小塩 智加恵

東北弁 関西弁の子が遊ぶ

真剣に筆もつ時は無の世界

上役の秘密知っての気まずさよ

米子市 林 風子

つるばらの自虐 無意味なことをする

胸奥へ呪文すたと霧晴れる

しおれかけていたわたしにも雨が降る

案山子みな眉つりあげて秋日和

米子市 池尾 保子

ひと言でわたしを駄目にしてしまふ

七人の敵にとぼけの顔をする

屋根の上カラスもプラン考える

コチコチの冷凍魚に睨まれた

羽曳野市 安芸田 泰子

ものわかりよすぎて軽く見られがち

ときめいた日もあったのに背を向ける

明治大正昭和平成一家族

老母に贈り孫に贈られ敬老日

羽曳野市 芦田 絢子

昔ばなしとしても許せぬことを言う

補助輪をはずせぬままに老い迎え

貰うだけとなる敬老のうそ寒い

遅刻した分遅らせた腕時計

和歌山市 水田 秀男

よく見ればふらついている僕の影

ブルースのようにゆっくり生きてゆく

点と点交わるような出逢います

米軍の基地本当にいりますか

横濱市 豊田羊子

枝豆の一番採りを亡母に見せ
葬儀にはこの写真でと言っておく
シヨパン弾く私のおまじないである
相性をコンピューターで占われ

今治市 渡辺南奉

残酷と時々思う目玉焼き

恙ないので頼りないふところ手
四季巡る不平不満を言うなかれ
世帯主 父のかいひは細すぎる

岡山県 土居ひでの

修羅いくつ喘いで越えた峠道
聞かれては困る話が飛びたがり
御破算で願いたいのは過去の傷
トマト畠この夏越える力水

新潟県 高野不二

定年後カラ出張がさわぎだす
食糧費派手に使った事もあり
うちにもなって西瓜の値が安い
ガン保険掛けて神経痛を病む

高知県 百田幸

いつのまに咲いていたのか百日紅
有難うありがたそうにない顔で
年寄りの意地か支える手を払う
便利すぎ御飯炊くのも忘れがち

大阪市 川内叭笑

値崩れに泣かされました夏野菜
世の中を斜めから見ると癖がつき
責任は監督だけに取らせませす
里帰り高くつきます疲れます

兵庫県 円増純子

連絡船島の命を預けられ
前列に座り居眠りしてしま
遅すぎた告白を聞くクラス会
程々と言う程の好い処世術

広島市 流奈美子

時どきは輪の外で見る空の青
五十肩義理が重たいなと思
蓄えたもの一つに肝脂肪
エンピツの芯も渴いている残暑

富田林市 藤田泰子

しわ寄せが弱いところへ貝割菜
正直な鏡に腹が立ってくる
心には桜吹雪が彫つてある
待ち呆けそれから遠い人となる

鳥取市 岸本宏章

先頭で浴びる火の粉を厭わない
税務署が二重の帳簿つくらせる
息抜きをさせてやりたい砂時計
エネルギー溜めたら蟻も出歩かぬ

ひとり居は良いな寝ようと起きようと
横浜市 明 渡 トヨ子

お金では買えぬが若さ欲しいなあ
夕映えに昔のままの駅を見る

ヒソヒソのあとの笑いが気にかかる
大阪府 大家 風 太

生き甲斐の孫が相手をしてくれ
縄のれん鎧を脱いだ呑みっ振り

年金を貰えば引算ばかりする
錦秋へ深呼吸などいかがです

寝屋川市 太 田 とし子
かたくなに守る仏の黙秘権

あの人も齡をとつたと嬉しがり
濃淡な涙で世間泳ぎ切る

鈴虫の生れた籠に秋が来る
富田林市 大 橋 鐘 造

風に乗り噂時どき悪さする
毒のない話ばかりで座が白け

賑やかなこと大好きマネキ猫
すさまじい貌をして行く蟻の列

和歌山市 森 口 美 羽
スケジュール狂わす酒に酔い痴れる

逆風をまともに受けてからの乱
縁あってあなたの情け借りている

こわいもの見たさに覗く指の透き

信楽の狸に留守を頼んどき
兵庫県 仲 井 素 水

涼風がたつてたこやき店を開け
引潮に乗って帰らぬ浅い恋

三十年亡妻は絆を握り締め
米子市 猪 森 スミエ

辞書の席 漫画じりじり攻めてくる
学習にほしい漫画のエネルギー

ぺこぺこはがきがお辞儀して届く
電話でんわ はがきがとんと遠くなる

悪縁が重なり紐がほどけない
尼崎市 森 安 夢之助

百歳を視野にせつせと竹を踏む
宝はないが大事にしてる妻が居る

やりくりが出来て枕を高くする
堺市 志 田 千 代

丁寧書いてあるから別れ文
甘え方うまい人ですもてます

お見舞のカゴの果物病みはじめ
おしぼりも冷えてお着きになる時刻

登頂へ雨が下から降ってくる
尼崎市 中 澤 向 西

空出張 役所ならでは出来ぬこと
納税へ札を言われたことがない

つれそうて渦の中から立ち上がる

八尾市 平川幸枝

和泉市 中川楓

言いだしたら聞かんのやから母困る

目のやりば困る暮らしのボランティア

孫の守り泣けば踏切まで走る

秋の暮れ繩の電車は捨てられる

八尾市 村上剛治

開き直るとものがはつきり見えてくる

勉強でもしたらどうだと虫が鳴く

蟻の列さからついている二三匹

満腹になってハートが鈍くなる

東大阪市 谷口義

親の顔みたい親とは私です

どっちでもいいけど大きい話だな

波風を立てる男が先にくる

夫婦円満何か秘訣がありますか

西宮市 古谷ひろ子

花十色わたしの色が褪せていく

年金で残りクジ買う茄子の花

声かけたい横顔があるカウンター

社のピンチ伏せた会議の苦いお茶

大阪市 中井正秀

七五三どうも似てくる消費税

払います上げんといてね消費税

捨ててねと言われた着物着ています

介護して鶴の折り方教えられ

母の愛あふれて少し持て余す

命あるものヘストレス都市砂漠

嫁に内緒 百まで生きるプラン練り

夫には少し厳しく努力賞

東大阪市 今岡貞人

真っ直ぐな煙眺めて無職の目

泣くも一期笑うも一会雲流る

日進月歩老いの足では追いつけぬ

幸せの音を奏でる炊飯器

鳥取市 藤ふうこ

風に似た男を待つて女古稀

こけし選るいつかわが子に似た貌を

趣味読書マンガの本が積んである

乱あれば女原始の火と変わる

寝屋川市 酒井勇太郎

富士登山 妻がリュックを持ってくれ

体力の限界 富士でテストする

死火山でないぞ私も富士山も

満天の星が手近な富士山頂

富田林市 山原昭水

父の日に父が十八番のチャンコ鍋

赤トンボ歌えば故郷近くなる

この頃は愛という字を書いてない

本棚に置けない本をもてあます

静岡市 佐藤 次枝

不利となる喧嘩わかってしかかけない
生者必滅ひそかに写真決めておく
梅雨晴れ間 日を繰り上げて墓参り
老眼鏡はずし実寸確かめる

大阪府 澤田 和重

同居して聞き分けのよい父になる
塗りたくった顔で私が消されてる
妻が留守 目玉焼きなら直ぐ出来る
毎日を夫といえるのも疲れます

堺市 たにひらこころ

ふるさとの空気が色が見えてくる
三角山がもう駅からは望めない
幸せなときには降りた君の駅
わたくしの哀を拾ってくれた駅

海南市 谷口 義男

好きだとは言わず秘めてるから匂う
聞いて居る側が憤慨する話
気前良く税金を飲む官と官
平均寿命だけは何でも生きる夢

羽曳野市 徳山 みつこ

パチンコに母性とられた世紀末
土砂崩れ山がおこって泣いたんだ
ことば選る間を埋めているセレナーデ
アリガトウお腹が急にすいてくる

横浜市 荒井 広和

定年の内弁慶に居座られ
パチンコの騒音安堵する孤独
到来の和菓子で老いのティータイム
ペーソスを隠すピエロの化粧台

大阪市 中橋 恵美子

御先祖様急な願いがございます
そううまい人も居ぬので踊ろうか
掲示板 天然ガスでは死ぬません
年寄りの頑張り後につけがくる

河内長野市 大西 文次

することがないと言うのに目が覚める
落ちそうで落ちず水滴思案する
ロケ隊に島の娘等落ちつかず
お茶立てる指でたこ焼摘み食い

大阪狭山市 伊藤 尚子

いいムード風が応援してくれる
一人ずつ風に誘われ離れ行く
上げ下げの時間が省けてよいベッド
着飾って家事を忘れて観る芝居

横浜市 金森 徳三

養毛剤効けよきけよと百叩き
妻が病み居酒屋の道遠くなり
スーパ―を出て真夏日も心地よし
盆の入りバスは遅れず寺に着き

横浜市 長島 亜希子

背広着て出れば会社と思われる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ゴタゴタも他家のことなら面白い

お願いは深いお辞儀の中にある
坂道でころげる恋もある噂

子を叱る時の目尻を孫に下げ

口紅はふいて歯科医に目を瞑る

愛し児を寝つかせるよう老母さする

五目飯食えば不機嫌直る父
宿題の波にもまれた親子舟
急いでも遅れていても来る関所

尼崎市 河津 正治

機械化の波に黙々千枚田

倉吉市 高多 博丈

置き手紙読んでくれたか気にかかり

念入りに拭いた鏡は裏切らぬ

末席の雑魚も雑魚なり腹を立て

鳥取市 福田 登美

疑似餌とは知るも背に腹変えられず

正論を通す道には砂が舞う

はにかんで足がもつれる白い靴

豊かさが匂など知らぬ子を育て

スカーフをなびかせ裏切り者がゆく

八尾市 鷺見 章

トマト 茄子 胡瓜と夏が遠くなる

不治と言う病に人は耐えられず

エラーばかり続いて父権地に落ちる

捲土重来 心に深く期するもの

デパートを一まわりして汗しらす

和歌山県 中村 君枝

静岡市 中西 雅

庭掃除空蟬を手に夏終る

男運一つわたしの宝物

賞味期限もつたいたいと思ひ捨て

子に送るエールはいつもVサイン

カーテンのよごれが目立つ秋近し

いいニュース聞いて踊った心電図

益田市 岡田 たけを

安全な速度でいつも追いぬかれ

鳴門市 八木 芳水

ときどきはぶつかりあつて生きている

血圧を上げる税務署から通知

安定剤よりはよく効く酒五勺

呆けたとは思いたくない物忘れ

上品な女の隣で喋れない

疑いの目の前にあるエイズ菌

鳥取市 徳田ひろ子
おんな二人のコーヒーカップ温める
力んでた拳開ければ何も無い

ぼろぼろの奥歯を見せぬ仁王様

兵庫県 安達厚

でしゃばって重い荷担ぐ羽目になり

惚け防止電話控えて書く便り

横道にそれて人生太く生き

島根県 岩田三和

王つつく成歩三枚うるさいぞ

攻めまくる車角に桂もふるい立ち

出ておいで王の尻から銀を打つ

島根県 槻谷伸子

この世にも極楽地獄風が吹く

秋の風やさしく人間取りもどし

計の友の面影偲ぶ今日の雨

滋賀県 中宗明

老いらくの恋もレモンの味がする

腕白も父に叱られかしこまる

古里はバス便増えて近くなり

大阪市 立蔵信子

このいちご夏をどこかに忘れてる

風鈴がかえらぬ人と呼んでいる

考えがまとまらなくて寝てしまふ

宝塚市 黒台伊佐武
一願と知らず三つの願をかけ
古稀近し人生の秋すぐ隣

黄昏れて明日の世間が少し見え

和歌山市 武本碧

正論が置き去りになる多数決

数字にも情にも弱い母である

前向きに生きてあせらぬかたつむり

富山県 増田紗弓

疑いが晴れて仏間へ泣きにゆく

蟻の位置 花の位置にもある仏

残り火へカンナの赤が欲しくなる

今治市 渡邊伊津志

戦友の霊か螢火寄って来る

岬の灯 波の心を知り尽くし

屋根越しに秋には秋の海の色

鳥取県 山内芳江

好き勝手言って立場を忘れてる

よそ見して待つてやるのも思いやり

トラックに夢もいっぱい積み嫁ぐ

羽曳野市 川田晋

ご無沙汰の顔が見舞に現われる

四度目は夜叉に変わった仏顔

不都合は凡て誰かのせいにする

大阪市 今西 静子

京みやげ自分へも買う女学生

スタミナに母は氣遣う朝の膳

スポーツの苦手親から子にうつり

三重県 佐々木 森哉

ギター弾く忘れられない恋を弾く

ドラマにはならずコントで終る恋

身構えて冬を待つ身の歳となり

島根県 児玉 幸子

秋日和 私も眠る猫も寝る

秋ナスの煮しめ作って嫁と食べ

誕生日今日から古希の坂登る

大阪府 奥野 義夫

死なれたら困る女房と二人だけ

性格の不一致のまま子沢山

想い出を生き甲斐にしてまだ未婚

尾張旭市 三浦 きぬ

老いらくの恋よ相手が居ないとは

よくもまあ句読点なくしゃべり

人生とは何ぞやなどと悩むまい

尾崎市 尾宮 弘治

目言葉で座席をゆずる子は茶髪

脳にくる文句は妻に似た娘

スランプと怠けを妻の眼が見抜く

尾崎市 野瀬 昌子

台湾で虎の置物買ってくる

胃の痛いことに夫が家にいる

さわやかな青年が来て買わされる

尾崎市 的場 十四郎

やりくりの上手な妻が画くマンガ

向い風いつか歩幅の合う夫婦

出稼ぎの汗の土産は玉手箱

横浜市 宮村 ちよ路

別姓で他人のような喪主がいる

高いけど八百屋自慢の秋を買う

仏間から香がただよう母の贅

八尾市 與田 明

試着室三度替えてもまだ迷う

借りるより貸せる立場のむずかしさ

目薬にはじまる老いのこぼし癖

倉吉市 山中 康子

黄金の頭をたれて実り上げ

文明が手抜き足ぬき責めてくる

嫁不足四十男が泣いている

尾崎市 向井 末貞一

役所から借りも無いのに督促状

ダイエツト口先だけだバイキング

金婚へ子のプレゼント空を飛ぶ

枝豆がビールと組んで夫を待つ
島根県 森 茂美

原爆の慰霊に和すか蟬の声
終戦処理まだ引きずって罫雲
唐津市 松本 圭

高かった七輪で焼く塩さんま
官僚は寸法違うネジを締め
子が出来たとたんに妻がパパと呼ぶ
唐津市 宗 弘

立たされた教室の床松でした
駅裏の田んぼ一まい拗ねている
村おこし画廊を兼ねる無人駅
唐津市 岩崎 實

場所時間書き入れ暦先をゆく
退職の背を年金の風が吹く
一日の疲れ足裏もんでやる
大阪市 鈴木 トヨ子

親子旅幼い日々がよみがえる
有難う地図をたたんで終る旅
庭の花順に水やり語り合う
河内長野市 印藤 智子

うつの日は心あちこちぶつけ合い
毎日が日曜 夫と時計見る
化粧してやっぱり私まだ女

空缶に豆菓子つめて冬仕度
河内長野市 水谷 笙子

コスモスがゆれる 私もゆれている
焼なすび とろり妻の座ここにあり
日立市 加藤 権悟

爽やかな母の蛇口の音で明け
七坂を越えれば見えて来る虹よ
少年の一直線に音があり
今治市 村上 久美子

ライバルが一人もない落目かな
死ぬの生きるの修羅場で他人は手を叩く
プライドの高い松茸乾溜びる
大阪市 平井 露芳

鏡ええさかいきれいに見えるんやでえ
阪神が負けたと風呂へ客が来る
単身赴任終るリストラ待っていた
大阪市 川久保 睦子

試されているとも知らぬ紙風船
うっちゃりを食ったダルマが後ろ向き
言い訳はしない自分で決めた道
羽曳野市 三好 専平

かんにんですむかエイズをひた隠し
触診をしないお医者が多すぎる
偉そうに口利く人は嫌いです

会う度に何かに腹を立てている
幕切れはあつけなかつた茶番劇
犬抱いた写真 褒められたのは犬

静岡市 小 木 久 子

残業を減らされローン滞る
提案をした本人がやらされる
耳当てて樹木の気持聞いてみる

横浜市 菊 地 政 勝

権利主義 言うことだけは知っている
カラオケの拍手その気になってくる
反省はするが三日と続かない

鳥取市 福 永 ひかり

痔の手術胃ガン患者に励まされ
点滴をされて病人らしくなり
退院はいつ入院をしたばかり

鳥取市 近 藤 秋 星

夢を抱くカニは横には歩かない
無駄に年とつてはいない老いの知恵
生前に何故贈れない栄誉賞

十和田市 阿 部 喜久江

ネクタイを緩めてからが正念場
民主主義割に合わない男親
フルムーン財布は妻で無事にすみ

高槻市 江 原 秀 夫

休肝日明けて呑むのむ酒ビール
慣れた道犬が散歩に連れて行く
OBの行く末などは無関心

岸和田市 亀 井 皎 月

仁王さまにルージュ塗つたのは誰だ
呑む奴ものまない奴も一万円
稔る穂をやさしい風が撫でて秋

秋田県 湊 修 水

さりげなくいいよと孫が言うてくれ
古本の中に源氏の君おわす
新盆に足の怪我してどうしよう

島根県 三 代 朝 子

悪妻の肩持つ子らがいて困る
妥協していつか私の影がない
無駄足と性懲りもなく生き続け

旭川市 朝 倉 大 柏

さあおいでみんな踊ろと鳴る太鼓
免許証持てば立場がちと変わる
負けん気がもろに出ているプレゼント

堺 市 井 崎 ミサ子

神無月神忙しく手抜きする
バス停を掃いて長寿を感謝する
青天の霹靂左遷の辞令出る

富田林市 欄 智 久

柏市 上鈴木 春枝
わがままになるジャンケンに勝つてから

原っぱに初恋という忘れ物
日めくりの中で胎児が太くなる

和歌山市 津村 武春

決めてから従いて来いとはご無体な
約束をきっちり守る怖い人

リストラがすっかり変えた定年期

高槻市 乙倉 武史

生ものは避けてひやひや夏を越し
見て見ない振りが出来ない損な性

笑い過ぎ注意吉本よく稼ぐ

唐津市 山口 ふさ子

台風がお盆参りに来てくれる
唐津湾走る白帆の銀メダル

現地よりいい席で見たアトラクタ

八尾市 山本 宏

指折ればいつも自分がぬけている
フルムーンやっぱり妻がリードする

肩書きが消えて人間くさくなる

兵庫県 西井 つや子

言い返す言葉いっぱいあるけれど
夕涼みだあれも外に出ていない

お念珠は愚痴の溜った胃を洗う

河内長野市 妹背 尽呂久
海の子の健在証明したヨット
影は茶坊主形はちよつと偉い人

託児所の保母強引に昼寝さす

東京都 瀬戸 きん子

猫の皿鳥がつついて蟻がなめ
寝物語 子から孫へとくり返し
爺さまと孫をセットで送り出す

威勢よくコケシが踊る震度4

砂川市 式田 正美

平凡で素直に育ち物足らず
笑えない三本足で歩いてる

無花果を何より好きな仏さま

神戸市 向井 泰子

つらいこと忘れる旨いはた餅だ
鍋の底磨いて夢をみつづける

戦争展 平和な世から攻められる

尼崎市 軸丸 勝巳

別姓なんて海女の夫婦の命綱
敬老の通知いたたく一年生

あの声はきつとこの殻ぬいだ蟬

倉吉市 山本 玲子

鼻歌で作るカレーは激辛だ

やどかりに家賃請求書を出そう

岸和田市 不破 仁 緑

事故多発 神も昼寝の夏の午後

雄弁なすめ鴉に睨まれる

仏壇とお墓のチラシ彼岸前

香川県 田中 ふみ

勇壮な太鼓に神も踊らされ

吸入器つけて空気がままならぬ

単純な妻は仏の守り役

泉佐野市 山本 蛙城

妻の忌明け盆栽書など買おうかな

車椅子棄てないでおけ僕が居る

党首会談そのにこにこが気に入らぬ

倉吉市 田中 八太郎

愚痴ばかり聞かされるとは妻の愚痴

おごられた弱身自慢を堪えて聞き

残ってるはずだと上戸覚えてる

和歌山県 杉山 精子

私の中にそびえる天守閣

永遠がはじまる乾かない瞳

うぬぼれの川に時々流される

伊丹市 延寿庵 野鶴

ハリネズミ友情保つ距離が好き

歩を一つ進めて休む一里塚

赤貧もミンクも通す自動ドア

羽曳野市 森田 四三郎

天下りなぜか汚染の臭いする

自販機がストを起しておつり出す

オイと呼ぶお茶と答える合言葉

鳥取市 山宮 愛恵

遠まわりよい思い出となる二人

わがままを許してもらう母の駅

私利私欲肥やすヒト科が憎らしい

神戸市 船津 とみ子

秋ですぬ私の噂雲に乗る

バッグ買うとともおしやれな名を持ってり

持ち出しのできぬ原爆記の厚し

岡山市 清水 金太郎

三権分立 裁判官も宮仕え

主義主張変えて大樹の許に寄り

戦争がないよう軍備強化する

静岡市 大村 正雄

いい夢のつづき枕に預けとく

若造りしていそいとバスの旅

スパーのすすき飾って月見酒

今治市 塩路 よしみ

絆一つ消えて涙の風の盆(叔母が逝く)

人愛しかがやく顔になつてくる

揺れ動く世相をよそに蝶の羽化

河内長野市 木太久 正一

秋刀魚焼く北から秋がしのびより
カレンダーあと一枚がせき立てる
寅さんがひとり旅ゆく虹の中

岡山県 国米 きくゑ

定年後 夢の休日もてあます
昇進の椅子に無理したつけが来る
マニキュアの彩変え男斬っている

福岡県 本田 忠男

見解の相違沈黙破れない
娘が嫁ぎ水だけ残る金魚鉢
病む心 温情までも拒絶する

東京都 清原 悦子

エリートにブレイキなどはかからない
捨てた欲時々拾いたくもなり
絵日記へ親の疲れがドツと出る

鳥取県 高尾 京

震災も戦火も忘れまい残暑
台風で供花お墓の方を向く
沖繩の苦を分かち得ぬ身を恥じて

松江市 佐野木 みえ

まりもには人に言えない過去がある
夏ばてで心身ともに義理を欠き
旅先で書いた絵はがきはずんでいる

鳥取県 奥田 信敬

貧乏は慣れたがいやな貰い水
青菜葉 虫も食うはず旨いもの
大丈夫赤字国債ばかりして

松江市 安食 友子

ミス浴衣祖母までお立ち台にいる
0157煮沸の手間をくれましたた
寸借をネットワークが見張ってる

出雲市 榎 ミツエ

大陸の花粉に鼻をいじめられ
知らぬ輪に友愛求め生きて行く
あの星も恋と愛とで光ります

香川県 神保 坊太郎

大法螺を吹いて空しい酒を呑む
蹴つまづく度に男は脱皮する
一等が当たると多分貝になる

和歌山市 山根 めぐみ

揺らぐ夫見てる私も揺れながら
大切なおなごはんだとのせられる
軽いキス思考回路がぐるい出す

阪南市 正橋 正

旗幟鮮明愚直に徹す鬼瓦
喜怒哀楽偶には破目を外したい
牛飲馬食貧乏神を追っ払う

豊中市 上田圭津子

口づけをそつと交わしたさくらんぼ
くやしいがあしたがあると言い聞かせ
ぬくぬくと夫の影に守られる

高知市 細木子龍

老春の余韻リュックに詰めている
聞き上手話上手の糸電話
始発駅お国訛りの標準語

倉吉市 大下智子

夫からやさしい言葉なにか変
変人と変人だからまともです
別々に分けたらゴミが生き返る

唐津市 林公一朗

凸凹のコンビ笑顔の銀メダル
靖国の父よ本当に幸せか
病魔など酒の肴に今日を生き

和歌山市 福重美子

手を繋ぎ鬼を入れない輪をつくる
白蟻に家追い出され仮住まい
寅さんはきんとん雲で空の旅

大山市 早川盛夫

自慢にも邪魔にもなつて東大出
間違えたでは済まされぬ医療ミス
ままごとのママの口調になっている

横浜市 丹下智洋子

道連れを誘い危ない橋渡る
子を叱るくすり微妙な匙加減
相部屋は挨拶しつづつ跨ぎあう

大阪市 福岡雅子

願望は息災だけと言わないで
手の中で丸めて捨てたはずなのに
おしぼりと同格だった今日の会

和歌山市 木村初子

いま少し生きてみたいな蟬しぐれ
大器晩成まだまだ学ぶこと多し
今日ありて今日を歓ぶ朝茜

寝屋川市 坂上高栄

婚の荷を出した広さに座り込む
たこやきや娘の顔で忙しい
中流の意識が回す火の車

和歌山県 中後清史

聞き流すことにしている老妻の愚痴
打ち明けて期待の甘さ思い知る
投函をしてから湧いてくる不安

鳥取市 森明美

久しぶり逢えばたばこを止めている
好きだから三步下がってついて行く
結論を待つてはくれぬ発車ベル

鳥取市 山本 崇
殺すとは穏やかでない今朝の記事

梨狩りの食べ放題も食べられぬ
夢が覚め枕を撫でて感謝する

横浜市 清水 潮華

今年また忘れたままの誕生日

ゴミ置場規則がひとつ追加され

暇見付け洗車すると雨になり

愛媛県 安野 案山子

内幕を知っているから笑えない

顔ただけを同志と間違われ

生き方のコツを掴んだ遠回り

島根県 松本 聖子

秋風にしつかりせよと励まされ

年金のくる日印鑑たしかめて

今朝もまた計報欄から目を通し

高槻市 小林 一完

地震予知できても逃げる手立てなし

縦型の社会抜けたら住みよかろ

山見えて刑事は妻の機嫌とり

倉敷市 家守 政子

慰安婦どんな人かと孫が聞く

酒を呑み吞まれて酒の所為にする

日曜も祝日もなし集金者

兵庫県 谷田 多美子
理工学部出た孫今日から営業マン
能登の海 眼下にクリーム食べている
忘却に出来ぬ夏日の終戦日

横浜市 保田 絹子

水制限解けて噴水乱舞する
台風に洗われ青い山が呼ぶ

横浜市 糸矢 加津子

二日酔いきのうの酒よりうまい水

ダイエツトして下さいと膝が言う

鳥取県 橋谷 静江

幸せと背中合せに暮してる

肩の荷を下ろして孫と戯れる

高槻市 執行 稲子

二人三脚夫婦で憩う山歩き

くちなしに酔うてつがいの黒揚羽

出雲市 加藤 スズコ

補聴器にひびく虫の音夏がゆく

咲き終える蔓をたぐればうろこ雲

熊本県 増田 一乗

もう三日 机の上の四書五経

予定表合間隙間は医者通い

千葉県 大川 晚翠

酔い痴れるサンバのリズムカメラ撮る

整理券並んだ人と折り合わせ

愛媛県 宮本末子
旅好きが趣味で集める箸袋
平凡にして平凡な便り待つ

島根県 谷岡ふみ

菊花展 野立の若い娘にみとれ
初粟を仏に供え母偲ぶ

和泉市 横山捷也

食通に値ぶみされている器
気くばりも過ぎて古参のおせっかい

泉佐野市 大工静子

老いた母包みし梨が届けられ
雀追う久方振りの筒の音

東大阪市 松山隆

メニュー表 舌代と書く味処
倒される大黒柱音を吐かず

枚方市 森本節子

たちまちに消える花火をまなづらに
しあわせは自分ひとりの時間帯

高槻市 傍島克治

琴の音にひかれて覗く青い月
明日の運天に任せて気が軽い

兵庫県 高見末野

孫に買う振りして買った化粧品
今年から敬老会の一年生

大阪市 野村ダホネ
死んだ子をいつまで抱くや猿の母
昔武士今は車に道ゆずる

箕面市 木村天弘

筋書きはここでマドンナ寅次郎
大阪城化粧直して待つ登城

羽曳野市 山本たけし

薬害へお詫びどころか吠え立てる
秋彼岸詣る人なし兵の墓

出雲市 園山かおる

豊作の裏減反がまっている
つり銭をもらわぬ内は逝かれない

兵庫県 中野とよ子

同じ汗かいても違う金メダル
両の手がふさがっている旅帰り

豊中市 岸田知香子

呉服市振袖孫の顔だぶる
庭の池祭の金魚新天地

東京都 井上つよし

終戦忌炎天万歩九段坂
バスツアー何時も遅れるあの二人

和歌山県 村中悦男

宅配を閉じてまた解く入れ忘れ
聞かれたくないことばかり聞きたがり

老後にはせめての夢の松風呂
二十四時売ってる店が大流行り

交野市 山川 日出子

底なしに可愛がっても猫は猫
体重計狂ったままに秋深む

宝塚市 飯西 ミサヲ

母逝った覚悟の胸に穴があき
走馬灯 母の思い出昼も夜も

鳥取県 国森 武子

飯盒とカレーの匂う野外塾
目覚めよい何かいい事ありそつな

三重県 長野 恵子

まずまずの幸せ三度箸を持ち
セクシーな風に哲学ゆるぎ出す

大阪市 三浦 千津子

無理矢理に誘った人は泣き上戸
娘まだ甘えの日々の病み上がり

池田市 木村 一笛

ぶらぶらと種なす一つ残されて
森の風愉快愉快と木は笑う

横浜市 伊藤 ふみ

親と子の話の中に割り込めず
試着室もすこし派手を着ろという

岡山市 山磨 行子

赤い糸ほどけた今は別の顔
愚痴話聞いて淋しき調和され

大阪市 田中 節子

やせ我慢それほど続くはずがない
傘おどりして雨を恋う泣き笑い

鳥取県 橋本 多哥由

生き甲斐を信じて影と手をつなぐ
肩書きが一人あるきをする多弁

兵庫県 北川 とみ子

弾めない毬がお庭で濡れている
握り飯 形を変えて並んでる

大阪市 島崎 孝一

美しい言葉に迷い距離をおく
悪戯な廊下わたしを転ばせる

和歌山県 藤井 春子

駄菓子屋の時計昔の音にきこえ
枯れそうだ水をたくさんのんで見る

岡山県 富坂 志重

目を病んで人の心が見えて来た
一人居へ首をふり振り風をくれ

姫路市 服部 一典

津和野鯉飽食のたり水ゆたか
一社では敬慕足らずや乃木八社

大阪市 宮本 奴夫

棟梁はカラスのような太い声
うそほんと娘おどけて父を見る
池田市 藤井計光

成田市 斎藤房子

天高し豊饒の秋食べつくす
フルムーン妻いそいそと服を選ぶ

唐津市 江川青琴

盆前に帰ると夢に出る亡夫
よくケンカしてはよく泣く孫娘

鳥取市 宮脇道子

七十歳恋の話もサービスよ
隣組子育てまでも口を出し

鳥取市 岸本孝子

赤いシャツ敬老会のために買う
原子力是非か言わず世話になり

大阪市 小林周信

先輩の向う傷聴く縄のれん
合格を願う夜食に娘が肥り

鳥取市 富山雄幸

角砂糖寂しい過去へ溶けてゆく
綿菓子の子真白き心巻いて食べ

和歌山市 楠見章子

脱日本身ぶり手振りの旅もいい
パフォーマンスしても二期めは嘲笑わせる

藪を掘る昭和の声のする畑
カーテンのねむりを誘う花模様

和歌山県 上岡正直

県民と国にはさまれ悩む知事
太い幹しっかりつかむ蟬の殻

和歌山市 和田美寿子

人参の赤は死ぬまで変らない
所得税申告したいが所得なし

鳥取市 山口しげる

言い訳を探し夜更けのコンビニへ
あこがれの旅はいつもの地図の上

鳥取県 藤山弘子

大切な記念日忘れもめている
世がかわり線香花火も味気ない

鳥根県 菅田かつ子

お月さま許せそうです何もかも
満身でかばってくれた日もあった

鳥根県 福岡博利

人の世を面白くする裏街道
コップ酒止めるドラマの終るとき

松江市 小西素子

制帽を被り昔の顔で行く
秋風は人恋しさとはかなさと

出雲市 川島和歌子

秋風に風鈴下ろし種を播く

夢の中 笑いころげて目が覚める

松江市 松浦登志子

秋深し里イモを煮てワイン飲む

お祭りの屋台の店で夢をかう

松江市 鵜飼陽子

味噌汁に青息吐息入れてみる

食卓をつぎ足し囲む鍋料理

松江市 松本知恵子

貝割れのひと夏深い物想い

寅さんとフラーリ出会える遠い町

米子市 服部朗子

捨て切れぬちびた鉛筆児はつなぎ

もぎたてのトマトを提げて無沙汰詫び

鳥取市 山本益子

寅さんはエンマの関所顔パスか

小さいが線香花火大人です

兵庫県 大谷幸次郎

心には二重帳簿がつくられぬ

うらなりのトマト残暑の味がする

大阪市 中田あい子

泣きに来てその後とんと便りなく

控え目を通した母は胃病持ち

大阪府 団野恒

トマト挽ぐ汗の結晶そのままに

法被着て母の背にねる祭の子

松江市 浦辺静江

おとなしくいつも小言を聞いている

いい趣味だ年考えず螺子を巻く

寝屋川市 瀧本八十八

鵜は無心満ち足りぬまま潜る川

謝ってばかりの日本魅力なし

枚方市 二宮紫鳳

ひまわりのような家族で客多し

ローン終え少しゆとりの二人旅

鳥取県 奥谷彩子

日本海借景に建つ父の墓

ワープロで乾いた愛が届き冬

横浜市 山下省子

仏の顔母は十度も許してる

その通りの注意よけいに腹が立ち

愛媛県 中居善信

八の字の眉だ優しい人だろう

実直な舌で本音を言いたがる

横浜市 上野天々

僕の空 日々爆音に守られる

米軍の弾 消費税かからない

それとなく探りも入れた無駄ばなし
 川崎市 和泉 見早子
 労われ敬老の日は疲れきる
 堺市 梶本 哲平

摩周湖は晴れてストレス霧消する
 唐津市 市丸 晴翠
 金使いすぎてカードで帰り券

前月分

順風満帆ご先祖様を忘れてた
 倉吉市 大下 智子
 余生上手に預金通帳ゼロにする
 豊作だ仏飯高く盛り上げる

舞台から落ちたら答え見つかった
 袋から出るとお金は飛びたがる
 品物にハートもプラスして贈る

川柳塔 (追加)

息子のような上司に顎で使われる
 米子市 鷺見 正子
 (新正子改め)

帰るなど長男にいう山や川
 散骨はわたくしは山 夫は海
 受話器から響く三三七拍子

弘前市 櫻庭 順三

嬉しさに再会の酒酌んでいる
 風樹の嘆ちの姿がやっと見え
 たまに出る都へ未練まだ残り

豊中市民川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午開場
 ところ 豊中市立中央公民館1Fホール
 (阪急宝塚線曾根駅東200m)
 会費 1000円(記念品・発表誌進呈)
 席題(当日発表) 板野美子 選
 宿題 「葉」 片岡湖風 選
 「火」 桑田砂輝守 選
 「音」 住田英比古 選
 「涙」 西川景子 選
 「光」 西出楓楽 選
 「情」 西田柳宏子 選
 「酒」 波部白洋 選
 締切 午後1時(各題2句)
 賞 豊中市長賞ほか各題に進呈
 主催 豊中川柳会
 豊中市立中央公民館

寝屋川市民川柳大会

とき 11月3日(祝) 正午開場
 ところ 寝屋川市総合センター4F
 (京阪寝屋川市駅からバス西①乗場)
 兼題と選者(各題2句・午後1時締切)
 「夫婦」 江口 度 選
 「化粧」 津田一江 選
 「手品」 西田柳宏子 選
 「横」 中田たつお 選
 「年金」 阿萬萬的 選
 「裁く」 橘高薫風 選
 会費 1000円(作品集・記念品)
 賞 各題秀句に賞状と賞品
 主催 寝屋川市川柳協会
 後援 川柳ねやがわ

沙湖抄

小出智子選

背囊じやないぞリユックを背負っている

掛けず今日もタバコを吸い続け

眉描いて守るべきもの何もなし

つきとめておこうと意気込んだ昨日

てんぷらでも食べに行くかと秋である

父が笑って米俵を担ぐ

人肌に曇る鏡よ生きたくなる

見比べて短き指を笑い合う

すず虫も沼のあたりの野に還す

かわいげのない子だけれどお客さま

少年と同じ花火を見上げてる

象の鼻キリンの首も生き上手

身の内をバッタの如き音させて

生き方の違いで跳んだ水溜り

美しい訣れだなんて 秋桜

季節はずれの薔薇がたのしく遊んでる

語り部も戦友も浮雲足早に

ひかえ目な座布団を選ぶ通夜の席

桃色も紫色も背きだす

さよならも言わず新幹線が出た

豊中市 田中 正坊

黒石市 相馬 一花

和歌山市 木本 朱夏

米子市 澤田 千春

西宮市 牧淵富喜子

鳥取県 土橋 螢

宝塚市 永田 暁風

尼崎市 田中 薫

米子市 林 荒介

鳥取県 新家 完司

鳥取県 上田 俊路

大阪市 西出 楓楽

鳥根県 松本 文子

大阪市 鍛原 千里

尼崎市 春城 年代

八尾市 高橋 夕花

唐津市 山門 幸夫

吹田市 山本希久子

出雲市 石倉美佐子

米子市 青戸 田鶴

一握りの寓話を拾う秋のシーズン
十階に住み神様に近く居る

森抜ける頃には多分春だろう
友情というたよりにならぬ糸の端

萩桔梗移ろいややし人を待つ
補聴器をはずして入る無の世界

教え子のりんごの出来を誉めながら
毎日平凡髪は少しづつ伸びる

火消し壺まだ捨てられぬ五十歳
妻はまだ知らぬ僕のかくし芸

針箱の中を時折確かめる
豊作を雀が森へ言い触らす

紅バラのような老後はなさそう
会いたいとゆうてくれはる人がいる

抱きしめてやらねば消える茜雲
折り紙を開いて記憶呼び戻す

秋半ば私に見合う絵が描けぬ
二重にも三重にもなれる母の腰

帰れない旅の用意もしておこう
足もとの確かを見つめあつた旅

占いの半分ぐらい信じてる
花びらと過去を千切っている真昼

優先座席わたし疲れているのです
遺言を書いて破ってひとり夜の

雲さんに相談してはお弁当
僕の前世知っているかもしれぬ犬

尼崎市 長浜 澄子

大阪市 堀 いくの

米子市 足立由美子

西宮市 門谷たず子

和歌山市 田中 輝子

今治市 月原 宵明

弘前市 斉藤 蒔

米子市 政岡日枝子

鳥取県 鈴木 公弘

米子市 石垣 花子

和歌山市 吉村さち子

綾部市 藤田 芳郎

八尾市 生嶋ますみ

高槻市 守先 伸子

松原市 小池しげお

和歌山市 古久保和子

西宮市 奥田みつ子

鳥取市 小谷美ツ千

岡山県 小林 妻子

寝屋川市 森 茜

大阪市 三輪 式美

弘前市 佐治千加子

芦屋市 黒田 能子

堺市 桜沢あかり

寝屋川市 平松かすみ

青森県 田中 叶

右の耳左の耳を使い分け

安楽だ尊厳だとて寿命かな

思い出を老眼鏡で読み直す

プラス思考きつと明日は晴れになる

美しいだけで茶の花にはなれず

余生です退屈なんてしてられぬ

童心を戒めるのか栗のイガ

満天の星メルヘンに誘えり

生き甲斐を問われポケット探して

天運に任せましたと澄んだ目に

腐葉土になって枯葉の恩がえし

プライドをもって職安通いつめ

病院は黒字健保は皆赤字

総選挙はくは気になるタムの水

好きだからあなたとの幅あけて

生きるのが嬉しくなってくる字引

「男はつらいよ」男に残したメッセージ

右あがり右さがりとて人の癖

平成の孫にやわからぬ蚊帳の味

九月の海 忘れものしたような顔

血圧が上がった罪なアドリブだ

ノーという勇気生き残りのために

地図にない道を歩いてきた夫婦

ロウソクがゆらゆら今日のリズム変らない

枯れても四ツ葉若い日の日記帳

双六の上がりは遠い夏休み

大阪市 稲本 凡子

横浜市 菱田 満秋

鳥取市 岩原 喬水

鳥取市 植田 一京

大山市 早川 盛夫

大阪市 榎本 路児

和歌山市 宮口 克子

広島市 流 奈美子

大阪市 三浦千津子

京屋川市 堀江 光子

八尾市 宮崎シマ子

出雲市 吉岡きみえ

宇部市 平田 実男

枚方市 前 たもつ

堺市 志田 千代

京屋川市 太田とし子

今治市 越智 一水

唐津市 岩崎 實

唐津市 田口 虹汀

堺市 たにひらこ

松原市 玉置 重人

鳥取市 西原 艶子

香川県 川崎ひかり

八尾市 宮西 弥生

和歌山市 福本 英子

唐津市 市丸 晴翠

再会へコップの水がさわぎだす

コスモスを描くと訣れた恋になる

いつか垣根を飛び越えてゆく娘の手まり

夕ぐれて挽歌は一步ずつ近い

スパゲッティくるくる女の嘘を聴く

親切な友にお尻を叩かれる

口癖の勿体ないで部屋を埋め

両隣 模範亭主がいて困る

仮の世に不倫讃歌が流行るなり

なわとびに入りそこねてからの鬱

ひよつとこの仮面を置いて故郷を出る

杖ついていても紙コップは受ける

いい話だけ聞きたがる耳の穴

取り敢えず御飯を食べて考える

えんぴつの長さ比べている思案

キャリアウーマン愛もしっかり手にしてる

知らぬ振りしている母の目に負ける

野菜市みんな素顔でやってくる

急行の停まらぬ駅と仲が良い

ほおずき熱れる孫も母になりました

少年に還る祭が里にある

もすこしの夢見残したこぼれ萩

球根を集めています九月です

考えがまとまりロダン立ち上がる

この指に淋しがりやよ寄っついて

結び目を確かめ合っかごめの輪

横浜市 近藤 道子

三重県 佐々木森哉

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 中井 ゆき

鳥取県 武田 帆雀

富田林市 藤田 泰子

横浜市 荒井 広和

岸和田市 井齋 一齋

京屋川市 岸野あやめ

八尾市 村上ミツ子

大阪市 野村ダホネ

鳥取県 乾 隆風

和歌山市 岩本美智子

鳥取県 田村きみ子

西宮市 西口いわゑ

横浜市 後藤 早智

和歌山市 青枝 鉄治

弘前市 中山 雅城

京屋川市 江口 度

岡山県 矢内寿恵子

出雲市 竹治ちかし

大阪市 日阪 秋子

西宮市 亀岡 哲子

箕面市 岩津ようじ

今治市 村上久美子

旭川市 朝倉 大柏

キリギリス秋のダンスをしているよ
節くれの指切りだからたがわな
老春の恋不時着を繰り返す

ペン先は本音に遠いまま草々
役終えた案山子に続く白い闇
雑草も負けず句は持っている

追伸の一行うまく逃げられる
間髪を入れず断るタイミン
駆け込み寺へ駆けてゆくのはおとこ達
仏壇の前に座ると泣けてくる

これでいいの夫にも納得をさせて
宝箱一人息子の嫁のもの
神さまはさすがきつちり見てなさる

同窓会いつも元気なのは女
病む身には騒がしからう波の音
夢一つください私は枯すすき

足許が見えなくなつた石頭
コスモスの揺れる思案にとらわれる
まっすぐに言おう夫は側にいてほしい

不自由を身におきかえてポランティア
肩パット取れば可愛い女です
愛妻家が増えてなんだか物足らぬ

もの忘れ今日の夕陽にいたわられ
欲出して生きてみようか新世紀
カサブランカみたいな傘が揺れている

ライバルと面と向って飲むビール

鳥取市 近藤 秋星
和泉市 中川 楓
吹田市 西岡 豊
京都市 都倉 求芽
和歌山市 山口三千子
鳥取県 谷口 次男
砂川市 大橋 政良
和歌山市 桜井 千秀
川崎市 和泉見早子
和歌山市 松崎 幸子
大阪市 渡部さと美
米子市 小塩智加恵
八尾市 村上 剛治
鳥取県 春木圭一郎
茨木市 堀 良江
岡山市 藤原 一平
倉敷市 田辺 灸六
貝塚市 池田寿美子
横浜市 山下 省子
米子市 服部 朗子
和歌山県 杉山 精子
米子市 光井 玲子
富田林市 片岡智恵子
大阪市 板東 倫子
鳥取市 坂田和歌子
枚方市 二宮 山久

秋茄子を山盛りたいて食べました
蛇口から朝の息吹きが溢れでる
友情の厚さハガキに太い文字
何時の間に白髪断りなく増える
秋が好き野菊一輪あればよい
囑託で残り西陽を友にする
遠目にも母だとわかる丸い背な
労りが足りぬと錆びた釘の意地
開けっ放し鍵はもたないキリギリス
紅引いて心の中は覗かせぬ
友情は忘れた頃に来る便り
夕陽いま沈むなんにも無い海に
積木積む明日の命を予約する
親の鞭忘れていない花が咲く
風鈴の秋は淋しい音で鳴る
ふる里は気取らぬ風が温かい
新しい眼鏡世の中広く見え

田中正坊さんの句。「背囊」という物への思い出はあまりにも重
く、「背囊ではないぞ」と作者自身に言い聞かせるような表現がこの
作品のポイントです。下五を「しよっている」と読んで軽く深くの
思いに至りました。相馬一花さんの句。日常茶飯事のちよつとした
心の動きを一句に取り上げられています。「挫けずに」に誰が何と
言ってもタバコは止められない男の切なさをはつきり詠って、木本
モアさま感じられると言ったなら、作者に叱られるでしょうか。ユ
朱夏さんの句。女性が化粧をするとき、その日、その日の思い入れ
というものがありません。何故化粧をするのかと考える日もあり、守
るべきものがなくなっていることに気付くときでもあります。

松江市 松浦登志子
香川県 木村あきら
唐津市 仁部 四郎
高槻市 乙倉 武史
寝屋川市 井上すみれ
鳴門市 八木 芳水
横浜市 明渡トヨ子
出雲市 板垣 夢酔
和歌山市 山根めぐみ
今治市 塩路よしみ
唐津市 山門 タミ
鳥取県 林 露杖
弘前市 一戸 ツネ
鳥取市 杉本 孝男
和泉市 西岡 洛酔
鳥取市 福田 登美
横浜市 丹下智洋子

—水煙抄

秀句鑑賞

—10月号から

肥後 和香子

憎いほど白が似合つて近寄れぬ

西村 りつえ

白とか紺は誰でも似合う色のように思われがちだが、むしろ逆である。セラー服の紺は、思春期の女学生の専売特許だし、ましてや白は、うんと美人か、若さの勢いで着るしかないと思つてゐる私には、無縁の色だった。しゃきつと糊の効いた白いブラウス。チラッと見える白の半衿。憎いほど白が似合つてゐるドキッとするイイ女には、かなわない。

甘えまだ残した靴のでかいこと

宮本 かりん

中、高生の足のかさには驚かされるこの頃。バスケットシューズの二十九センチや三十センチはざららしい。口とおしゃれは一人前の子の、親として監督を緩められない時期って、一番いいのかも。緊張感もあつて。

病棟の窓 陽は昇り沈むのみ

尾崎 黄紅

「黄紅」というお名前ですもの、モノトーンをカラーに変える力は、充分備えてるはず。「陽は昇り昇るのみ」を、確信します。孫の恋とうかが異性であるように

藤田 泰子

こんな愉快な句を作るおばあちゃんに、先ずは乾杯。自由が闊歩している現世といえども、アダムとイブを悲しませぬよう、恋愛は、「男と女」が定番でいいと思ふなあ。

大切な一人の親をもてあます

杉本 孝男

父と娘は、まあまあだったけど、母対娘のけんかほど他愛ないものの、第三者が困るのはないらしい。「もう、来ない」「来るな」と、百回くらいは言い合つてゐるはずなのに、今日もまた仏前に手を合わせるのも忘れ、冷蔵庫の中を覗いてる日常。

賞味期限過ぎて未練まだ残り

塩路 よしみ

賞味期限ストレスの牛肉の味って、とてもグーなの知ってます？ましてや男や女には、「句」って無いと思う。でも、死ぬまで賞味期限なしの句でいたいとひそかに想つてる欲ばりをお許し下さい。

食べ歩き着く所亡母の味

坂田 和歌子

実家に帰つては「味が濃すぎる」とか、八十近い母に文句いうものの、パーティの後など無性に恋しい味は、昔食べなれた味。生きてるうちに、教われるだけ、教わらなくちゃ。孫の書く森は童話が植えてある

橋本 多哥由

子供の絵や詩、書にはいつだって洗われる思いでいっぱいになる。メルヘンは持ち続けたいものである。

バイトした孫が千円くれました

亀井 円女

「年金がなんだ。リッばなお墓がなんだ」あー、この千円のために生きてて良かった。と、思えるほど読んだ私が感動しました。高卒が女の顔になつて秋

細木 子龍

桜の季に入社した十八歳が、あれよ、あれよの中に変身していく。そろそろ仕事にも慣れ、内面も外面も輝きのピークを迎える秋。あー、いいなあ。

そして、肩の力を抜いて生きようよと、教えて頂いた句で終わりといたします。

やさしさは神様からのプレゼント

服部 朗子

苜香のむ

西出楓楽選

デジタルに汗の鼓動が聞えない

眼鏡はずせば無防備になるわたし

赤ちゃんが遊べる森を見付けよう

散骨をするならクジラいる海へ

勢いよく転ぶわたしの防御法

目の上の瘤にもなれるはずがない

さざえさんちでちよつと一服してきます

鈴付けてから面白くなった猫

ふるりの叱ってくれた樹が枯れる

にわか淑女に模造真珠がよく似合う

分け入った森の中にも森があり

ひとり言人に話せば愚痴となる

不具合があっても今日が暮れていく

ぬげがらにまだその時の力見え

ラリルレロ言うてはならぬことばかり

コーヒータイム右脳ゆっくり動きだし

考える形で葎が立ち枯れる

油虫わが一撃は衰えず

曲がり角ちよつと戸惑う靴の先

大阪市 日阪 秋子

和泉市 中川 楓

米子市 政岡日枝子

富田林市 藤田 泰子

西宮市 門谷たず子

鳥取県 岩崎みさ江

米子市 林 風子

米子市 石垣 花子

鳥取県 さえきやえ

今治市 村上久美子

吹田市 山本希久子

岡山県 富坂 志重

米子市 白根 ふみ

吹田市 栗谷 春子

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 野々 圭子

羽曳野市 吉川 寿美

西宮市 牧渕富喜子

香川県 川崎ひかり

古塀に石榴割ける 凄まじさ
愛は即席 電子レンジがチンと鳴る
スキップがしたくて赤い靴探す
鍵穴を通って一番電車くる

自由とはあるとき淋し秋の月
空蟬に身のシルエツト重ねてる
まだ若いなどとお世辞で釘を刺す
趣味いくつ母の手毬はよく弾む

真夏日よ遠く近くにある記憶
充電のポーズ積み上げられる本
兄の化身か窓に來ている甲虫

花嫁について行きたい父の靴
死者生者まとめて吊す鯨幕
この頃の秋 回想の中にいる

人の和を保つ内緒が多くなり
白髪染め鏡が好きになりました
太陽の言葉が森にためてある

紫蘇もんで母の願いを深くする
化粧水の泡に小さな虹をみる
さくらんぼ夢はまだまだ捨ててない

言い訳を聞き流すから胃が痛む
陽の当る場所が好きだと影法師
無為無策 私に夕日赤過ぎる

信頼の大きな毯を高く蹴る

守口市 結城 君子

和歌山市 木本 朱夏

和歌山市 川上 富湖

和歌山市 古久保和子

岡山県 福原 悦子

横濱市 山下 省子

鳥取県 田村きみ子

鳥取県 土橋 睦子

和歌山市 榎原 公子

柏市 上鈴木春枝

西宮市 奥田みつ子

鳥取市 森 明美

米子市 林 瑞枝

和歌山県 杉山 精子

和歌山市 岩本美智子

大阪市 神夏磯典子

横濱市 川島 良子

米子市 足立由美子

岡山県 矢内寿恵子

八尾市 生嶋ますみ

芦屋市 黒田 能子

松江市 安食 友子

松江市 佐野木みえ

大阪市 三浦千津子

東京都 山口 新子

火を抱いた男ばかりを好きになる
 絵草紙の裏表紙にもひそと秋
 持ち越して刻の流れにまかさうか
 派出るほど笑いたい秋深し
 時効です米寿の母の泣きばくろ
 玉すだれ逢う約束へ落ちつかず
 幸せて笑ってほしい泣きばくろ
 手鏡を取れば月日の流れ知る
 こだわらぬ齡に厳しく咎められ
 いっぱいの和服ダンスで発酵し
 東の間を憂心 赤いバラ食べる
 パフはたき一人芝居もうまくなり
 連れ合いを亡くした後の白い風
 目をつむるとわたしの海が満ちてくる
 ひとしきり泣いてドラマに遠い米を研ぐ
 正論を吐いて女の一気のみ
 ああ初恋レモン絞った味がする
 押しボタン優越感で渡る道
 子には子の矢印がある窓の星
 大臣がかいわれ食べる茶番劇
 ところどと夫じっくり攻めてくる
 アドリブで善人の顔作っても
 声に逢う只今留守にしています
 煮ころがし亡母の匂いを呼びもどす
 徒ひとつ昔を語るおもちゃ箱

堺市 たにひらころ
 寝屋川市 森 茜
 鳥取県 西原 艶子
 吹田市 茂見よ志子
 鳥取市 岸本 孝子
 徳島県 安宅美代子
 米子市 木村富美子
 大阪府 辻川 慶子
 大阪府 本間満津子
 堺市 志田 千代
 富田林市 中井 アキ
 横浜府 近藤 道子
 唐津市 浜本 ちよ
 西宮市 西口いわゑ
 川崎市 和泉見早子
 富田林市 片岡智恵子
 和歌山市 和田美寿子
 米子市 小塩智加恵
 熊本市 永田 俊子
 大阪府 板東 倫子
 八尾市 村上ミツ子
 大阪府 鍛原 千里
 横浜府 豊田 羊子
 兵庫県 北川とみ子
 倉吉市 淡路ゆり子

小犬啼く言葉通じぬもどかしさ
 蛸壺で恋にもだえているのです
 波被る覚悟で受けた火付役
 母として生きる覚悟の細い路地
 好きずきな方に向きたい風見鶏
 雲海を行きつ戻りつ旅おわる
 醉芙蓉咲いて逢えそな風の盆
 気を許し青信号を渡りきる
 土に還る日まで今日の彩
 明日の彩
 雨男の一人を仲間知っている
 古い糸たぐり寄せては女織る
 母ちゃんも畳も僕によく馴染む
 わだかまり解けて二次会 三次会

枚方市 森本 節子
 八尾市 大内 朝子
 和歌山市 玉置 当代
 大阪府 川久保睦子
 大阪府 藤田頂留子
 米子市 寺沢みど里
 大阪府 津守 柳伸
 和歌山市 吉村さち子
 八尾市 宮西 弥生
 尼崎市 春城 年代
 横浜府 糸矢加津子
 倉吉市 米田 幸子
 松江市 浦辺 静江

一句目―作者の感情に共鳴。なるほど、がっちりしたアナログ時計は生活感に溢れている。そして、その二十四時間は充実にしているものと信じたい。『汗の鼓動』の表現が卓越。二句目―眼鏡を常用している者にとって、それを外すのは裸になるのに似た気恥ずかしさがある。その頼りなげな様子が、七・七・三の破調から伝わってくる。三句目―作者は最近、おばあちゃんになられたと聞く。その事実を知らなかったとして鑑賞しても、えも言われぬ温味が感じられる。実感句の強みとはこのことであろう。四句目―最近流行(?)の散骨を、人間と同じ哺乳類のいる海としたところに、句の奥行きがある。作者の死生観まで垣間見える。

親

赤川菊野選



ストライクばかり望んだ親のエゴ
貧しさに育ちどの子も親思い
親父顔植山までも持つてゆき
親と子の絆故郷に置いてある
親ふたり兩戸の多い家に住む
長生きを邪魔にされない親になる
子を産んで親になるのを知っているか
親の画く地図には子等の夢がない
表礼ふたつどちらも親を捨てられぬ
過去帳から亡親がときどき咳払い
植山へ親を背負うた夢を見る
金のないお陰で仲の良い親子
親が子を語ると宇宙狭くなる
ふた親を亡くして恥をかき始め
父よりも母の説法身ここにたえ
欲深いところは親に生き写し
肉親を探す戦がまだ続く
漱洗う親子無口で日が暮れる
親離れ出来ぬ子供に羽根がない
父さんの後ろ姿にある誇り
親に世話かける孝行だつてある
追伸へ親をやめたい時がある

子龍 寿恵子 あきら 寿美 よし津 喬水 螢 希久子 雄々 洛醉 一壺 芳郎 しげお 洞庵 清芳 さち子 正雄 武史 康女 京子 ちかし

親潮が季節の魚をのせてくる
親しいがあまり深くは踏みこまぬ
両親のどちらに似てもお人よし
親の背を見せたい子供先を行く
ポケベルを持たせて親の縄を打つ
一人ずつ仕上げたて寒い置きこしたつ
子が集い親の威厳をとりもどし
美田など遺さぬ親でまだ元気
親の血を継いで息子もタイガース
子は親を選べず風に散る桜
親と子の絆結び目作らない
結納が来ても父親ケチをつけ
肩書が取れて親父は粗大ゴミ
帰巢性信じて親はひとり住み
子には子の計算がある親離れ

隆盛 剛治 ますみ ミツ子 ツネ 俊路 荒介 周信 重人 正剣 かおる 住雲 柳弘 高夫 陶美代子 てる 日枝子 多賀子 宵明 朝子 豊 朝子 俊路 荒介

賢い
賢いと云われ続けてきたギャツプ
面従腹背賢い嫁でそつがない
家柄に賢い嫁が馴染まない
賢さの尺度を探す嫁姑
奥さんが賢いそつな酒の量
賢いとおだてられては惚けられず
ずる賢い貌には見えぬ風見鶏
賢い子にされてお行儀よく座る
賢い子になれと地蔵を撫でさせる
賢い子はかり揃うてはつとかれ
賢さが裏目になって不覚
包丁の切れ過ぎ頭脳に似て怖し
賢さを計る物差し置いてない
もう少し賢く見せる眼鏡拭く
小賢しい尻尾がドアに挟まれる
小賢しい犬で器用に尻尾振る
隣人に賢いひとがいる安堵
美辞麗句賢い顔を汚さない
賢くて働く汗を疎んじる
合鍵の賢さ相手知っっている
賢い人の所作を見ぬふりして学ぶ

田中透太選



高明 朝子 恭昌 保州 たもつ シマ子 房洋 和重 愛論 寿恵子 狸村 ちよ 大輪 久美子 美代子 帆雀 重人 佳雲 雄々

生かされて毎日知恵を食べている
ゴミの日もちゃんと覚えてる鳥
聡明の森に酸素が不足する

賢いの意味を子どもは知っている
中学になると賢いとは言われぬ

目立たない賢さ本物かも知れぬ
賢くなれないと肥料をやります

賢人は後ろで綱を引いている
賢くて人に見せずに爪を研ぐ

賢母ではないが要に爪を研ぐ
沈黙は賢い妻の鞭である

賢さをやんわり包むオブラート
羅針盤賢い風に向きを変え

七転び賢くなつて起き上がる
賢兄の陰で腕力磨いている

要所要所に女はバラを置いておく
だまされた数だけ賢くなる財布

子が無くて賢い犬を自慢する
税務署で賢いはなし聞いてくる

盃が賢くまわる歓迎会
だあまつても賢いのはわかる

賢人と分かるそこらにもう居ない
運が良かった事しておく母の性

にぎりめしいつでも持っている男
軸

荒介
富喜子
芳郎
照子

虹汀

有一朗

典子

あきら

ちかし

寿美

四郎

日枝子

子龍

強一

希久子

夕花

俊子

よし津

宏章

とし子

好恵

しげお

門谷たず子

恐れる

小砂白汀選



恐れると距離がだんだん遠くなる
戦中派恐れるものを知りすぎる

欲みんな捨てて恐れるものがない
胃カメラを恐れて今年も止めておく

亡くなっておそれた父の価値を知る
テストなんか恐れぬ白紙出した頃

裏のある言葉恐れて妥協する
こわごととそれでも抱きたい若いパパ

目に見えぬ菌を恐れて手を洗う
本社から鬼の部長が来る日なり

恐れた地方転勤打診され
おとなしい妻が一番恐れる

目に見えぬものはやっぱり恐ろしい
サリンかと恐れて拾わぬ落し物

先生を恐れるうちは脈がある
親と子と恐れる尺度違つてる

世間体恐れビエロの厚化粧
肩書が出来て恐れる他人の目

自然破壊恐れることがきつとくる
県民投票結果恐れる米軍旗

倦怠期心他人になる恐れ
恐れないずれば欠ける夫婦箸

かおる

隆

重人

博友

志重

三和

愛論

とし子

武史

帆雀

まさと

朝子

たもつ

かつ子

一郎

俊路

花匠

好恵

高夫

柳弘

彩子

日枝子

英雄も恐れる妻の第六感
請け判を恐れ一万円包む

目に見えぬものを恐れて手を洗う
ライバルもこちらを恐れているはずだ

君付けて社長を訪ね恐れられ
血の絆崩れ恐れる花の冷え

戦争で無くした指を恐れられ
微笑みが何時もと違つてお医者さま

アルツハイマーに私ならぬとは言えぬ
将でない男の無口恐ろしい

人間を恐れてバイキン強くなる
何時の日か他人ごとでない紙おむつ

あなた誰さ母が言う日を恐れてる
活断層の上になが家が建っている

何をすると人と近所で恐れられ
男女産み分け神を恐れぬことばかり

のぞみつ恐れ長寿秋ゆるる
神木が呑み込んでいる釘の数

恐ろしい未来がよきオモチャ箱
許すから言えとやさしく迫る妻

千羽鶴飛ばねばならぬ日を恐れ
天

恐ろしいことがはじまる多数決
三宅 保州

軸

恐れるは自分が自分に見えぬ時

倫子
隆風
ちかし

四郎

正劍

雄々

大輪

和歌子

シマ子

忠男

達子

久美子

晴翠

夕花

佳雲

たず子

希久子

荒介

寿恵子

智洋子

洋

初歩教室

題一火

吐田公一

川柳によく使われる言葉の「見付け」とは、要するに着想のことであり、この着想のよしあしが、その川柳の生命を握ると言っても過言ではない。そこで「第一着想は捨てよ」とも言われ、最初に浮んだ句は安易な着想であり、誰もが思いつく句で同想句となりがち。

ではどのようにして「見付け」るのかとなると、そう容易なものではない。そこに川柳家と呼ばれる諸先輩の苦心があり、血の滲む努力のあとがある。初心者の方々にあまり酷な要求をするつもりはないが、少なくとも「見付け」の重要さを知って欲しい。(具体例は次号に掲載予定)

添削句

○真夏日に冷や汗になるもぐさの火 馬洗
暑い時の「お灸の火」とは面白観点。

ただ中七の表現に少し難あり。

▽真夏日に熱い我慢のもぐさの火

○カンテキのさんまの煙亡母想う 俊一

亡母の具体的な姿を詠んで欲しかった。できれば連続して投句していただきたい。

▽さんま焼く亡母の手つきが偲ばれる

○火の車そんな顔せぬ故郷の母 美子

着想も平凡。表現も直截的。

▽火の車愚痴もこぼさぬ母の意地

○女は恐いとうに火種は消えた筈 円女

上七であるのと、恋の火種は女に限らない。

男に代えても通る句で、句が動く。

▽ここは限定しない方がよいのでは――

○未練ある焼けばっくにづく火種

○相づちをうてば噂の火種落ちている 一典

▽どこにでも噂の火種落ちている

○孫の手の線香花火に小さい幸 多美子

中八。孫が持つ花火だから線香を省いて

▽孫の手の花火小さな幸をくれ

○火をつけて欲しいハートが膨れてる 道子

下半句にひと味欲しい。

▽火をつけて欲しい想いの人といる

○爪に火を点して生きた戦中派 美寿子

いい句だが、今までによく詠まれた句。

○ロウソクも無き仏壇へ手を合わせ よし子

本当にロウソクもなかったのでしょうか、

ありのままだけでは情緒がない。

▽ロウソクの火影にゆれている遺影

○火祭りが男の肌にしずく露 隆

汗のことでしようが、男の肌を強調すれば

▽火祭りが好きな男の燃える肌

○火渡りも楽し修業の数のうち 一乗

下五で折角の見付けが説明句となつて

▽火渡りも観光化する修行僧

○薪能かがり火ゆれて幽玄美 登美

情景句が余程上手に詠まないと俳句調にな

る。川柳はできるだけ人間・生活を詠む。

▽薪能シテの動きにひかされる

○大文字やすらぎ乗せた別れ灯よ トヨ子

大文字||別れ灯||やすらぎ、同義で甘い。

▽亡夫ともしばし別れの大文字

○遠い日に二人でつかつた火ふき竹 タツエ

二人で使つたその相手に的を絞ると

▽火吹き竹亡夫も吹いてくれたあと

○残り火があるから紅をひいてます ますみ

女が紅を引かなくなれば、女でなくなる。

軽みの句。噛みしめれば原句に重配。

▽残り火をかき立てるよう紅を引く

○火の消えた単身赴任で呑むビール 捷也

淋しさでしょうが、多少創作してみても

▽左遷地のビールで消している火の粉

○門火焚く亡夫が好みの浴衣着て 智洋子

中八以後が冗長で、情感に乏しい。

▽門火焚く浴衣の亡夫惚びつつ

○心の火静かに燃やし文机 つよし

霧囲気はよくわかるのだが、何んとはなしに俳句的情景

▽心の火点し静かに書を開く

○吊り橋を渡り火を抱く思いうる 八重子
恐かった思いを表現されたと思うが、今少しドラマチックに詩われたらと思う。

▽吊り橋で男を試す火の女

○仕送りが終り変わらぬ火の車 ふゆ子
中七が気になったが、原句の方が良いかも

▽仕送りは済んだが今も火の車

○火種だけ残り愛妻先に逝く 宗明
愛(妻)と先(先)にが蛇足と思う。

▽やるせない火種残して妻は逝き

○恋の病焼け木杭に火がついて 晩翠
火のついた焼け木杭の恐ろしさ

▽火のついた焼け木杭の恐ろしさ

○みんなして焚火を囲む輪の丸さ 剛治
みんな「囲む」輪の丸さ、同義語を並べ立て、その実内容に乏しい。

▽古い先を焚火の中でする会話

○めらめらと青い炎の闘争心 省子
女の情念が演出されているが下六に難

▽めらめらと青い炎の嫉妬心

○終点は藁焼きをして出稼ぎに 銀波
終点の意が不明

▽出稼ぎへ藁焼きをする里の暮れ

○メラメラと日記を燃やし恋捨てる 彩子
捨てるか終るか迷うが、通常終るでは

▽メラメラと日記を燃やし恋終る

○くじ運が悪く火中の栗拾い かずお
当るとすればユーモラスになるのでは

▽くじ当る火中の栗を拾う役

○火祭りの好きな私も日本人 蕉子
中六を中七にすれば佳句

▽火祭りの好きな私も日本人

○消費税アップで家計火の車 茂代
この場合「家計」は余分では

▽消費税上がるとまたも火の車

○三拍子そろって燃える火の女 尚子
飲む打つ買う、女の場合買うはどうか。

▽三拍子そろって燃える火の女

○男から男へ渡る火の女 日出子
焚火して火傷した子が消防士

▽男から男へ渡る火の女

○火の会話聞いてしまったたばこ盆 碧
「火の会話」視野がいい。ただし、たばこ

▽火の会話聞いてしまったたばこ盆

○灰皿が火傷しそうな火の会話

▽灰皿が火傷しそうな火の会話

○火の様な恋をしらずに喜寿迎え まさ
ドラマ性を欠く。時には創作を

▽火の様な恋をしらずに喜寿迎え

佳句

残り火にかき立てられて行くダンス ミツオ
好きな人火種を残し旅へ発つ 雄幸

見張張ったツゲが回って火の車 義男
〇一五七北の果てまで飛び火して トキ

時事吟としては少し古くなるが
送り火を焚けばなにやら母の声 幸枝

投句三句共佳句。〇立派です。

輪の中にもめごと好きな火つけ役 志華子
面白い句。火つけ役は誰!?ご本人?

亡き母の火吹竹吹く姿舞ふ 美寿子
姿舞う・丸い背どちらとも言えないが

火加減でこんなに違う姑の味 行子
物置の火鉢に父と母がいる 志重

ふと覗いた物置に、ありし日の父母の姿
火鉢を通して連想した作者の目に感動

火を付けて男嫌いと言う女 忠男
こんな女(おんな)いますよね。男の情念に火をつ

けるだけつけといて

残り火にとどき風を入れてやる ミツ子

私の句

燎原の火となる大志まだ消えず

◇

題「窓」 11月15日締切(1月号発表)

添削を受ける句(3句)は、川柳塔用箋に書き、事務所へお送り下さい。

老地獄

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

若い妓は苦手年増がよいと聞く
帽子深めに苦手な人とすれ違っ
採血は苦手血管逃げ回る
ひとりには苦手いつも玄関開けてます
一番の苦手は君の笑顔です
ごさぶりの方がびっくりした叫び
肝臓の叫び届かぬ梯子酒
原爆ドームにずんずん沈む絶叫
思い切り叫んでみたいたバカヤロー
叫ぶこと忘れヒアスをする男
叫んだら大きくなつた落し穴
涙かくして男は修羅の森抜ける
失った涙鏡の裏にある
感激の涙拭かない方がよい
うるさいのが一枚かんでいた噂
相宿の女うるさい一人旅
胃袋にはうるさい小言など入れぬ
親類に大久保彦左が一人居る
うるさいが句読点だけは打っておく

大輔 伸子 よ志子 節子 重人 庸夫 秀夫 薫 女 石舟 しげお 武庫坊 瀧小 白漢子 マツエ 波留吉 とみ子 高栄 杜的

切り札は内ポケットにしまつとく
年金が遊び心をいましめる
一滴の涙に父は折れまじした
ときどきは飢えてありがたさと思う
絵日記は昔も今も西瓜割り
誰が教えたレールに置き石する鳥
都合よく列車に医者が乗っていた
心ときめく知らないことを教わりて
風はおしゃべり虚ろな窓をノックする
真剣に悩む些細なことなのに
あなたから逃げてあなたが気にかかる

富柳会 池 森子報

哲学の道で昔の絵を探す
橋と箸端にとまどう外国人
吹き寄せる端の落ち葉が舞い上がる
何時のことはるか昔の螢狩り
野山に風の訪れ待つ女
折り鶴に女の児この児を彩にして
針箱に女系の掟詰めである
田満な顔にもあつた傷のあと
宝石箱現在過去が同居する
幸せを貰う切手を貼っている
悲しみは箱に納めて今日は晴れ
好きだとは言えず螢火抱いたまま
螢など地から湧くよういた昔
言葉の端げんこつよりも痛かった
巻き寿司の端母の皿に盛ってある
輪の中の端にまつ赤なサクランボ

あきら 克治 艶一 稲子 萬的 紫香 ルイ子 澄子 スミ子 とし子 紅紫朗 (四) 勇 とも子 秀樹 文子 アキ 冬虹 昭子 二三子 鐘造 絹子 登子 (伊) 勇 昭水 智久 花梢

手をつなぐ闇の螢は亡父と亡母
一匹の螢が飛んで行く浄土
風が騒いで声をこらしている螢
端っこに異彩を放つのが一人

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

底辺でバランスとれた暮し振り
バランスのよい聞き役で瘦せている
石仏三体バランスとっている笑顔
白と黒バランス取れた老紳士
バランスの取れすぎ味気ないお人
ピサの斜塔ゆがんだままに保たれる
バランスもとれて夕陽のツインビル
言い訳を胸のひろさでうけとめる
胸の鬱方程式にないグラフ
初恋の小さな化石が胸にある
始めての終り 胸吹きぬけた風
昔の胸が茶髪を受け入れれず
傾いた屋根で雀は愛の唄
傾斜した若者達の土石流
好きだから君に傾く花の芯
傾いて母は小さくなって行く
地球儀を傾けて海をこぼした
魂のほろり傾く真夏原
朝顔が今朝は十五も咲きました
ほおずきや遠い思い出三姉妹
限りある命よ無花果は熟れて
決意してクルクル変わる風車

欣之 岳人 美代子 森子 向西 歌子 杜的 昌子 一笛 義芳 比ろ志 キク子 年代 正治 まさお 昭三 鹿太 すみ ころこ 薫 千恵 正子 澄子 ハツエ

踏鞴踏み曠野に弥陀の手を採す
胃袋を明日切り取る承諾印
ジョークだけ持つてあなたを待つている

白寿まで銀河鉄道待たせとく
ダンジリに軒つぶされて祭終え
親と子が風船とばす虎キチだ
余りものですと如才なく配る

川柳大版

坊農

柳弘報

さりげないアドバイスだが有難い
アドバイス聞き過ぎ自分見失う
選ばれた一句に妻のアドバイス
三角の眼で抗議核実験
きっかけは貴方がくれたアドバイス
忠告は後からじっくりきいてくる
角のない大阪弁で乗せられた
曲り角看板娘は自販機に
自惚れがアドバイスにも耳かさず
我慢にも限度あるぞと角をだす
あの角の灯が私のマリヤ様
種を蒔き一期一会の花咲かす
節水に花壇の水もひかえてる
炎天に花壇を守る人の汗
銀行に向く足が元氣年金日
食卓へ花壇の隅のミニトマト
口喧嘩負けて花壇に立っている
風鈴の音色アドバイスを変える
風薫る秋へ花壇は色を変え
賞に入り見直しされている花壇

武庫坊 弘治 瀧小 伊三郎 石舟 茂圭 白漢子 英太 醉照 河南子 喜楽 叭笑 和子 多香 青道 良花 柳昌 美花 美す 鉄心 かよこ 一歩 ダン吉 しげお 元紀 洛醉 雅巢

核をもつ国を非核が援助する
皆仮面脱いで話せとアドバイス
敗者から驕りなどないアドバイス
空元氣出して大きく翔んでいる
すばらしい花と喋っている花壇
アドバイス素直に聴いてこきました
病窓の花壇二度目の夏が来る
退院後花壇の手入ればつぱつと
中味のぞいから元氣出たチツッ
記念碑に花壇が映える原爆忌

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

残業はしない嬉しい夜だもの
真夜中の間違い電話ほつとする
血と汗で築いた人は石の下
違う夢追っておしどり夫婦です
毎日違う空を見ている屋根がわら
余り仲よくはないけどベアルック
新車のキー父のと忘れ違い棚
間違っていましたと言えは済むことを
勘違いちよくちよくあって老いの坂
嬉しいとあなたが笑うだけいい
心配に胃カメラが押す太鼓判
違つていてもここ迄きたの二人連れ
電話する相手で違う母の声
新子さんエントツの句は忘れません
孫うまれ情けの海におはれる
赤とんぼ秋の使いに違いない
幸せの計りそれぞれ違つてる

本蔭棒 美津留 希久志 醉舟 笑風 金太 まつお 重敏 柳弘 美津留 隆 友甫 朝子 ますみ 幸子 トシエ まさと 明子 けいこ いつぶみ 知佐子 美代子 民子 宏 剛治 ミツ子

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

見えぬ菌流す水にも気にかかる
粥占い神もたまには間違える
ひとりだけ違う道ゆく蟻がいる
どう見られようとともベアの老夫婦
演技とは違う涙があふれ出る
夫の命握っているのはわたし
割り勘をたしかめてみる酒の酔い

佳句地十選 (10月号から)

山下

美津留

孫の留守セーターちよつと借りていこ
古希すぎた娘の里帰り母が待つ
暑からう泡吹く蟹が歩き出す
留守の間にゴジラになっていた噂
留守電話甘い誘いを聞いている
留守電に入れた返事がまだ来ない
江美 まさ 向西 澄子 十四郎 夢之助
いつべんにあれこれできず苦勞する
手術後の氷の味よキスの味
黙秘権熱いうどんに崩される
あくせくの中でピカリと光る趣味
恵みある大地が核で汚される
いらいらのお薩流しがピツカピカ
九条の看板襷せる世を恐れ
鼻歌が朝の空気によく響く
歯ざしりの雑魚を束ねて乱を待つ
石庭と向かう素直になれるまで
和香子 恭昌 朝子 道子 みつ子 久光 利治 楓楽

留守がちな隣の枇杷が熟れている

ああ旨い唇の泡拭きながら

うらはらにやせる思いも太りゆく

太った腹の母にもあつた泣きぼくろ

キャンドルの夢をまだ追う四十路の娘

キジ鳩も秋の気配の中に居る

意地ばかり張って弾ける鳳仙花

一生の仕上げと蟬が声を上げ

岸和田川柳会

田中

文時報

あの元氣まさか明治生まれとは
忘れまゝまさかの時のあの悪夢

いじめつ子まさか吾が子も居たなんて

保険屋がまさかを狙う空の旅

梅干しがまさかの時の非常食

見事な達筆に頼む表札

玄関へ見事と言わず鉢を置き

書道展見事な筆の流れ見る

定年離婚見事とんでん返し見せ

無駄花もあつてゆとり無駄と思いつ

毛が生えるトニック無駄と思いつ

無駄な品少しも無かつた戦時中

あれも無駄これも無駄だと老い二人

無駄使いさせろ小遣い孫にやり

塾教師半分無駄も知つてゐる

無駄な子は一人もいない子沢山

無駄省くように福祉が苛められ

他人から見れば無駄やろマイペース

私の野心かくしたサングラス

勇次郎 昌子 末貞一 正治 弘治 六浦 鹿太 いわお 路子 敏光 文時 一齋 狸村 けい子 瓢人 さよ子 洞庵 輝彦 弘象 鹿太郎 盛之 甚一 蛙城 金太 タン吉 柳宏子 苑子

めがねふきつつ言い訳を聞いてやり

眼鏡かけて歩幅を狭くする

老眼鏡かけて歩幅を狭くする

命ある言葉を求め聖書読む

賠償を求める声が恨に満つ

ころろさし高さを求め古稀生きる

寅さんが愛を求めてシャイな旅

百点は求めぬ元氣な妻でよし

原爆忌求める核のない平和

有森の笑顔求めに来たマイク

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

秀才が阿呆になれる阿波踊り

ソリ屋根で一才取つた正一位

煽てられ図に乗りすぎて後で泣き

サボテンが信じられない花をつけ

シャベリ過ぎ梅いが渦巻く不眠症

カブト虫土産に孫の夏終わる

日本列島祭りまつりで秋迎え

はかなき見は月下美人との宿命

娘の見合い母親ともに化粧する

啼き声にがまんも限度ある酷暑

夕暮れの打水だけが涼運ぶ

實際のところどうだと酌される

図太さは父にも負けぬ子供達

年なりの小さな努力忘れずに

図書館へ日参している受験生

孫居ればピンポン合図すぐに出る

気になって仕方なくって意図さぐる

きさ子 一弥 二南 基 みえ子 呂万 辰郎 富志子 ひで 萬的 坊太郎 あきら よしみ 吟笑 マツエ 放任 ひかり 治延 かおり 正雪 はつ恵 いさむ 千カエ 文仙 ふみ なみ子

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

目を覆う子の指の間にある戦火

ライバルは一つランクを上におく

ライバルは先を越された秋の風

ライバルはいずれにもない老い平和

人情を軽く抱いてる募金箱

さよふなら共にうふふと口押え

指で拭く涙に嘘はないだらう

向き合つて互いの尻尾見せません

窓際の椅子世の中をよく写す

人を許して指をさささないことにする

南大阪川柳会

金井 文秋報

不安などないがとにかく手を洗う

有効な策へ文珠の知恵を出す

ルールから外れた蟻が瘦せている

負けている方がルールにやかましい

気にはすれば空気も水もみな不安

老母ひとり田舎においてある不安

不安ちぎって捨てるお雲になった

理由もなくだんだん瘦せてくる不安

非常袋確かめてから床につく

寒村のルールを守る秋祭り

ボス猿が老いて姿を消すルール

ルール違反婦警笑顔で切符切る

ルール通りうまくやっている共稼ぎ

求人ルール密かに青田刈

軽い不安抱えています夏の風邪

あずき 欣史子 弘直 香住 清芳 留吉 田実子 能子 喜美子 シマ子 庸佑 千里 重人 楓楽 憲太郎 智子 トミ子 直子 志華子 寿美 智久 信博 久峰 萬的

熟練の指無造作にスキがない

無造作のよつで計算されてる

無造作にしわくちやの札差し出され

有効にバツジを使う視察団

うら盆会浮かぶ身内の走馬灯

やけくそになるなと浮かぶ母の顔

無造作に積む札束を覆う霧

不安材料のニュースに揺れる株屋街

有効な針とどめに一本打っており

京の闊浮かぶ送り火大文字

無造作に炊いたおかずを喜ばれ

リストラの旋風が舞う社の人事

川柳東大阪

森下

愛論報

送り火へ返せぬ恩を思いつつ

どなられた亡父しんんでる一周忌

しみじみと付いた脂肪を見て嘆く

定年の自由しみじみほつとする

古傷がうすく八月の白い雲

田周の古さ知っている木馬

包丁を研ぐのは昼間にしてほしい

へそ出しルックで包丁を使ってる

包丁がバック料理へあくびする

誰にでもやさしく出来る君が好き

親切へ誰とも告げずぬくい風

誰でもよい手の空いた者手伝うて

どっこいしょ声を揃えて網を曳く

どっこいしょおやつタイムへ一休み

柳宏子

半蔵門

三男

秋子

柳伸

頂留子

良

文秋

悟郎

章久

久子

公一

雅文

度

晋吾

愛論

弘直

信治

柳宏子

太一

治也

白洋

恭昌

朝子

文秋

東雲

元の二人で余生広げるとっこいしょ

キヨスクで牛乳を飲むどっこいしょ

どっこいしょ夕焼け雲が真っ赤っか

三幸川柳教室

三宅 保州報

口下手な男にバラを贈られる

ネジ巻いた朝は全開する蛇口

深い溝知らぬ他人の差し出口

埴輪の口何か話をしたそうな

口漱く裏も表もないように

惚れている蓼喰う虫と言われても

散りぎわの美学空蟬から学ぶ

かたつむりの不満を聞いたことがない

天道虫のサンバにのって披露宴

虫籠に蟬一匹の武勇伝

腹の虫宥めてつなぐ血の絆

虫食いの一生だつた亡父の地図

ナマクラになってゴロゴロだんこ虫

国民の声が届かぬ3から5

民話から赤い手毬が転げ出す

永田町から民の籠が見えますか

民謡に純な日本が生きています

臣民が人民になる民主主義

難民のうめきを聞いたパンの耳

進化する種はロマンを抱きつつけ

進取果敢社では男の顔になる

世の進むなかで政治の千鳥足

欲望があるから進歩ついてくる

たもつ

湖

真柳

朱夏

千秀

さち子

和代

めぐみ

武春

秀男

当代

みね

和子

利治

高夫

高タエ

美子

碧

保州

正雄

桂香

親路

鉄治

章子

貞子

正一

あいや

進学塾梯子している子の悲哀

迂回して進んだ道に明日がある

恐竜に学ぶ太古の進化論

鼻先の餌が私を走らせる

進入禁止夫婦仲にもあるマーク

若者の進路を阻む超水河

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

感動の余韻の残るドラマ観る

根気よく続けた日掛け今光る

月満ちて一人の命世に生まれ

鉢巻きの似合う男の芸達者

何もかも知らぬ顔している石仏

何よりの薬と思ひ万歩計

高騰の土地雑草がいばつてる

一生涯土を愛した大きな手

畑の土日照りに鉄も受け付けず

土いじりばつばつ老いの趣味に生き

土に生き泥にまみれて何十年

耳に手をそえて難儀にことばきく

お早うのことばで今日もすこやかに

終戦のお言葉あれから半世紀

御免とも言わず燕は土の城

冷静になるとことばも柔くなる

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

県民の意気が燃えてる森博

すんでからゾツと手術が恐くなる

秋の虫酒の肴に夫は酔う

佳世子

町子

初子

百合子

孝子

嘉平

光水

善代

涙腺の弱い男に騙される
 愛妻の酌で小さな猪口に酔い
 持てるだけ持ってみやげの母の汗
 あの子感虫の知らせか友が逝き
 相続税に持ってゆかれた玉の汗
 気は強いがおだてに弱いところがある
 出世する子感定退まで続く
 恋だろかこんな弱気を見る鏡
 足腰の弱い泥田に試される
 気丈でも涙に弱い八十路

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

無言電話よほど淋しい人らしい
 ひとり者だから電話をしてやろう
 早朝の電話 故郷に老母が居る
 留守電へ手こたえないサヨウナラ
 電話では言えぬことです会いましょう
 別姓にしてから嵩む電話代
 また無心しているらしくて電話口
 母の背は丸く小さくなってゆく
 信頼のひざに仔猫の眼が丸い
 丸いたまこ四角に切って食べる人
 いま賢治にふれ心いと丸う秋
 玉葱のずらりと並び過疎の軒
 冬瓜の丸さを分けて嫁と住む
 コンバスで描いた円には愛がない
 よその子と比べるママは大嫌いだ
 母の着物比べられないほどうまい
 幸せは比べられない露天風呂

市三 素水 美智子 芳乃 多美子 すす子 富美 可住 靖子 末野
 哲子報 みる子 しげお てる 春蘭 鹿太 佐江子 トミエ 絹子 キク子 義子 涼子 たず子 武庫坊 よし津 能子 ひろ子

訃報欄 そつと比べる僕の歳
 昨日より今日しあわせを思いたい
 現実と夢を比べる観覧車
 頼る子をはるばる遠い国に住む
 垣根越えまりはるばる旅に出る
 はるばると来れば遊んだ山がない
 はるばると来たのに老母はすぐ帰る
 膝の猫 蚤が居ないと物足りぬ
 なんにもない日驚くほどの寝坊する
 シャンソンが聴きたくなった秋灯下
 傾いたところが好きです京町家
 下手な洒落心の隙が覗いてた
 気休めに時々飲んでいらくすり

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

嶽の土落して拝むあかね雲
 八月の恋は忘れたいわし雲
 雲ひとつないから嘘はやめにする
 雲行があやしくなつて咳ばらい
 汲み置きの水が冷たい萩の朝
 行間に溢れる情け汲みあげる
 姑の気を汲むのがうまくなり平和
 水を汲むことから禪僧朝になる
 今もなお水汲みあげている風車
 ひっそりとロビーを去った赤い影
 劇的な出あいロビーで育つ愛
 禁断の夢と別れてゆくロビー
 宴はてたロビーにひとつ紙コップ
 カップルをロビーで送る夢送る

正坊 いわゑ 澄子 江美 佳秋 富喜子 紫香 さん子 はつ絵 道胤 杜的 萬的 房子 隆盛 いつふみ 一風 宏美 剛治 三男 萬的 度 森子 ますみ 朝子 弘直 年人

再会をいまかいまかと待つロビー
 あちこちで携帯電話鳴るロビー
 ロビーにはやさしきがある風がある
 枯葉舞う尼僧に解かれてはならぬ過去
 枯れ落葉尼僧のやさしい手に掃かれ
 純情な枯葉シャンソンきいて舞い
 一切の空を悟って枯葉散る
 からからと枯葉が誘う尊厳死
 枯葉みてハイネを読んだ日もあった
 祭だいが響く北の重み
 祭り笛金魚がもつと赤くなる
 自転車ですずぬる幻の祭
 すれ違ふ赤い鼻緒のまつり下駄
 御輿へ一寸こいこいと赤とんぼ
 暴れ御輿神は疲れて寝てござる
 祭り笛ボツンと千切れ雲が聞く

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

ストップがかかるとこまで走らねば
 よく見える雨が洗った天の川
 ストップしていないか寝息たしかめる
 悔いひとつ抱いて長い日暮れなすむ
 アルバムの顔はいつでも優しくして
 ストップにうっかり逆らいつけがをした
 一人居へ振り子の音が耳につく
 アルバムへタイムスリッパしています
 瞑想をストップさせたホトトギス
 ストップのきかないパパの飲みっ振り
 ロマンのないアルバムが淋しそう

賢子 祥一 柳幸 柳伸 頂留子 春子 夕花 たもつ 八寿子 白兔 美子 英一 泰 洋 シマ子 柳宏子 聖子 好栄 ちよえ 英子 はるみ 鈴江 民子 かつ子 博利 清泉 白汀

城北川柳会

吐田 公一報

一合の晩酌余生を噛みしめる
寅さんへその後交わりはないですか
そこにあるチャンスを腕が控え目で
そう強くならんといてやおなごはん
日本初五つ子はもうパパとママ
マニキュアを控える若い爪を持つ
一日の仕事が残る話し好き
甲子園目指す熱気の地区予選
減反に追い打ちかける夏台風
長いものに巻かれて見たくまだ孤独
旅終えて我が家の良さに気付く日々
ささやかな灯に明日がある母子家庭
金メダルかじって賞味美酒に酔う
安心をもらいに人間ドック入り
近道にしても越せない友の背な
情けには流されやすい鬼の面
金出して泣きに行きたい文楽座
子等果立ち女に還る薄化粧
優勝のその後札束追いかける
そろそろと靴の重さが身にしみる
ちよつとした言葉のはしに読む心
熟年と言われた花も実も知らず
飽食の世を黴菌に責められる
合掌の中に子の孫孫の幸
家族旅行わいわいわいと輪がぬくい
煩惱が春日の森に燃えつくす
孫がいて笑いが絶えぬ窓明り

秀夫 義江 春蘭 政風 史子 トヨ子 佐津乃 美代子 あい子 扇帆 久留美 ただし 千尋 高栄 あき子 一枝 とし子 倫子 典子 満津子 白峰 達子 純子 登美子 寿美子 八重

親が子を親思う通り雨
逆回りしての時計を持ち歩く
働いた汗ふき飛ばす白い泡

サークル檸檬

小林 一夫報

昭子 睦子 公一

前頭葉には古い折り目がつめてある
本音には遠くで首をたて横に
すれ違つたびに鮮やか昼の傷
ひとさし指を自分に向けて心病む
四面楚歌 雲はポツカリ浮いている
星ひとつ流れて雲は果てしなく
雲はまだ動かすところ揺れている
白熱の議論窓には雲一朵
ぽっかりと雲 天女の館かもしれぬ
生きのびた雲が秋の絵描いている
僕だけにキントン雲があつたらなア
雲低く罪なきもののみず死して
入道雲もう戦争はやるまいぞ
しばらくは心を去らぬ積乱雲

京都塔の会

松川 杜的報

栄

鉾建てに気負う男の縄の汗
気負うてる男の涙ふとみつめ
添うてみてはじめて良縁だとわかり
手擦れた父の鞆にある気負い
くされ縁あいこだんなど笑うとく
縁のない話彼女がふり向かぬ
縁あつて翔び立つてゆく子を送る
どん底で夫婦の縁は強くなる

女 求芽 吉之助 杜的 白溪子 葉子 波留吉

あれは妻縁切寺で伏し拝む
嫁つて欲し嫁かずに欲しい娘がひとり
逆縁にめつきり母が小さくなる
未知の世界求め帰らぬつとんば
人生に敗れた果てのUターン
父帰る赤い手毬が転げて来
コンバト帰る潮時知つて来
盆休み帰る故郷の無い暑さ
数知れぬ恥を重ねて生きている
愛無数星もわたしも絵の中に
浜の砂踏めば無数の夜光虫
思い出が無数にあつたコンバクト
本当の味方無数の中の妻
赤とんぼこの道往きし人無数
星無数火星に立った白羽の矢
人差指の先で呼ばれた大仕事
バラ活けて少し若やく姑の部屋
都落ちして燕来るこの町に
アイスクリームがあるので夏がやせられぬ
したいこと欲しいことはや遅すぎで
すだれ吊る一きわ高く蟬しく
壁一重せけんのことと思うとく

ローズ川柳会

山崎 君子報

庸佑 英一 百合子 百合子 諷云児 紫香 芳子 福子 正坊 友照 圭坊 瀧小 飛鳥 薫 ただし しげお 笑女 春蘭 美穂 年代 武庫坊 水客

裏口を開けてあるのに意地っぱり
許そうか干した布団をたたきつつ
許し合う目になってきた白ワイン
Tシャツもはずんでいます盆おどり
許されて許す心を知る酷暑

哲子

夏負けを治してくれる赤とんぼ
 送り火の消えて亡母との深い闇
 許されぬ罪を知ってる古日記
 この世の事はこの世で済ます盆の月
 蓮の花ゆらりゆらりと母がくる
 菊の咲く頃には許す気になろう
 許さねば一期一会の絵は画けぬ
 おばあちゃんばだんだん童話好きになる
 許してと涙を溜めた目が怖い
 盆太鼓どこかで亡母の声もする
 盆僧の薄きころもに涼もらう
 夜明けまではずむ故郷の盆おどり
 盆梅の窓は丸いか四角いか

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

トミエ 八重子
 貴代子 千春
 まさお 玲子
 澄子 富美子
 いわゑ 夕子
 武庫坊 保子
 年代 すみえ
 はつ絵 天雀
 君平 美世
 民平 日枝子
 義子 紫
 笑女 蕪
 薫風 布

縄文を堀れば伝説うすれ行く
 伝説の指の股から産む太郎
 伝説に出て来る鬼は憎めない
 大黒のいじめ対策聞きたい教師
 伝説を抱いて大杉天を突く
 伝説を産み落とす百年の酒倉
 後世に大蛇を語る神楽舞い
 伝説を醸す川上からの霧
 伝説が消えないだろうきのこ雲

川柳塔打吹

奥谷 弘朗報

晶子 瑞枝 春枝 寿々子 花子 荒介 恵子 千代 ふみ
 節子 幸子 玲子 勝見 季芳 孝恵 和枝 完 螢 睦子 かつみ よしえ 喜与子 雄々 玲坊 早苗 仙岳

故郷へ帰る車が数珠つなぎ
 強がりをつけては心狭くする
 人情いろいろ紙より薄いものもあり
 茶柱を信じて今朝の靴を履く
 ほたる川柳同好会 井上 直次報
 古い頑固相槌打たず咳払い
 相槌の間を心得て聞き上手
 相槌がほしいふたりのレモンティー
 相槌の打ち方ひとつ鍵となる
 目くばせてわかつてくれる人がいる
 耳に口付けた団地のニュース板
 平凡な真理教えた秘伝の書
 セーターへ思い伝えてくれと編む
 真相を伝える声の先細り
 伝えたい気持と違う言葉出る
 障子穴伝い歩いたマークなり
 待ちぼうけ伝言板の荒い文字
 伝えたい言いたい言えぬの字書く
 見上げれば秋を伝える錦雲
 病名を知らされきついその一夜
 きつい靴太りたくない娘の気持
 きついても励み耕す旨い米
 微笑んでいるが心底きつい人
 きつい顔犯人向きと役がつき
 ふり返るきつくて長い坂だった
 かたつむり最後にきつい坂がある
 結ばれた男結びがきつすぎる
 きつい顔損と思うが予備はない

博丈 帆雀 弘朗 馬洗 昭子 桂子 キヨ子 明光 博史 ただし 直次 善守 祥風 正三郎 よしろう まみ子 純次 眞郎 竹二 正安 清史 喜美子 保子 瀧小 久子

パチンコに子供置き去りあきれた世
へそだしのルックに親は驚いて
若いのにあきれるほどに貯めている

竹原川柳会

時広 一路報

眠れない夜は羊を連れてくる
早起きをすると言いが長くなる
心技体どれも未元で五十なり
熱帯夜今夜も蛙鳴くをやめ
蛙の子にもあつた負けし魂
変わる故郷蛙の声は変わらない
井の中の蛙に丸い小さい空
大臣になれる蛙の子もいるぞ
井の中の蛙で星の名も知らず
ホップステップジャンプ跳びすぎた蛙
水涸れて人も蛙も不眠症
おしやべりがとにかく好きな蛙たち
青蛙蓮のうてなで歌うたう
ギラギラと夏セミの声遠からじ
炎天を味方に稲穂膨らんで
不登校子供心も揺れている
今やっと人の心がわかりかけ
ドライフラワー心の抜けた日の私
心から笑える友の居て嬉し
川柳を心の友に生きて行く
娘の心読めてザブザブ顔洗う
つまずいて人の心の裏を知る
トウモロコシ送って心孫といふ
心機一転知らない町で絵筆選る

方郎 方郎
たけお 方郎
英子 方郎
高史子 高史子
中千枝 中千枝
蘭幸 蘭幸
笹舟 笹舟
美佐雄 美佐雄
貞子 貞子
静佳 静佳
螢 螢
英詩 英詩
一枝 一枝
静風 静風
菁居 菁居
蕪 蕪
笑子 笑子
淑子 淑子
房喜 房喜
夏喜 夏喜
臣子 臣子
喜久恵 喜久恵
蝸牛 蝸牛
栄恵 栄恵
喜美子 喜美子
千年枝 千年枝
節夫 節夫

大波が立つから本心など言えぬ
はびきの市川柳会 榎本 吐葉報

翔んで生き弾んで燃えた女坂
角立せず笑って済ます昨日今日
口ずさむ演歌へ孫の鐘一つ
黙祷の一声合図に蟬しぐれ
挨拶もひと際暑い時雨
一汗をビールの泡に宥められ
短世をやけに騒ぐか蟬しぐれ
方言で叱れば孫が笑い出す
風雪に耐えた夫婦の深い皺
引きがねを引くのはよそうまだ耐える
耐えるのを覚えて丸い輪が書ける
一筋に耐えやつと男の顔になる
オフィスでどん兵衛食べている夜業
オフィスの時計すこしも進まない
そこそこの相手と踏んだ見合婚
いざこざの風をくぐって来た余生
世話焼きがきていざこざに火を注ぐ
いざこざを起こす早耳早とちり
断りは上手な妻にまかしく
一筋の煙が消えて無に還る
読み耽る佳境団扇の手が止まる
軽くした相槌大きな禍になる
うなずいただけで仇にされました
相槌を打ったばかりに出る波紋
アメリカへ打つ相槌が調子よい
逃げ腰で相槌だけをうっている

一路 一路
さとみ さとみ
敦子 敦子
かつみ かつみ
四三郎 四三郎
たけし たけし
泰子 泰子
昭平 昭平
俊男 俊男
洞庵 洞庵
和樹 和樹
修六 修六
ガン吉 ガン吉
重人 重人
吐来 吐来
辰子 辰子
志洋 志洋
昇 昇
一壺 一壺
美代子 美代子
猿杓 猿杓
扶美代 扶美代
金太 金太
庸佑 庸佑
みつこ みつこ
りつえ りつえ

相槌で味方を敵にしてしまふ
耐えてきた基地オキナワが怒りだし
いざこざを避けて喋んだ姑の口
いざこざに疲れて地球熱を出し

川柳やがわ 江口 度報

窓口で計って貰うラブレター
ときめきを抑えて封を切る手紙
女文字の封筒炎連れてくる
バラ色の夢を運んで来た封書
熱血に苦手な恩師ひとり居て
うたかたの夢熱血のアトランタ
熱血の父さわかかな負けつぷり
若者の熱血過疎の村起し
四面楚歌熱血漢の勇み足
熱血の男でとても母思い
フルマラソン熱き血潮が失せぬ間に
借景の塔にかかった虹の橋
描きなおすたびに虹色あわくなる
冬の虹この世は綺麗ごとでなし
メルヘンの虹はころろの中に虹をます
ボランティア虹ころろの中に虹を抱く
放浪の旅憧れの虹に会う
都合よい時だけ笑顔もつて来る
都合が悪くなれば夫のせいにする
人間の都合で種のない葡萄
笛吹けどみなそれぞれにある都合
逆境の客来て益が騒がしい
時折はこんな優しい妻が居る

絢子 絢子
敏 敏
晋 晋
専平 専平
度報 度報
かすみ かすみ
一途 一途
たもつ たもつ
朝子 朝子
亜成 亜成
ルイ子 ルイ子
一風 一風
波留吉 波留吉
吉之助 吉之助
三千子 三千子
勇太郎 勇太郎
庸佑 庸佑
恵子 恵子
あやめ あやめ
文弘 文弘
時秋 時秋
雅文 雅文
博泉 博泉
亜也子 亜也子
洋 洋
黎之助 黎之助
静江 静江
小路 小路

目立たぬがいつも悪いをくれる山
うとんぐらいでばらしい話は出来まへん

光 子

川柳塔おとり

上田

俊路報

恋一つ拾う袋を持ち歩く
向日葵が今年も咲いた売れぬ土地
書道展出て昂りを陽にさらす
探して物をとるときき考える
噴水の虹を見て待ちぼうけ

とし 子
良 知
高 栄
冬 葉
度

岬川柳会

八十田洞庵報

溜めたウツ古い順から捨ててゆく
寝てもあんな年溜まるのよ
水不足かめを並べて雨を待つ
グイエット無理な計画すぐくずれ
無理しても次の世紀を見てやろう
万歩計無理に体力つけさせる
無理きかぬ足です視野を狭くする
鈍行でゆつくり旅をする夫婦
無理言うなおまえも親も大事だよ
ちぐはぐに起きて仕事を待つ夫婦
起き抜けの電話不安の受話器取る
呼び鈴で起きた顔にはゴザの跡
朝起きて今日こそあれもこれもして
共稼ぎ溜めて理想のマイホーム
溜めたいもの溜まらず二十脂肪増え
衝動買いストレス溜めているらしい
早起きて血圧下がる幸を知る
ちまちまと溜めたお金が狙われる
北の旅直線道路目に溜める
ごつつあんで部屋に舶来積み重ね

年 子
龍 弘
密 山
俣 子
洞 庵
みやこ
浪速子
正 美
と み
月 子
悦 子
よし子
勇
みつ子
ヤエ
里 子
庄 六
天 笑
孝 子
幸 子

父の夢むなしく消えた負け戦
洋服が素敵に似合つた父でした
ふる里は父の威厳が生きている
部屋がないので父上は居間にいる
謝辞を言う父の涙が美しい
父の背で男の汗が乾かない
帽子振って勇士送った基地の跡
寅さんの帽子目だたぬように消え
制帽をぬぐとやさしい父となる
鎮魂の祈り帽子を胸におき
暑い道猫も通らぬ昼下がり
暑くてもロポット不平等と言わぬ
炎天の畑に西瓜ごろ寝する
原爆忌黙祷の背を汗つたう
迎え火がお盆の情緒盛り上げる
この盆にお経一つを覚え足す
輪の中へお盆はいつは盆踊り
終戦の記念お盆にお水とり
夏盛り蟬しぐれきく里の盆
被爆の傷お盆が来ると疼き出す
盆僧の一泊早い般若経
盆提灯昔話に夜が更ける
鎮魂を胸にお盆の花火みる

伝 住
道 子
登 美
真 一
孝 子
俊 路
敬之介
悦 子
銀 嶺
艶 子
崇
宏 章
幸次郎
由多香
余志身
千 秋
舍 人
小 生
清 子
黙 光
みさを
風 花
雄 々

幽霊が忘れて帰る萩の餅
秋風に窓の網戸が薄汚れ
伏せておこ素焼きの壺にうつ一つ
幽霊を見た子どもは譲らない
身を伏せておこつて七十五日間
極楽に着いた合図の大文字
旗色を伏せて八方美人ぶる
テレホンカードまたたまります古い二人
エースのカード妻が握って放さない
生活費出すカードしか持ってない
ゆうれいの妻にとつと見放され
胸の奥開けてはならぬ窓がある
グラマーの幽霊お越し愛想する
視線伏せた羅漢の顔は亡父に似る
幽霊株路地をうろろろかぶと町
貴方ならゆうれいさんでいいんです
美しい人影揺れる向こう窓
登山靴履くと挑戦したくなる
昔気質カードにソッポ向く老人
伏せの姿勢で盲導犬は動かない
人事部に首のない人立っている
金になるカードを妻が持っている

ひろ子
淑 子
志 華 子
正 坊
楓 楽
絹 子
さと美
綾 子
義
英 子
佳 秋
みつ子
東 雲
源 一
正 雄
照 子
光 子
凡 子
久 峰
宏 子
恭 昌
鬼 遊
しげお
恒 雄
アキ
鐘 造
智 久

川柳藤井寺

高田美代子報

竹光の望み通りに死んでやる
腕白を静かに寝かすマンガ本
束の間の錯覚しわが消えている
何騒ぐ星のまたたきほどの世を
束の間の心の迷いなら醒めよ

翠 洋 会
藤 井
正 雄 報
希 久 子
蛙

天地悠久その束の間の一凡夫
 輪を抜けてひととき心干している
 束の間の夢寅さんの片思い
 束の間の迷いをモカの香にのせる
 もういいの束の間夢をみました
 束の間の命きれいなシャボン玉
 束の間を充電しての縄のれん
 束の間の油断逃げ場のないねずみ
 束の間の優越感がある呼名
 束の間の幸せでした夢の中
 百年は所詮束の間考古学
 束の間の夢の続きは明日みる
 真夜中のベルが空気を凍らせる
 カイワレを泣かした突然の名指し
 突然に会いたくなくて電話する
 突然に来ないで紅を引いてから
 突然の時こそ本音見えて来る
 行間で突然燃える炎の想い
 突然に姉が来てますいい話
 俄雨ご縁となった軒の下
 夜遊びで離婚話がでています
 カラオケで遊びおぼえた母のど
 遊び惚けて帰って来ない影法師
 鍵穴の向こうに夢を遊ばせる

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

宗一 花梢 志洋 政代 六点 治子 敦子 敬一 修六 史郎 かなめ 和樹 和子 正一 悦子 昭子 絹子 三郎 かつみ 昭水 キミ子 美代子 美房

わかめ手に瀬戸の夕日を見て帰る
 おみおつけ春の色添え新わかめ
 あきれるほど自我つらぬいて墓穴掘る
 別嬪があきれる大きなおならする
 母親はあきれながらも出してやり
 足踏んでも知らん顔して行く女
 狭くても母いる家はあたたかい
 狭い道を愉しみなから車椅子
 盆休み狭いマンション三世代
 狭くても楽し過ごす人が寄る
 郷愁を舐めるベッコウ飴を舐める
 よかったよかった二百十日も無事に過ぎ
 妥協癖ついたわたしはお人好し
 煙出ぬコンロで味気ない秋刀魚
 沈黙が肯定したとは限らない
 耳だけで足らず鼻までピアスする
 信州の旅情は霧の深いこと
 プライドが気安く尻尾振らせない
 すぐつむじ曲げるお方で困る旅
 ハイテクの機器狭くするオフィス
 プレッシュヤーにならぬ程度のノルマでも
 飽きもせずまたパチンコとあきれさす
 ノルマなど気にせぬ老いのマイペース
 度々の惨事に悶魔あきれ果て
 かいわれはあきれかえって夏ばてに

とつとり川柳会 武田 帆雀報

慶子 杜的 吉太郎 計光 英子 風く子 崎云児 つえ子 知香子 明光 落児 シマ子 瀧小 悟郎 重人 紫香 石舟 石女 正坊 博子 庸佑 武庫坊 一笛 恭子

世渡りが下手で箒がよく禿びる
 豆腐屋は笛を鳴らして世を渡る
 世渡りは苦手でわたし蝸牛
 世渡りの曲をマーチに変えてみる
 世渡りに携帯電話鳴り響く
 世渡りの旨い鴉が白く響く
 日本海と妥協するのも処世術
 へいへいへい私腹して六十年
 欠点が見える眼に蓋をする
 見てくれと言わんばかりの露出狂
 取り敢えず峰打ちにして様子みる
 見るだけでグイグイ買った事はない
 海の日には海を泳いだ夢を見る
 闇に目が慣れて人間がよく見える
 日焼け止め元は黒いが塗ってみる
 心眼に器の小さいわたし見る
 一ランク下げると妥協線見える
 風の日は風に従う街を見る
 圧力で何も話さぬ課長補佐
 前途ある芽を圧力が押し潰す
 水圧に気づいていない深海魚
 圧力がかかると噴火は顔出さぬ
 圧力をかかるとボスは顔出さぬ
 重圧に屈せぬ顎を持つっている
 雑兵に圧力かけて進め進め
 哀しみを隠す圧力だと知らず
 圧力の強い女で暑苦し
 圧力をかわして潜る舞の海

喜与志 崇 和歌子 輪多朗 圭一郎 北涯 石花菜 孝男 一夫 明美 一京 蜚 昭治 玲子 ひろ子 かつみ 雄人 大漁 美恵子 和枝 一瑤 喬水 (桐)宣 帆雀 多哥由 完司 舍人

柳界展望

かれ、同人の松原寿子さんが秀句に入選した。

刃こぼれが続く運命かも知れぬ 松原 寿子

★竹原川柳会創立40周年記念川柳大会は9月8日、二五七人が参加してたけはら美術館内「文化創造ホール」で開かれた。当日の各題天位句は次のとおり。

★第18回兵庫県民川柳大会がこのほど行われたが、本社同人の青枝鉄治氏が総合点第9位に入選した。

★第15回鳥取県没句川柳供養大会は12月8日午前10時から鳥取共済5階大ホール（JR鳥取駅前）で開く。兼題と選者は次のとおり。敗者復活吟▽中森葉士人▽バラ色▽尾崎泰山▽太い▽原宣子▽欲望▽本吉宗光▽ありがとう▽鈴木和代▽列

酒と点く 新家 完司
ツと点く 新家 完司
画布いっぱい頭のなかに
在るさけび 中原 諷人
募洗い父かと思う虫が跳ぶ
寺尾 俊平

★国民文化祭とやま'96文芸祭川柳大会は9月29日、富山県大沢野町民文化会館で開かれた。文部大臣奨励賞は次のとおり。

||谷季芳||ルール||近藤春恵||阿呆||徳岡本丸(各題2句・午前11時半締切)。参加費4000円(軽食・懇親会・作品集呈)、表彰は総合10位まで(出席者優先・1句1点方式)。欠席

無雑作に愛話めてある紙袋 石部 明

立ち直るチャンスを呉れた平手打ち 増田 紗弓

||川柳句集「銀海」(付郁子抄)(椋谷寿馬著・B6判上製本・154頁・頒価1500円・川柳塔社刊)橋高薫風序文・高杉鬼遊あ

火の海を逃げた記憶のヒロシマ忌 斎藤 流悠
どのコケシ抱いても匂う森がある 横山アキオ

★第19回阪神文芸祭の作品募集が行われている。川柳作品は雑詠2句以内で応募は原稿用紙に縦書き。参加料1000円、締切11月30日。選者は和田光代・萩原金之助・石井東魚・小松原爽介・谷口光穂・黒川紫香

川柳塔碑合祀法要 高野山大霊園内の川柳塔碑への本年度物故者の合祀慰霊法要は11月14日(木)午後1時から高井知行霊園

★第4回和歌山県川柳大会が9月22日、JA会館で開

宛先は〒660尼崎市東難波町5丁目21-8・兵庫県阪神県民局内阪神文芸祭実行委員会事務局

長厳修で行われる。今回の合祀者は椋谷寿馬氏ほか13名で、遺族ならびに募参加者の参加費は昼食費とも7000円。

団法人:」

▼訂 正▲

■10月号P103中段24行目「健康美輝く白い歯並びが」の作者名「みやこ」が脱落▽P110(柳界展望)第3段20行目「財団法人全日本川柳協会」↓「社

新同人紹介

藤井計光

紫香・吉太郎・寿美子・正坊推薦

投句は11月30日までに1000円を同封して左記へ。東津軽郡蟹田町役場・風のまち川柳大賞係、入選発表は6月下旬。

▽出 版△

うもん吟社主催・鳥取県川柳作家協会後援

■川柳句集「銀海」(付郁子抄)(椋谷寿馬著・B6判上製本・154頁・頒価1500円・川柳塔社刊)

★第5回風のまち川柳大賞の募集要項が決定した。応募句は官製ハガキ1枚に1人3句まで、締切は平成9年1月15日、選者は斎藤大雄・森中恵美子・尾藤三柳橋高薫風・寺尾俊平各氏、

句集紹介

『正本水客とその仲間』

川柳句集 わ

都倉 求 芽

かねてから熱望されていた正本水客先生の句集が黒川紫香先生のお骨折りで、このたび『正本水客とその仲間』として刊行されることになりました。卒寿のお祝いとのことで、まことにおめでとうございます。

前の『三人』が刊行された時は、まだ私は国鉄の職場句会でほんのかじりかけのころ、年齢では倍近く、柳歴なら何十倍の水客先生は、雲の上と言ってもいい存在で、それでいて優しくご指導くださり、時には幼稚な疑問にも長文の返事をくださる会長さんでした。

それが今日になって「仲間」として同じ句集に入れて頂くことになり、おまけに刊行委員の末席でお手伝いさせて頂くに至っては、何という幸せでしょうか。弟子冥利につきる感激です。そんな私に句集の感想をとのお声がかかりましたが、つとに定評のある先生の

句を、私ときが取り上げる術もございません。句会で披露を聞いていて、あつ、これは先生の句だ！と感じるほどすぐ分かります。そんな句がこの句集にはぎっしりつまっています。

そしてこの句集の圧巻は、何と言っても旅の句でしょう。紫香先生ご苦心による編集で列島各地を克明に歩かれた句が、北から南へ見事に読者を誘い込みます。巻頭に再掲された「三人」の座談会で、路郎先生が「水客君の句は旅の句において特にすぐれている。俳句にならずに立派に叙情詩としての川柳になるのだから」と絶賛されています。

かの芭蕉が弟子十哲を評した言葉を模すれば、「旅の句なれば水客に及ばず」とおっしゃりたいところでしょうか。『川柳塔』に毎月出ている座右の句の欄に、私の時も
僧正ヶ谷 雨も寿永の色なるか

を、ためらわずに挙げさせて頂いたことを忘れもしません。

そして協賛して下さった仲間の句の多いこと。水客先生の端正なお人柄と句に感銘されたのでしよう。また、紫香先生の全国区のお顔の広さが相和してこれだけ多数の方々をお迎えしたことは、まことに両先生のご人徳と存じます。薫風先生、八木千代さんの序

京都塔の会 吟行句会

とき 11月9日(土) 午前11時
集合 梅小路公園・東入口
行程 公園と「朱雀の庭」散策の後、
緑の館レストランで各自昼食
句会 午後1時から緑の館2階和室
兼題 雀・味わら・相談(各3句)
席題 当日雑感
会費 1500円(当日領収)

文にもそれが窥えます。

ただここで、お手伝いさせて頂いた者として一言お断り申し上げます。紫香先生発案のこの句集は水客先生を中心に、同じ趣味の仲間によって発刊されるまことに珍しいタイプの句集だから「わ」という名にしたい。「わ」は「和」であり、「輪」に通じるという水客先生のご意向で表紙にもある「わ」になったのです。このことを伝える一文のページがケラの時には確かにあったのですが、なぜか本番では欠落しているのです。そのほかにも不手際がございまして、どうぞ温かいお心でご寛容くださいますよう、お詫びとともに、協賛の皆さまに厚く御礼申し上げます。

櫻谷寿馬句集

『銀海』

宮園 射月芳

神様は本当に恨めしいことをしなされる。近ごろ、私の好きな人を狙い撃ちするようになり、次々と天国へお召しになられる。櫻谷寿馬さんも私の名簿に欠かせない人であった。

高杉鬼遊さんから句集発刊の話聞き、私も及ばずながらお手伝いすることを約束したのは5月19日の「いずも川柳会70周年大会」から帰路の車中だった。予定を聞くと、発刊祝いにビールで乾杯しようと言っていると、ここで夏の終らない内だなと承知した。その後、薫風主幹の序文も頂き、選句も済んで段取りは整っていたのに、先月号の鬼遊さんの追悼文にあるように8月18日発刊を待たずに浄土へ旅立たれた。本人に相談したり、意見も聞きたかったのにと悔やみきれない気持ちでこの句集紹介文を書くのは実に複雑である。

寿馬さんは土佐人らしく磊落な人で、川柳を始められて間もなく還暦記念句会を催され

たが、そのころ、経営していた工場も整理し、次の人生を歩き始めるのだと聞き、自分も出処進退はこのように潔くありたいと思つた記憶がある。

人生をひと先ず区切りドック入り

六十の目に卓上曆の厚さかな

幸せが見えずともよい坂登る

寿馬さんの言葉には、含みや、ひねっている所があり、人によつては椰揄されたように誤解されることもあつたのではと思うが、その皮肉の裏には、相手を認める思いやりと優しさがあつた。

論争のあと湯豆腐のやわらかさ

父の眼が演技を諦め分けている

勲章をくれる悪いことしないのに

祭壇に置かれる写真だから笑う

匿名で吾が身告発したくなり

両親へ花束嘘のつきじまい

裏切つたのが散髪をして現れる

下手の横好き程度の腕前であつたが、私と同じくらい囲碁と酒が好きで、中尾藻介、故谷垣史好さんらと一泊で基打ちの旅に行ったこともあり、飲むほどに談論風発というタイプではなく、いよいよ落着いて辛辣に星を突いてくるので、付合ひの仕甲斐があつた。

ビール酌ぐ一杯毎に嘘を酌ぐ

ただ酒に貧乏神はよくしゃべる
枝豆が酒徒列伝を論じ合つ

究極は一升瓶にある宇宙

これしきで酔い知る酒徒となり果てぬ
風貌や態度から剛直に見えるが、案外シャイで奥様にもあからさまに甘い言葉はかけられなかつたのではと想像するが、心底ではとても優しく思いやり、そして頼りにされていたのが察せられる。

貞淑が裁縫箱で疲れてる

ものいわぬ日も愛だとは知るや妻

楢山に坐ると横に妻がいた

阪神が何故勝つたかと妻に説く

妻の書くシナリオ通り生きてやる

やわらかい耳で聞いとく妻の愚痴

生前の寿馬さんを思い浮かべながら、私からの見方で句を摘記した。心やさしく、川柳を愛し続けられた寿馬さんの足跡を偲んでもらえればというのが私の願ひである。

今日中に終えねばならぬことはない

などとゆつくりしていたことを寿馬さんにお詫びします。なお、付郁子抄として最愛の伴侶であられた郁夫人の句が併載されている。

寝て居ても冬は静かに遠ざかる 郁子

想い出を抱いて何処へ行く落花 郁子

末長くのご健勝をお祈り申しあげます。

句集発刊のお礼

皆様のお陰で川柳句集『正本水客とその仲間』を十月一日に発刊することができました。ご協力に厚くお礼申し上げます。報告いたします。

なお、限定発行のため、残部僅少ですが、ご入用の方は川柳塔社事務所まで、電話またはハガキでお申込みください。送本と同時に振替用紙をお送りしますので、折返しご送金ください。結構です。頒価は千円（送料三百十円）です。

川柳句集『正本水客と
その仲間』刊行委員会

代表 黒川 紫香

江原とみお川柳遺作集

居 酒 屋

- B6判 106ページ・489句収録
- 頒 価 1000円（送料 240円）
- 〒689-23 鳥取県東伯郡東伯町徳万597
新家完司方 江原とみお遺作集刊行会
TEL 0858-52-2414

文化芸術・芸能祭

八尾市川柳大会

と き 11月17日(日) 正午開場

と ころ 八尾文化会館4F第1会議室

(近鉄八尾駅下車)

宿題と選者(各題2句・午後1時締切)

- 「情け」 小山紀乃選
- 「開く」 田中新一選
- 「時 間」 波部白洋選
- 「嬉しい」 土田欣之選
- 「思 う」 杉野睦朗選
- 「叱 る」 赤松隆男選
- 「当 る」 西田柳宏子選
- 会 費 2000円(鉢植花・軽食)
- 懇親宴 3000円(希望者のみ)

主 催 八尾市・八尾市教育委員会

後 援 八尾市文化芸術・芸能祭実行委員会
八尾市市民川柳会
川柳クラブ「わたの花」

11月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 歯・枯れる・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	2日(土)午前11時から 富田林市民川柳大会	富田林市立中央公民館 表紙裏参照 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
川柳 ねやがわ	3日(日・祝)正午から 寝屋川市民川柳大会	寝屋川市立総合センター4F 本文P75参照 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
堺川柳会	7日(木)午後1時から どうも・モデル・痛い・野性	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
京都 塔の会	9日(土)午前11時集合 雀・味わう・相談	秋の吟行句会 本文P97参照 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時から 人気(にんき)・大物・天国	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 踏む・本・変わる	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 日向(ひなた)・断つ・ひそか・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時から 派手・喜ぶ・夜	豊中市立蛭池公民館 阪急宝塚線蛭池駅西へ150米 〒560 豊中市蛭池中町3-10-28 井上直次
南大阪 川柳会	15日(金)午後6時から 追風・巧者・雑巾・当然	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸和田 川柳会	16日(土)午後1時半から 未然・無数・目玉・もっとも	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
東大阪市 川柳 同好会	16日(土)午後6時から 女難・コンビニ・静か・待	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
八尾市民 川柳会	17日(日) 正午から 八尾市文化芸術・芸能祭川柳大会	八尾市文化会館4F 本文P100参照 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎マ子
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 漢字・映る・珍しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木) 正午から 失う・恩・カラオケ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
はびきの 市民会 川柳	24日(日)午後1時から 余裕・粘る・コピー・そろそろ	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★今月で本誌の編集長の任についてから6年になる。6年間と言えば、大学4年の業を終えて大学院修士課程を修了する期間に相当するから決して短くはない。このあたりで、私の編集者としての「功罪」をふりかえってみたい。

★まず手をつけたのは、裏表紙内側のページに掲載されていた「編集後記」を本文最終ページに移し、本社会・作品募集を現行のよう改めたこと。次に「柳界展望」を本社を中心とする柳界の動きを報道する新聞として位置づけ、ときには増ページして充実に努めた。そして25年間も手がつけられなかった「川柳塔」「水煙抄」の組み方について再検討を行った。

★これまで成行きまかせて同一人の句が段割れとなったり、ページが分かれていたのを、選者の協力も得て改善した。5句であれば氏名も入れて6行、4句ならば5行、3句ならば4行となり、6句組を除いてすべて24行か25行で納まる。こんな簡単なことを思いつくのに半年もかかった。

★このほか同人吟の「秀句鑑賞」を2ページ建とし、編集後記のページに投稿欄「ひとこと」を設け、川柳塔・水煙抄の投句用紙(8句記入)を綴じ込んだ。しかし、いちはん力を入れたのは誤字・誤用のチェックと新字体・現代仮名遣いの励行だが、これは「日暮れて道遠し」の感がある。どうやら功罪の「功」だけで紙数が尽きたが、「罪」の方は書き足りぬことも含めて別稿に譲りたい。(正)

川柳人の愛に触れて

倉吉川柳会赤崎の方々が夜遅く

九月初め主人と倉吉の句会へ出かけました。句会も済み、立ち上がろうとした途端、主人の体がグワリと傾き、倒れてしまいました。血圧が高く、頭の血管が切れたのです。私はただおろおろするばかり、そんな中で川柳会の方々のテキパキとした対応で救急センターに担ぎ込まれました。この七分間、真実が本心に嬉しく筆をとらせての対応で主人が助かったのです。(坂田和歌子)

ひとこと

▼そろそろ西日本でも、初雪や初霜の便りが聞かれる頃となり、若山牧水の「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は静かに呑むべかり」がびったり、飲んべえにとつて堪えられないシーズンの到来である。

▼そろそろ西日本でも、初雪や初霜の便りが聞かれる頃となり、若山牧水の「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は静かに呑むべかり」がびったり、飲んべえにとつて堪えられないシーズンの到来である。

▼とこころで酒とは本来、米と米麴と水以外の原料をい

つさい使わずに醸造された

の表示が義務づけられた。

▼75年から清酒には原材料の表示が義務づけられた。

▼なお協会からは、一銭のPR料ももらっていない

よび戦後の米不足を補った

の私だが、本心に米百分

なので、念のため。(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（1月号）

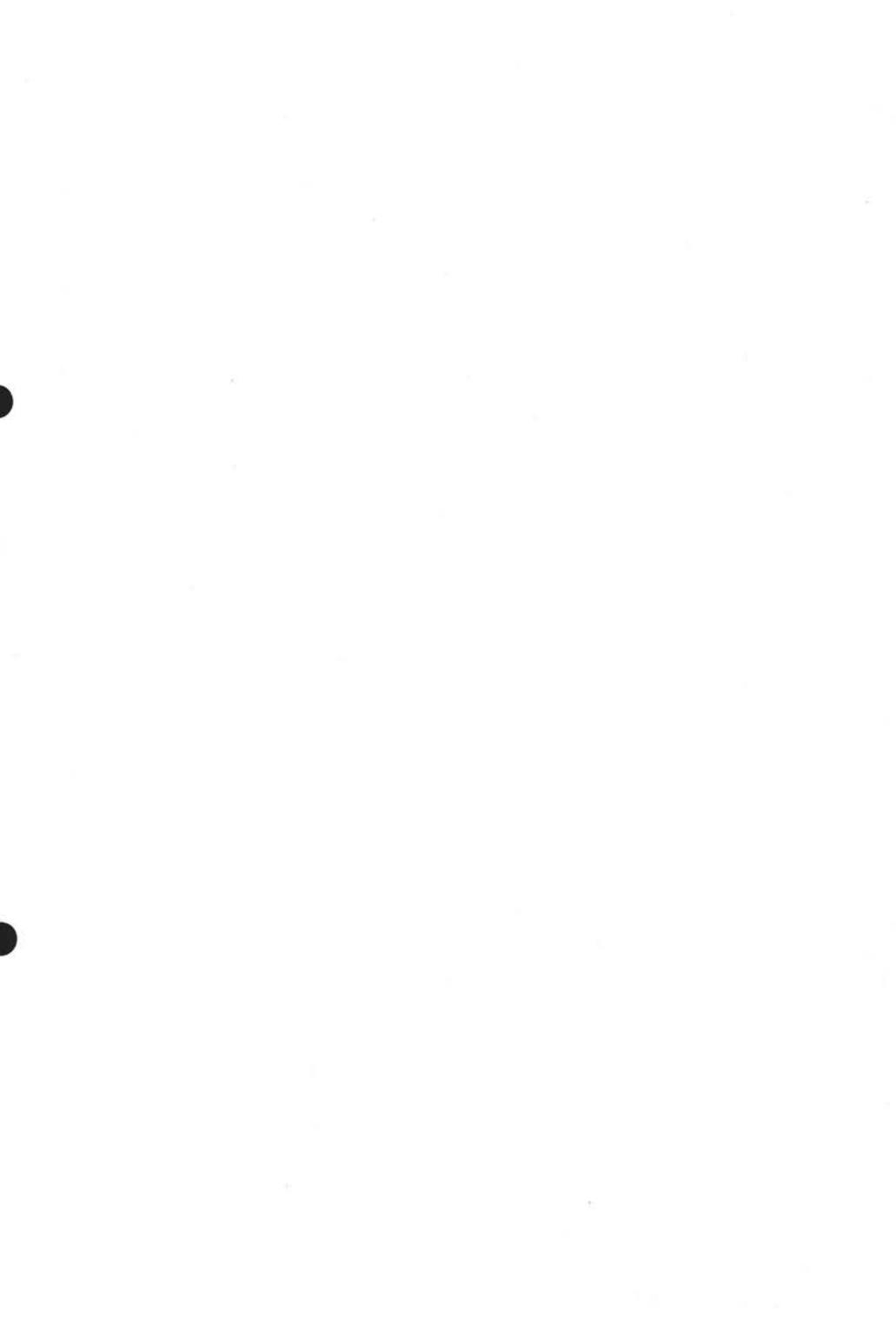
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

川柳塔 (8句) 橋 高 薫 風 選
 水煙抄 (8句) 高 杉 鬼 遊 選
 澎湖抄 (3句) 小 出 智 子 選
 茴香の花 (3句) 西 出 楓 楽 選
 課題吟 (3句) 「祝」 松 本 ただし 選
 「まぶしい」 舟 木 与根一 選
 「朝」 (3句) 吐 田 公 一 担当

1月号発表 (11月15日締切)

2月号

課題吟 「干支」 「縛る」
 「うとい」
 初歩教室 「水」

本社11月句会

とき 11月7日 (木) 午後5時半
 ところ メンズファッションセンター3F
 中央区内本町1-1 電06・941・1918
 (地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角)
 兼題 「水」 藤 田 頂留子 選
 「奪う」 桜 井 千 秀 選
 「無駄」 奥 田 みつ子 選
 「議論」 藤 井 一三三 選
 「贈る」 橋 高 薫 風 選
 席題 1題 当日発表 各題2句以内
 会費 500円

本社12月句会 9日 (月) 予定

兼題 「握る」 「公認」 「魔法」
 「糸」 「苦心」

夜市川柳募集

第6回「油断」 林 荒 介 選
 ハガキに3句 11月末締切
 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺 川 柳 会

NHK川柳作品募集

課題 「忘れる」 河内 天笑 選
 ハガキに3句 11月10日締切
 投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
 「文芸部」川柳係
 発表 11月23日 (土) 午前11時5分
 からラジオ第1放送 (予定)

「川柳塔」への投句について

- ①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限ります。
- ②澎湖抄・茴香の花欄および一路集 (課題吟) への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- ③各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

〒545

定価 六百元 (送料76円)
 半年分 四千元 (送料共)
 一年分 七千九百元 (同)
 平成八年十一月一日発行
 編集兼 橋 高 薫
 発行人 橋 高 薫
 印刷所 美 研 ア ー ト
 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 発行所 川 柳 塔 社
 電話 (06) 261-1691 四番
 振替 〇〇九八〇一五三三三六八番

第四回 全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる、「全日本川柳誌上大会」(日本財団補助事業)を昨年につづいて開催します。二十回の歴史を持つ全日本川柳大会、十一回を数える国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こそぞってご参加ください。

課題と選者(各題2句・連記)

- 「ゆっくり」 開発 秋醉——鈴木柳太郎 共選
- 「晴れる」 関 水華——青木 晴嵐 共選
- 「橋」 野谷 竹路——小嶋 旬月 共選
- 「活 気」 梶川雄次郎——川俣 喜猿 共選
- 「噂」 木野由紀子——辻 晩穂 共選

参加費 2000円(投句料・「平成柳多留」第4集代)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞

経済広報センター会長賞・財全日本川柳協会

会長賞・全日本川柳誌上大会賞

締切 平成8年11月30日(土)

発表・表彰 平成9年6月・第21回全日本川柳三重大会

参加方法 所定用紙(二枚一組)に各題2句と雑詠1句を書き(各題の選者が2名のため同じもの二枚を書くこと)、参加費と共に左記へ(用紙は

請求くだされば送ります)。

〒530 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX(06) 352-2210



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 941-9631